

切畑南遺跡

— 平成10年度県営ほ場整備事業に伴う発掘調査報告 —

1999

財団法人 山口県教育財団
山口県埋蔵文化財センター



写真1 切畑南遺跡全景（東方より）

序

山口県では、恵まれた自然環境の中、豊かな地域社会の実現に向けて、農業基盤整備事業等の諸施策が推進されています。

財団法人 山口県教育財団では、私たちの郷土山口を築いてきた先人の足跡を今に伝えるため、地下に埋もれた歴史的遺産・遺跡を、こうした開発工事との調整を図りつつ記録に留めて後世に残すべく、ほ場整備事業に係る埋蔵文化財について発掘調査を実施しております。

平成10年度は、防府市切畑に所在する切畑南遺跡の発掘調査を実施し、鎌倉時代後半から、室町時代後半にかけての集落跡を発見するとともに、当時の人々の生活文化を知る上で、数多くの貴重な手がかりを得ることができました。

この発掘調査の成果をまとめた本書が、文化財愛護への理解を深め、教育並びに学術研究の資料として活用されることはもとより、ふるさとづくりの基礎資料として広く活用されることを期待するものであります。

終わりに、発掘調査の実施及び報告書の作成にあたり、御指導・御協力いただきました関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成11年 3月

財団法人 山口県教育財団 理事長 牛 見 正 彦

例 言

1. 本書は、県営ほ場整備事業に先立って平成10年度に実施した山口県防府市切畑の切畑南遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書は、山口県農林部及び文化庁国庫補助を受けた山口県教育委員会の委託により財団法人山口県教育財団が実施した調査の成果を報告するものである。
3. 調査組織は次のとおりである。

調査主体 財団法人山口県教育財団（山口県埋蔵文化財センター）

山口県教育委員会

調査担当 財団法人山口県教育財団

山口県埋蔵文化財センター 主 査 村 岡 和 雄

同 指 導 主 事 椿 徹

同 林 信 行

同 網 本 徳 文

同 向 上 昭 彦

山口県教育庁文化財保護課 文化財専門員 岩 崎 仁 志

4. 調査に当たっては、山口県山口農林事務所農村整備部、防府市大道土地改良区、防府市教育委員会並びに地元関係各位から協力・援助を得た。
5. 本書の第1図は、国土地理院発行5万分の1地形図を使用、第2図は山口県山口農林事務所農村整備部提供。
6. 出土遺物のうち、石製品の石質鑑定は、山口県立山口博物館専門学芸員亀谷敦氏に依頼した。なお、石質鑑定は表面観察によるものである。
7. 本書が使用した方位は、国土座標（第3座標系）の北で示し、標高は海拔標高である。
8. 本書に使用した土色の色調の表記は、Munsell方式による。（農林省農林水産技術会議事務局（監修）『新版標準土色帳』）
9. 本書の遺構略号は、次のとおりである。
S B：住居跡、建物跡 S D：溝状遺構 S E：井戸 S K：土坑
S X：用途不明遺構 S P：柱穴
10. 本書における遺物のスケールは、3/10・1/3・1/4・1/8・1/10・1/12を使用している。
11. 本書の実測図・写真の製作及び本書の執筆・編集は、村岡・椿・林・網本・向上・岩崎が共同で行い、文責は各項目の末尾に示した。

目 次

1	遺跡の位置と環境	1
2	調査の経緯と概要	4
3	調査の成果	23
	(1) 建物跡と遺物	23
	(2) 溝状遺構と遺物	37
	(3) 井戸と遺物	44
	(4) 土坑と遺物	47
	(5) 用途不明遺構と遺物	70
	(6) 柱穴と遺物	78
	(7) 低湿地出土の遺物	81
	(8) 表土層出土の遺物	88
4	まとめ	89
	付 編	90

挿 図 目 次

第1図	遺跡の位置と周辺の遺跡	2
第2図	周辺の地形と調査区設定図	7
第3図	1地区遺構配置全体図	9
第4図	1地区遺構配置図(1-A)	10
第5図	1地区遺構配置図(1-B)	11
第6図	2地区遺構配置全体図	13
第7図	2地区遺構配置図(2-A)	14
第8図	2地区遺構配置図(2-B)	15
第9図	2地区遺構配置図(2-C)	16
第10図	2地区遺構配置図(2-D)	17
第11図	3地区遺構配置全体図	19
第12図	3地区遺構配置図(3-A)	20
第13図	3地区遺構配置図(3-B・C)	21
第14図	3地区遺構配置図(3-D)	22
第15図	S B 01実測図	24
第16図	S P 10遺物出土状況図	24
第17図	S P 10出土遺物実測図	24
第18図	S B 02実測図	25
第19図	S P 11遺物出土状況図	25
第20図	S P 11出土遺物実測図	25
第21図	S B 03実測図	26
第22図	S B 04実測図	27
第23図	S B 05実測図	28
第24図	S B 06実測図	29
第25図	S B 07実測図	30
第26図	S B 08実測図	31
第27図	S B 09実測図	32
第28図	S E 01周辺住居群実測図	33
第29図	S B 10・11実測図	34
第30図	S B 12・13実測図	35
第31図	S B 14・15実測図	36
第32図	S D 02実測図	37
第33図	S D 02土層断面図	37
第34図	S D 02出土遺物実測図(1)	38
第35図	S D 02出土遺物実測図(2)	40
第36図	S D 02出土遺物実測図(3)	42
第37図	S D 03実測図	43
第38図	S D 03出土遺物実測図	43
第39図	S E 01実測図	44
第40図	S E 01出土遺物実測図(1)	45
第41図	S E 01出土遺物実測図(2)	46
第42図	S E 01出土遺物実測図(3)	46
第43図	S K 04実測図	47
第44図	S K 04出土遺物実測図	47
第45図	S K 05実測図	48
第46図	S K 05出土遺物実測図(1)	50
第47図	S K 05出土遺物実測図(2)	53
第48図	S K 05出土遺物実測図(3)	54
第49図	S K 05出土遺物実測図(4)	56
第50図	S K 06実測図	57
第51図	S K 06出土遺物実測図	57
第52図	S K 07実測図	57
第53図	S K 07出土遺物実測図	58
第54図	S K 08実測図	59
第55図	S K 08出土遺物実測図	59
第56図	S K 10実測図	62
第57図	S K 10遺物出土ポイント図	63
第58図	S K 10出土遺物実測図(1)	64
第59図	S K 10出土遺物実測図(2)	66
第60図	S K 11・12実測図	68
第61図	S K 13・14・15・16実測図	69
第62図	S X 01・02・03実測図	71
第63図	S X 01・02・03出土遺物実測図	72
第64図	S X 04実測図	73
第65図	S X 04出土遺物実測図	73
第66図	S X 05実測図	74
第67図	S X 05出土遺物実測図	74
第68図	S X 06実測図	75
第69図	S X 06出土遺物実測図	75
第70図	S X 07実測図	76

第71図	S X07出土遺物実測図	76
第72図	S X08実測図	77
第73図	S X08出土遺物実測図	77
第74図	S X11実測図	78
第75図	柱穴出土遺物実測図	79
第76図	低湿地位置図	81
第77図	低湿地Aトレンチ土層断面図	81
第78図	低湿地A出土遺物実測図(1)	82

第79図	低湿地A出土遺物実測図(2)	84
第80図	低湿地A出土遺物実測図(3)	85
第81図	低湿地B出土遺物実測図(1)	86
第82図	低湿地B出土遺物実測図(2)	87
第83図	表土層出土の遺物実測図	88
第84図	中世の海岸線	89
第85図	足鍋法量比較図	90
第86図	足鍋底部拓影	91

写真目次

写真1	切畑南遺跡全景(東方より)	
写真2	1地区全景(南東上空より)	8
写真3	2地区全景(南東上空より)	12
写真4	3地区全景(南東上空より)	18
写真5	井戸と周辺の柱穴群	23
写真6	S B01全景(西から)	24
写真7	S P10遺物出土状況	24
写真8	S P10出土遺物	24
写真9	S B02全景(東から)	25
写真10	S P11遺物出土状況	25
写真11	S P11出土遺物	25
写真12	S B03全景(南から)	26
写真13	S B04全景(南から)	27
写真14	S B05全景(南から)	28
写真15	S B06全景(南から)	29
写真16	S B07全景(南から)	30
写真17	S B08全景(南から)	31
写真18	S B09全景(南から)	32
写真19	S E01周辺住居群全景(東から)	32
写真20	S D02完掘(東から)	37
写真21	S D02出土遺物(1)	39
写真22	S D02出土遺物(2)	41
写真23	S D02出土遺物(3)	42
写真24	S D03遺物出土状況(1)	43
写真25	S D03遺物出土状況(2)	43
写真26	S D03出土遺物(1)	43
写真27	S D03出土遺物(2)	43
写真28	S E01土層断面(東から)	44
写真29	S E01完掘(東から)	44
写真30	S E01出土遺物(1)	45
写真31	S E01出土遺物(2)	46
写真32	S E01出土遺物(3)	46
写真33	S K04完掘(北から)	47
写真34	S K04出土遺物	47
写真35	S K05遺物出土状況(東から)	49
写真36	S K05完掘(東から)	49
写真37	S K05出土遺物(1)	51
写真38	S K05出土遺物(2)	53
写真39	S K05出土遺物(3)	55
写真40	S K05出土遺物(4)	56
写真41	S K06遺物出土状況(北から)	57

写真42	S K06出土遺物	57
写真43	S K07遺物出土状況(南から)	58
写真44	S K07出土遺物	58
写真45	S K08完掘(東から)	59
写真46	S K08出土遺物	59
写真47	S K10遺物出土状況(南から)	60
写真48	S K10遺物出土状況	61
写真49	S K10出土遺物(1)	65
写真50	S K10出土遺物(2)	67
写真51	S K11土層断面(南から)	68
写真52	S K11完掘(南から)	68
写真53	S K12土層断面(東から)	68
写真54	S K12完掘(南から)	68
写真55	S K13・14・15・16完掘(南から)	69
写真56	中世火鉢出土状況(S X08)	70
写真57	S X01・02・03 遺物出土状況(東から)	71
写真58	S X01・02・03完掘(東から)	71
写真59	S X01・02・03出土遺物	72
写真60	S X04遺物出土状況(南から)	73
写真61	S X04完掘(南から)	73
写真62	S X04出土遺物	73
写真63	S X05遺物出土状況(西から)	74
写真64	S X05完掘(西から)	74
写真65	S X05出土遺物	74
写真66	S X06遺物出土状況(北から)	75
写真67	S X06完掘(北から)	75
写真68	S X06出土遺物	75
写真69	S X07遺物出土状況(西から)	76
写真70	S X07完掘(西から)	76
写真71	S X07出土遺物	76
写真72	S X08遺物出土状況(東から)	77
写真73	S X08出土遺物	77
写真74	S X11近景(調査前)(調査後)	78
写真75	柱穴出土遺物	80
写真76	低湿地Aトレンチ(北から)	81
写真77	低湿地A出土遺物(1)	83
写真78	低湿地A出土遺物(2)	84
写真79	低湿地A出土遺物(3)	85
写真80	低湿地B出土遺物(1)	86
写真81	低湿地B出土遺物(2)	87
写真82	表土層出土の遺物	88

1 遺跡の位置と環境

切畑南遺跡の所在する切畑地区は、東・北・西の三方を楞巖寺山（369.8m）・金山（351m）・花ヶ岳（260.7m）に囲まれた谷底平野に位置する。「切畑」の名称は、「住古深山にて有之時分、防府之者切開き」農業を始めたことに由来するという（『地下上申』）。周辺の山々の浸食・堆積によって形成された平野部は、北端の千切峠から南へかけてその幅を広げながら次第に標高を下げ、かつては「小俣の海」と呼ばれる入り海であった低地部に至る。山地と平野部との接点にはいわゆる大道層に相当する砂礫層が丘陵性台地や小扇状地となって分布している。小俣の海には「大繁枝」「小繁枝」の2つの砂堆地があり、特に大繁枝の砂堆地は最も広いところで幅350m、長さ1000mにも及び、鷺崎と遠ヶ崎の間の湾口を河道を残して閉鎖していたと考えられる。

切畑地区はこのような地形ではあったが日受けは良く（『風土注進案』）、農業を行う地として十分であったと思われ、切畑南遺跡の東方には荘園の存在を示唆する「上ノ庄」という地名が残る。また中世には、南方の小俣地区に法金剛院領の「小俣荘」が存在したことも知られている。

中世における切畑地区は、交通の面から見ても重要な位置にあった。切畑地区から南へ約1.5km下ると、古代以来の幹線である山陽道に行き当たる。また、南の旦浦を出て山陽道を横切り、切畑地区中央を南北に縦断し、千切峠を越えて山口へ通ずる山口道がある。旦浦は柴山山麓にあり、近世においては山口方面への運搬物資の揚陸港として、豊後産の塩屋灰や石灰、瀬戸内諸港からの綿、鉄などの移入でにぎわった地である。山口道は、旦浦方面からの海産物、肥料などを運び、かつ薪炭を積み戻る彼我交通の重要路として大内時代に開けた。切畑地区は山口道の沿線にあたり、その繁栄が想像される。また、東は押地峠を越え佐野へ通じる支道、西は畔倉峠を越え鑄銭司へ通じる支道が山口道から分岐していたことが近世文書（『風土注進案』）で確認でき、これらの支道が中世からあったとすれば、切畑地区は交通の要衝としてさらに重要な位置を占めていたことになる。

山陽道の沿線周辺には当時の遺跡として、室町時代の有力階層の火葬墓群である下山ノ口遺跡、室町時代の農村集落である天神原・弥市原遺跡、周防一の宮の門前にひらけた集落である玉祖遺跡などの中世の集落が存在している。

近世になると切畑地区周辺の様相は大きく変化する。山陽道は、小俣の海を迂回せず直通するよう既につけかえられていたが、毛利氏によって岩淵市・台道市の半宿が設けられた。台道市は本陣に準ずる旅館がおかれ、山陽道と山口道の交差点として繁栄した。また小俣の海は順次干拓が行われ、その姿を消した。

この時代には、各種鋳工業も発達する。代表的なものとして楞巖寺山南麓の佐野窯群がある。ここには70軒を数える窯があり、甕、壺、火鉢など土師質や瓦質の製品を生産していた。その発祥は明らかではないが、仲哀天皇・神功皇后西征の途、土地の沢田の長に命じて鼎と大皿を作らせ、玉祖神社に戦勝を祈願したという古伝があり、この故事に倣って神社の例祭には土鼎・皿を奉獻してきた。この土鼎が中世足鍋に起源をもつ可能性も否定できない。

切畑地区では農業を主たる産業としてきたが、それ以外の産業として^{きり}達理山（金山を指す）からの



◡ 縄文時代 ◣ 弥生時代 ○ 古墳時代 □ 中世 ◇ 近世

- | | | | |
|-----------|-----------|-----------|----------|
| 1 切畑南遺跡 | 2 弥市原遺跡 | 3 天神原遺跡 | 4 上り熊遺跡 |
| 5 小俣遺跡 | 6 柴山古墳群 | 7 繁枝砂丘遺跡 | 8 岩淵古墳 |
| 9 切畑遺跡 | 10 台ヶ原古墳群 | 11 佐野窯跡群 | 12 玉祖遺跡 |
| 13 大判池古窯跡 | 14 大日古墳 | 15 下山ノ口遺跡 | 16 大河内遺跡 |
| 17 小浜遺跡 | 18 赤碓遺跡 | 19 市遺跡 | |

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

銅鉦の採掘が挙げられる。ちなみに「切畑」の名称について、遼理山の山麓地帯に開けた耕地であるため遼理畑、転じて切畑と名づけられたとする説（『地名淵鑑』）もある。また農閑期に雲母（正確には滑石）を採掘し、雲母拵えを生産した農家もある（『風土注進案』）。雲母拵えとは、水車を利用して石臼で雲母を挽き、粉にしたものを水に沈殿させて上部の細粉を採ったもので、瓦製造に使用された。雲母拵えの製造にあたって雲母座が置かれ、小郡宰判がこれを統轄した。この雲母拵えは防長両国内だけでなく、且浦から船で九州や四国方面へも出荷された。

以上、切畑地区の地勢や歴史を概観してきたが、史料も少なく不明な点が多い。今回の調査が、その空白を埋めるものであることを期待したい。（向上）

参考文献

山口県文書館	『防長風土注進案 第9巻 三田尻宰判 上』	1964年
山口県文書館	『防長風土注進案 第14巻 小郡宰判』	1964年
防府市教育委員会	『続 防府市史』	1980年復刻発行
防府考古学研究会	『防府遺跡遺物発見地名表 旧石器～古墳時代』	1980年
山口県教育委員会	『下右田遺跡』	1980年
山口県教育委員会	『天神原・弥市原』	1981年
山口県教育委員会	『弥市原・東禅寺』	1982年
山口県教育委員会	『玉祖遺跡・西小路遺跡』	1983年
山口県教育委員会	『生産遺跡分布調査報告書 採鉦・冶金』	1982年
山口県教育委員会	『生産遺跡分布調査報告書 窯業』	1983年
ふるさと大道を掘り起こす会	『ふるさと大道 (11) 自然と生活』	1986年
防府市教育委員会	『周防国府跡(史跡「周防国衙」跡)保存修理事業報告書』	1987年
「角川日本地名大辞典」編纂委員会	『角川日本地名大辞典 35 山口県』	1988年
小川国治 編	『山口県の歴史』	1998年



調査区より^{りょうごんじ}楞嚴寺山を望む

2 ◀ 調査の経緯と概要

防府市は全国で最も早く史跡に指定された周防国府跡をはじめ、下右田遺跡、大日古墳、車塚古墳など、多くの重要な遺跡が存在している。ここ切畑南遺跡の周辺にも岩淵古墳、柴山古墳群、大道繁枝砂丘遺跡、原遺跡等の遺跡が見られ、縄文時代から弥生時代にかけての遺物も多数採集されている。さらには場整備に先立つ事前の調査で、古墳時代から中世にかけての集落跡や遺物が確認されており、多くの遺跡に囲まれながらこれまで手が着けられなかった切畑南遺跡が、この度本格的に調査されるに至ったことは非常に意義深いことと言える。

平成10年4月、発掘調査を始めるに当たって、山口農林事務所農村整備部、大道土地改良区、防府市教育委員会等、関係機関との綿密な打ち合わせを行うとともに、近隣の幼稚園・小学校・中学校・警察署・消防署等に安全確保のための協力と理解を要請、5月7日には作業員を一堂に集めての説明会を開催した。5月14日に事務所を設置すると同時に表土除去作業を開始。作業員を動員しての本格的な発掘作業がスタートしたのは5月18日であった。

まず2地区、3地区、1地区の順に表土除去を進め、重機を追いかけるような形で作業員による遺構検出作業が行われていった。本年度はほとんどの作業員が発掘調査を初めて経験するというので、新しい作業に入るたびに道具の名称や使い方、掘り方、検出方法等を一つ一つ説明しながら作業を進めていかなくてはならず、正直なところ作業がどれくらいスムーズに進むのかが一番の不安材料であった。しかしそのようなわれわれの心配をよそに、作業員は非常に協力的、献身的で、その姿勢には感謝の気持ちでいっぱいになった。もうひとつの不安材料は調査区の広さである。12000㎡をこえる調査区が細長く東西南北にのびており、1地区から3地区まで最長で900mの距離がある。作業道具をかかえての移動も大変だが、何より不都合なことは調査員同士の連絡が取りにくいことである。この問題点については、軽トラックや携帯電話の利用と綿密な情報交換やミーティングでカバーしていっ



重機による表土除去作業風景



作業方法の説明

た。おかげで作業は順調に進み、6月25日には全地区の表土除去作業を終了。遺構検出、掘り込み、遺構実測も順調に進んでいった。

暑さの厳しい7・8月には作業も大詰めをむかえていた。ところどころにテントやパラソルを立て、暑さをしのぎながらの作業であったが、お互いの健康と安全を第一に考えながらこの時期を乗り切ることができた。作業員に大きなけがや病気がなかったことが何より喜ばしいことであった。8月21日に無事空中写真撮影をすませ、9月4日、作業員によるすべての作業を終了。9月11日に現場撤収の運びとなった。最終的には調査区全体の3分の1にあたる1地区が予想に反して遺構密度が低かったことなどから、予定より約1か月早く調査を終了することとなった。

本年度の調査で確認できた主な遺構としては、掘立柱建物跡、溝状遺構、井戸、土坑、用途不明遺構などがあげられる。検出された遺物は土師器や陶器の皿や椀、瓦質の摺鉢や足鍋、しゃもじ・櫛・下駄などの木器、砥石、石錘、滑石、などの石器から、十能、埋甕、風呂釜とバラエティに富み、遺構にはともなわないうが、縄文時代の石斧や鏃、弥生時代後期のものと思われる鏡片、古墳時代の耳環などが採集された。これらの遺物から、長い時代にわたって人々がこの地で生活を営んできた様子がうかがえる。

また調査期間中、7月4日には大道小学校5年生学級PTAが、8月4日には大道小学校PTA親子研修、大道を掘り起こす会が合同で体験学習に訪れ、多数のマスコミも取材



猛暑の中での作業風景



多数出土した足鍋



空中写真撮影風景



大道小学校親子体験学習



「大道を掘り起こす会」の発掘体験



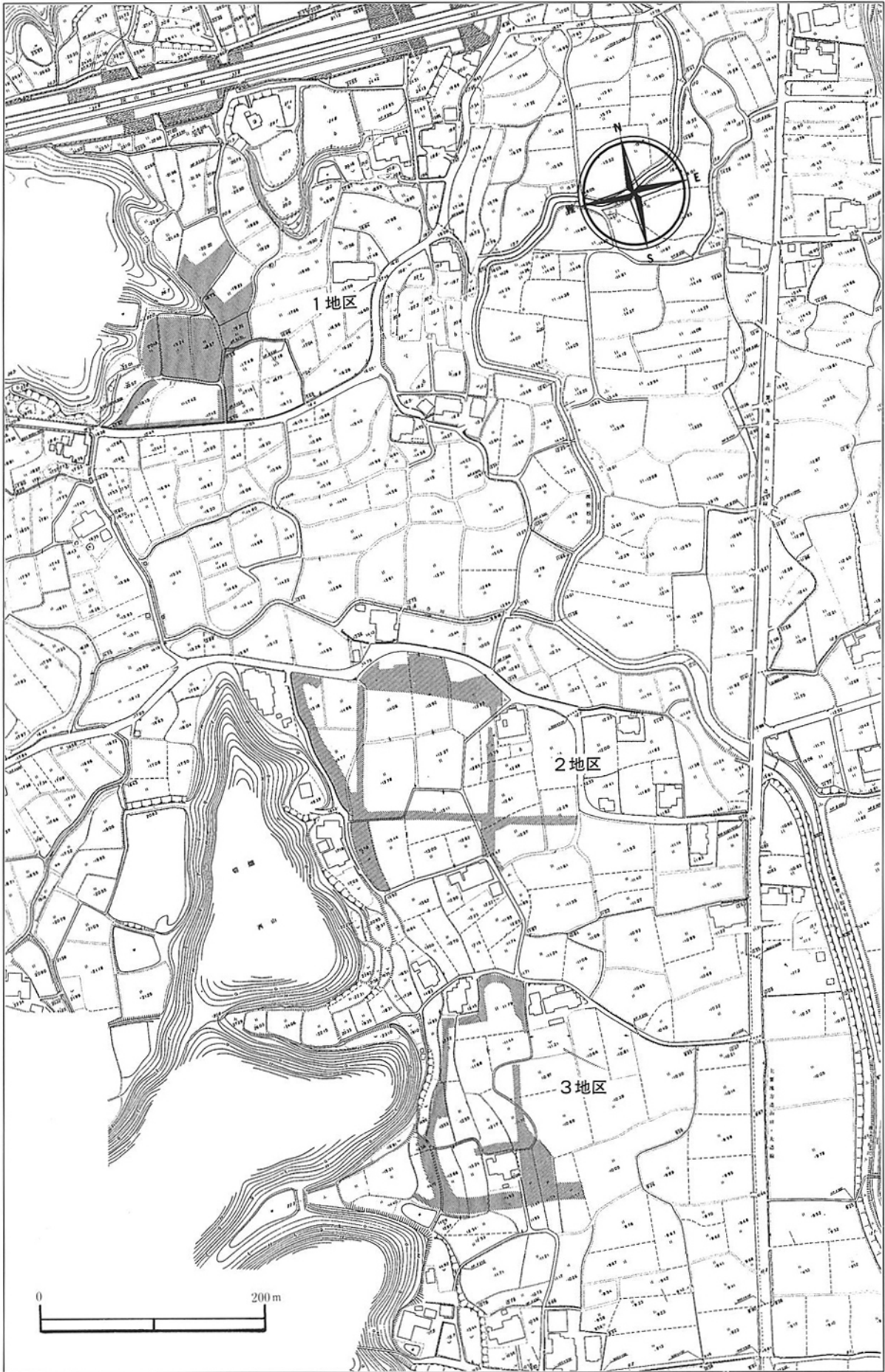
急ピッチで進むほ場整備工事

に集まり大変にぎやかな一日となった。夢中で遺物を探す子供達の日、調査員の説明に熱心に耳を傾けるお年寄りの姿にわれわれも元気づけられながら、地元の人々の関心の高さに驚くとともに、地域の郷土学習に一役を担えたことを非常にうれしく思った。

さて、本調査は平成4年度から13年度にかけて大道北地区のほ場の区画整理を目的とした整備事業にともない、財団法人山口県埋蔵文化財センターが山口県農林部及び文化庁の国庫補助を受けた山口県教育委員会より受託した発掘調査である。近年、急速に進む土地開発はわれわれの生活を豊かで便利なものにしてくれるが、それは言い換えれば自然破壊、歴史破壊と言っても過言ではない。開発と破壊は常に表裏一体の行為であり、開発に対して遺跡の保存をどれだけ優先させるべきかは答えのない永遠の課題である。しかしながら、科学技術の進歩により物質に恵まれすぎた今日だからこそ、精神文化を見つめ直そうとする声が大きくなっていることも事実である。日本中に衝撃を与えた佐賀県の吉野ヶ里遺跡や青森県の三内丸山遺跡が開発計画を変更して遺跡の保存の方向に踏み切ったのはその例である。

われわれはやむなく破壊されてしまう歴史を少しでも正確に後世に伝え残すことの必要性をあらためて心に言い聞かせ、大きな使命感をもって本調査にのぞんだことを書き添え調査の経緯と概要の報告としたい。

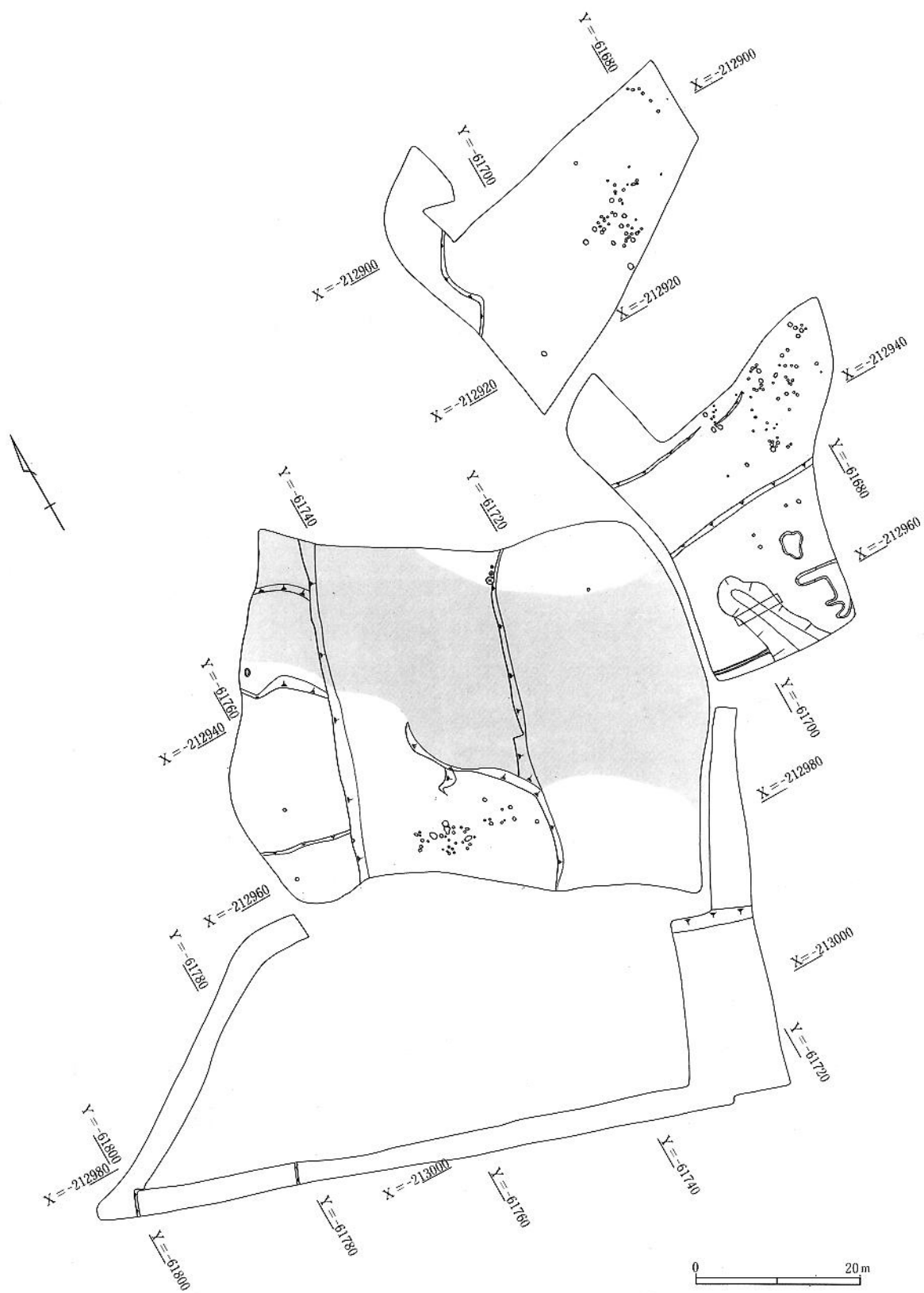
(網本)



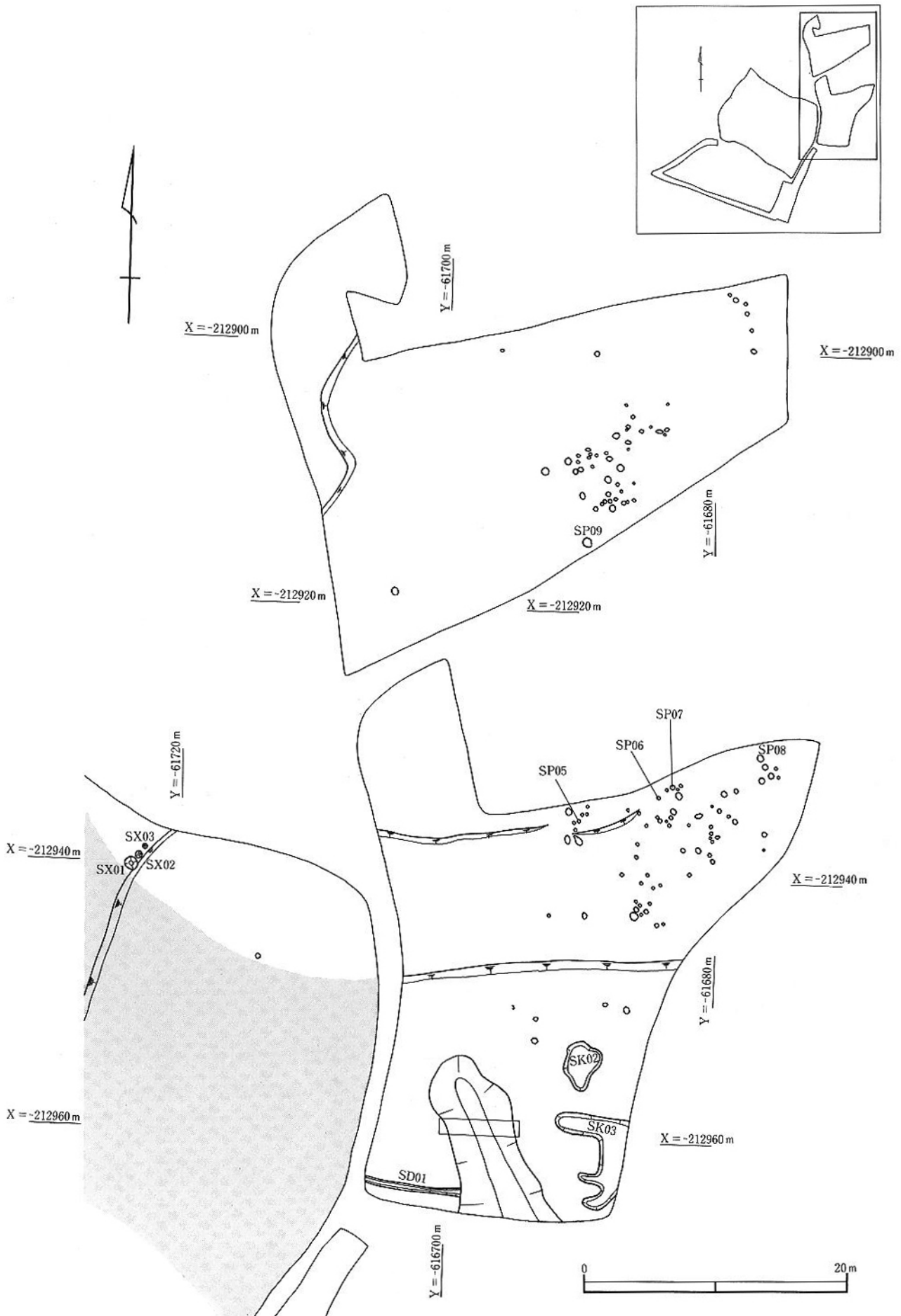
第2図 周辺の地形と調査区設定図



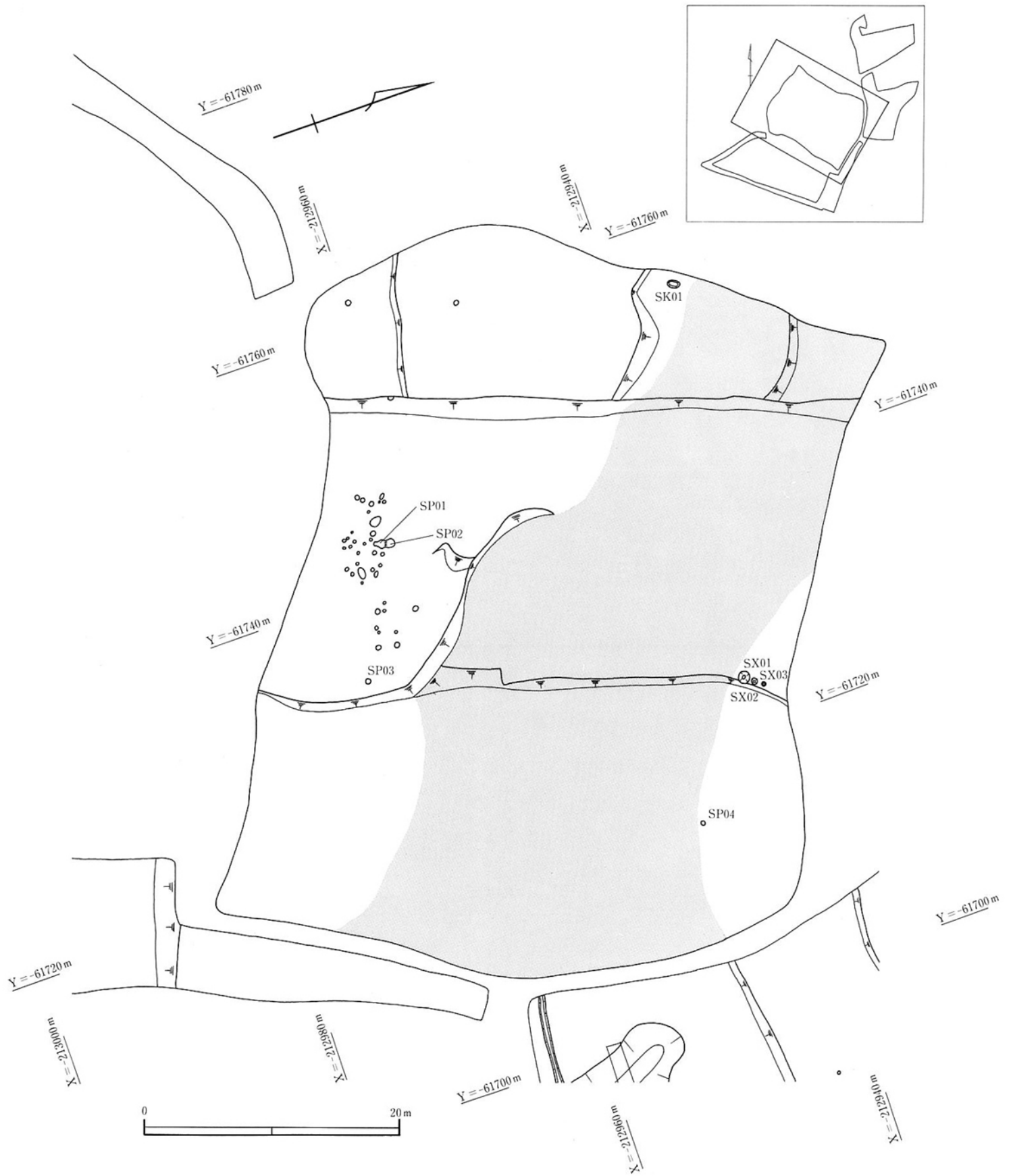
写真2 1地区全景（南東上空より）



第3図 1地区遺構配置全体図



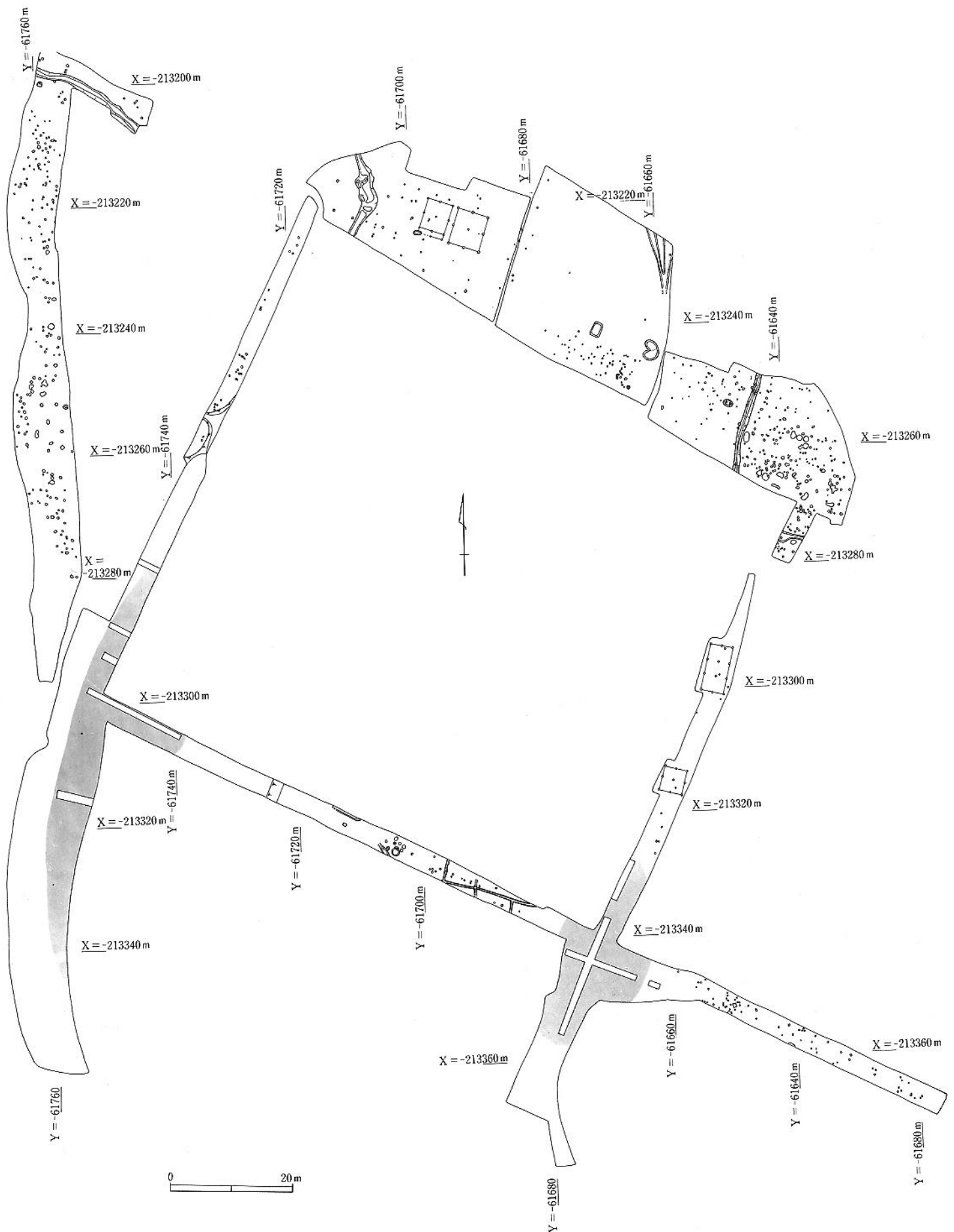
第4図 1地区遺構配置図(1-A)



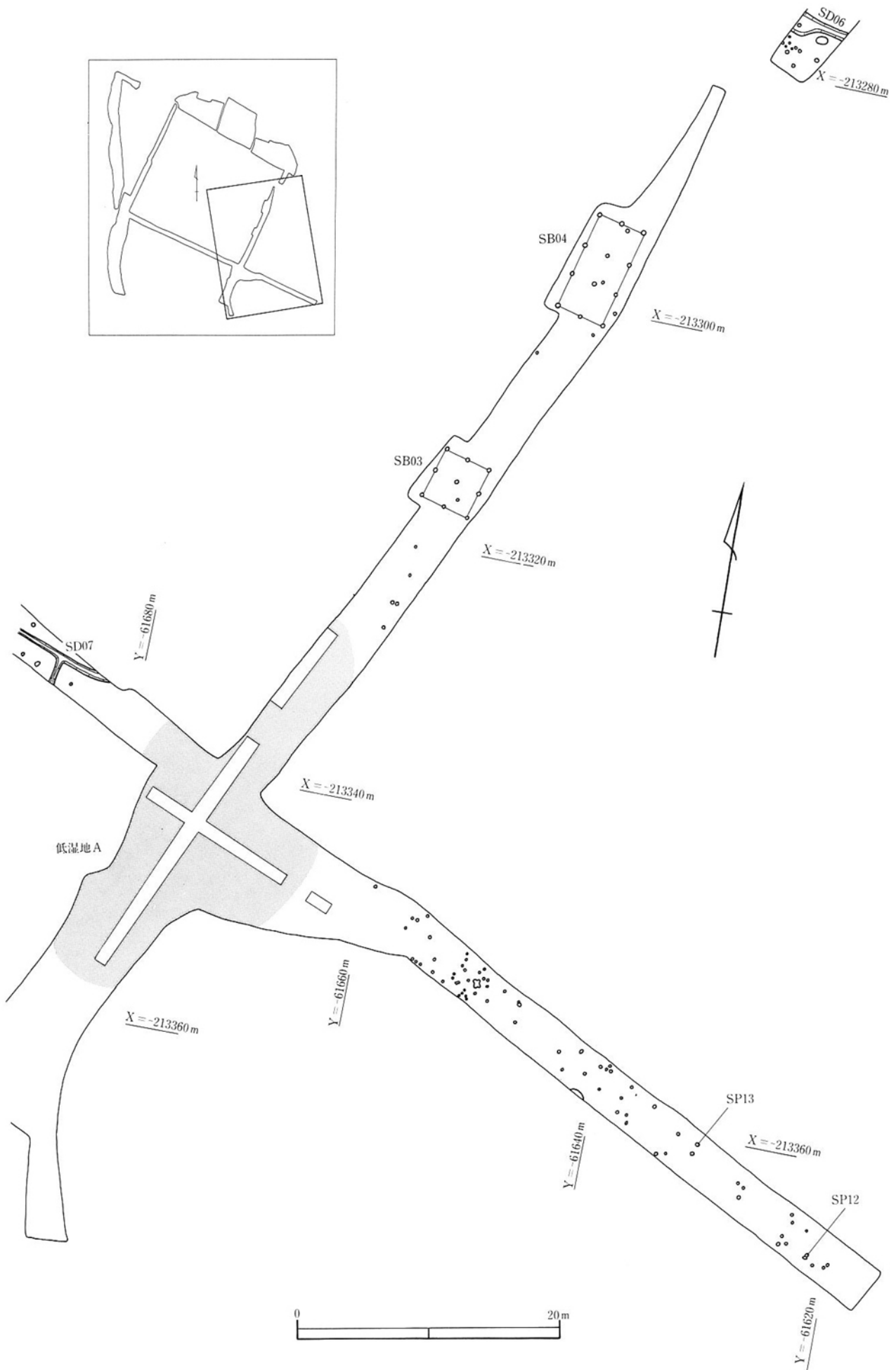
第5図 1地区遺構配置図(1-B)



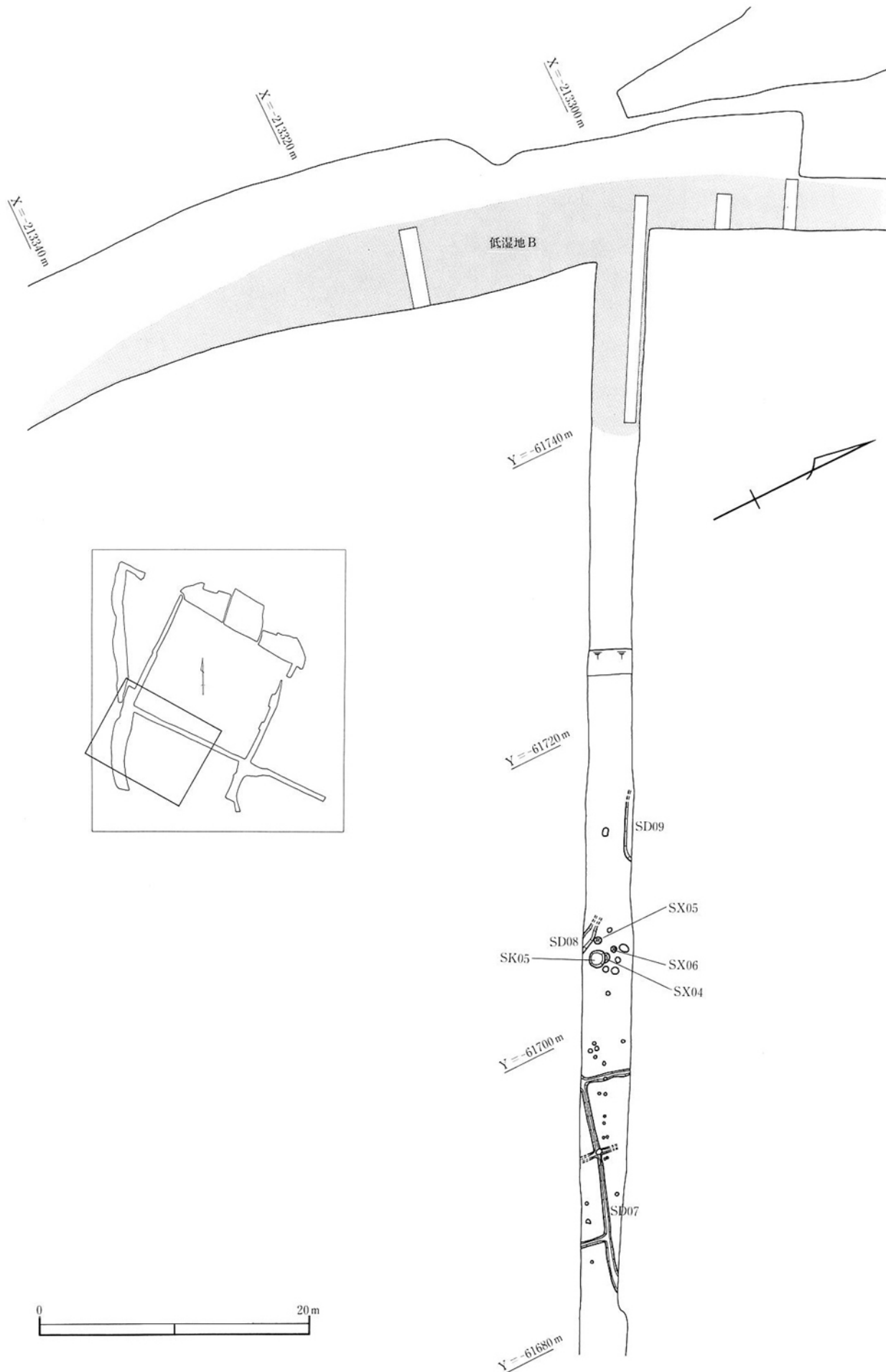
写真3 2地区全景（南東上空より）



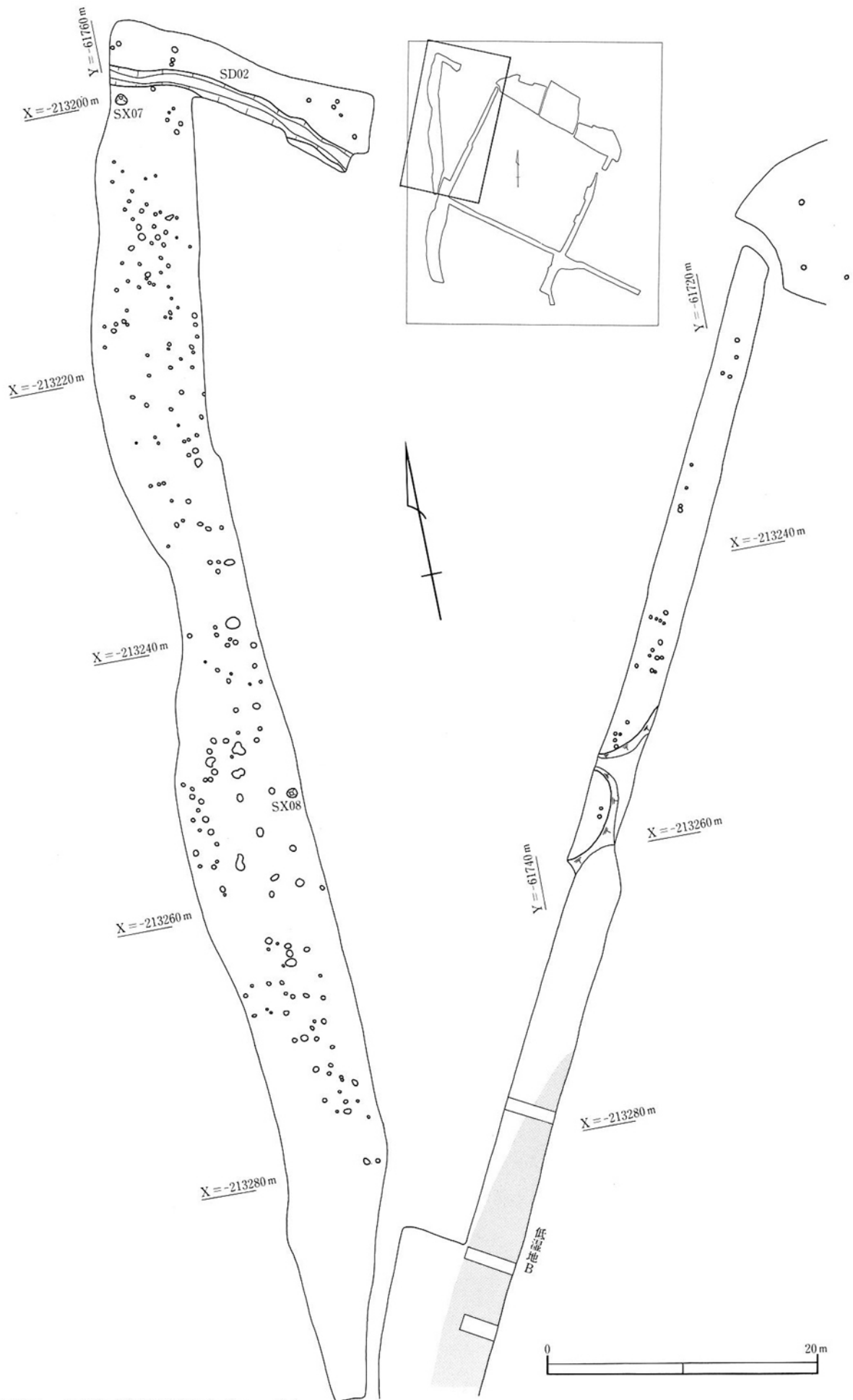
第6图 2地区遺構配置全体図



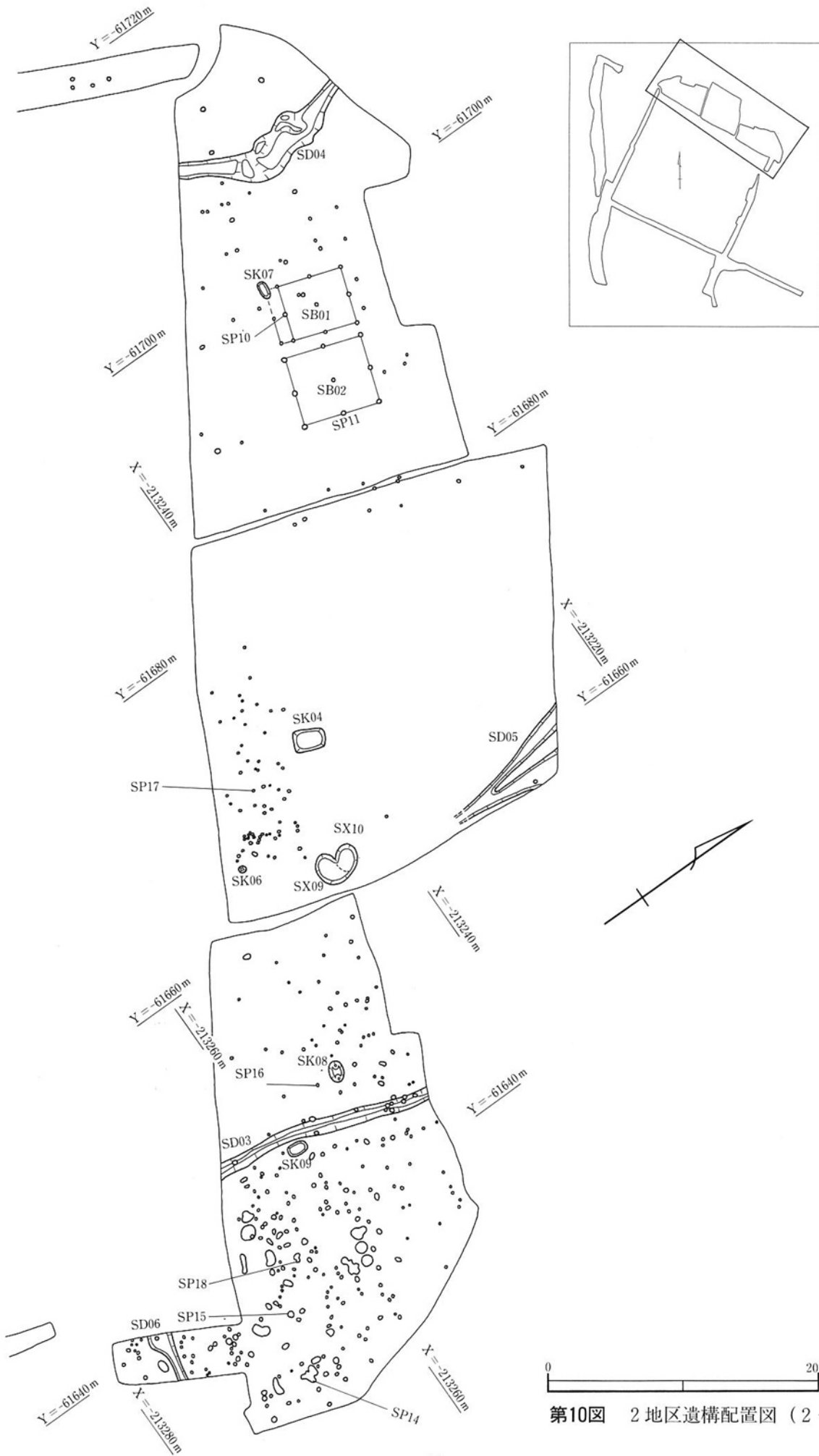
第7図 2地区遺構配置図(2-A)



第8図 2地区遺構配置図(2-B)



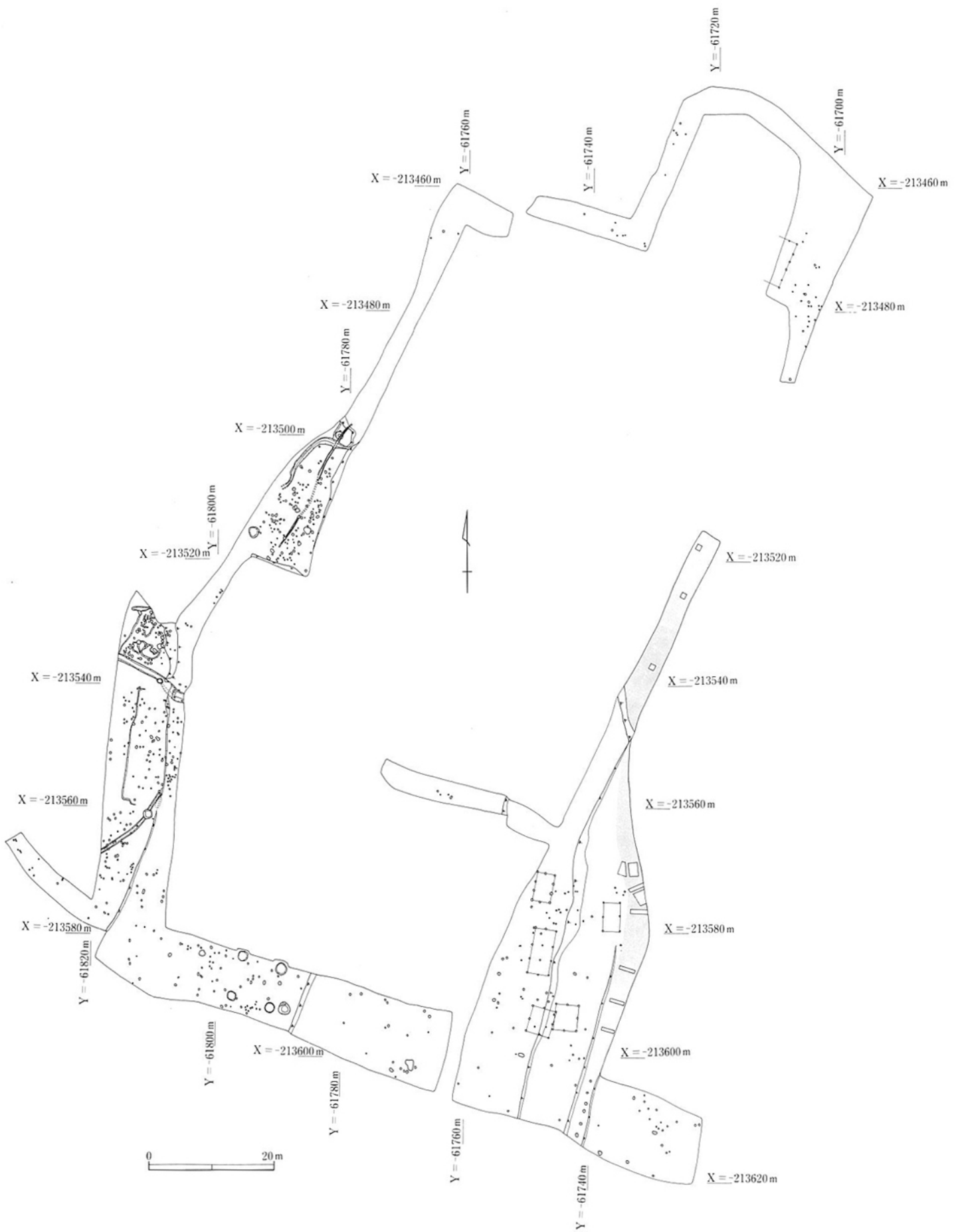
第9図 2地区遺構配置図(2-C)



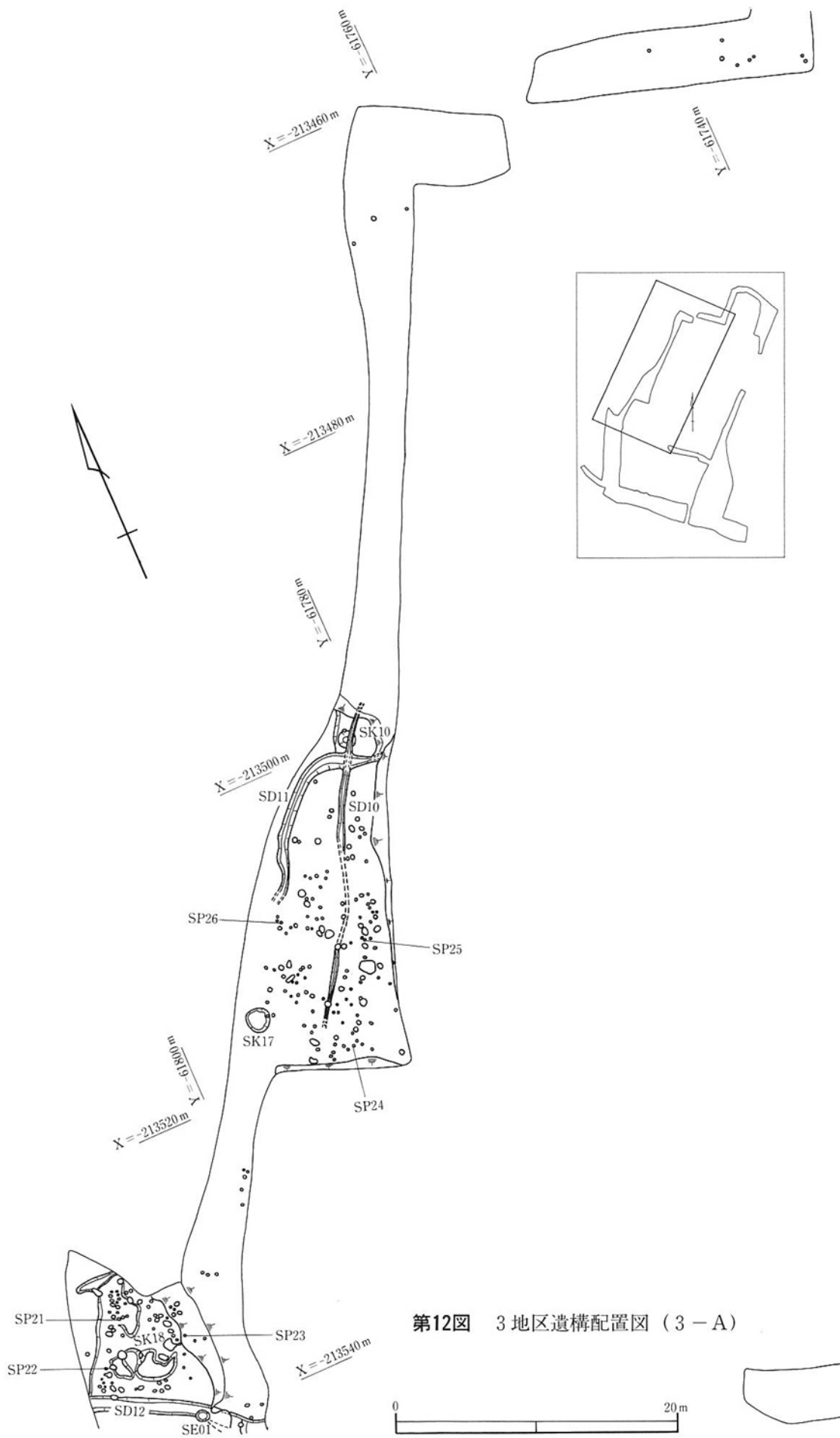
第10図 2地区遺構配置図(2-D)



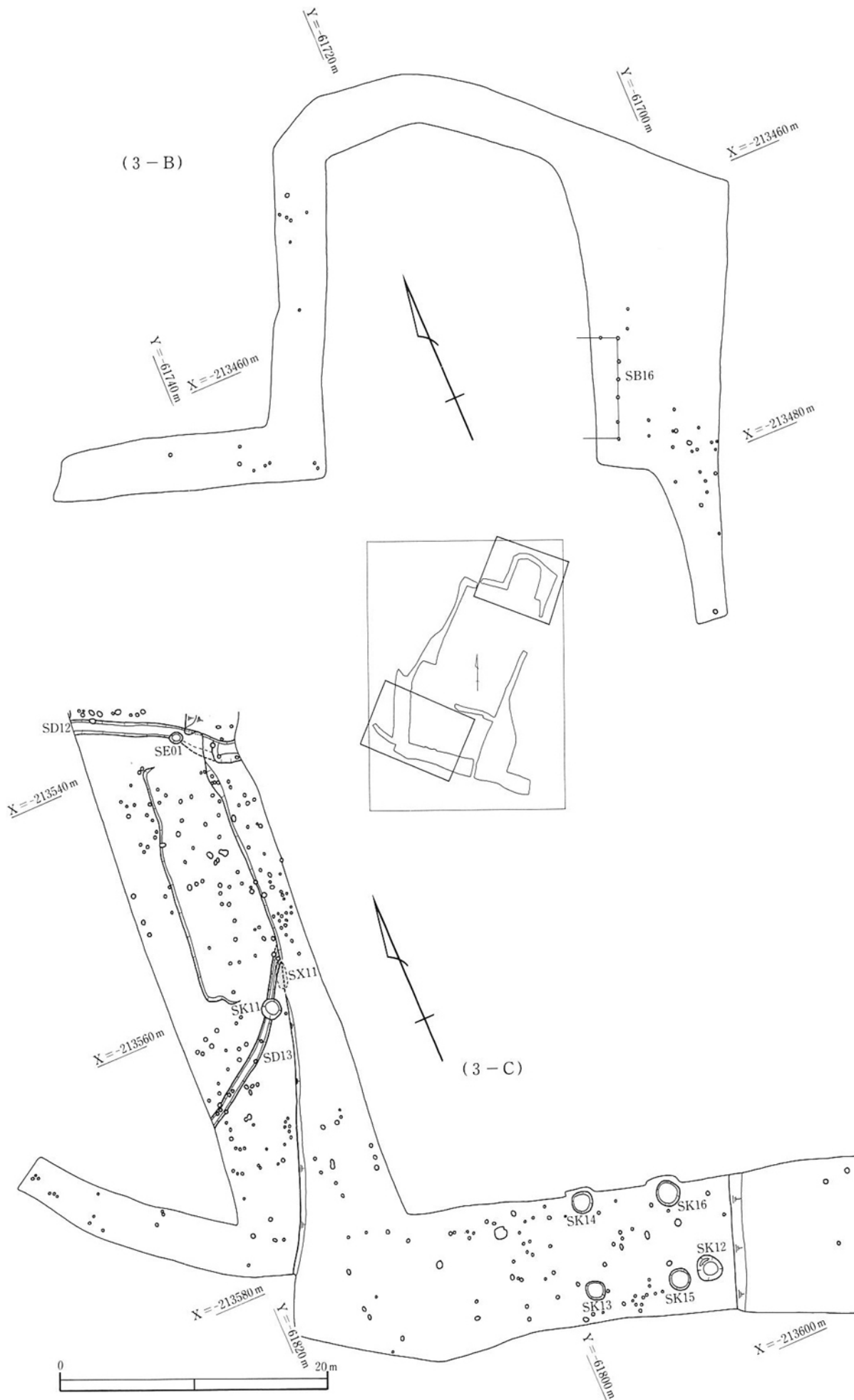
写真4 3地区全景（南東上空より）



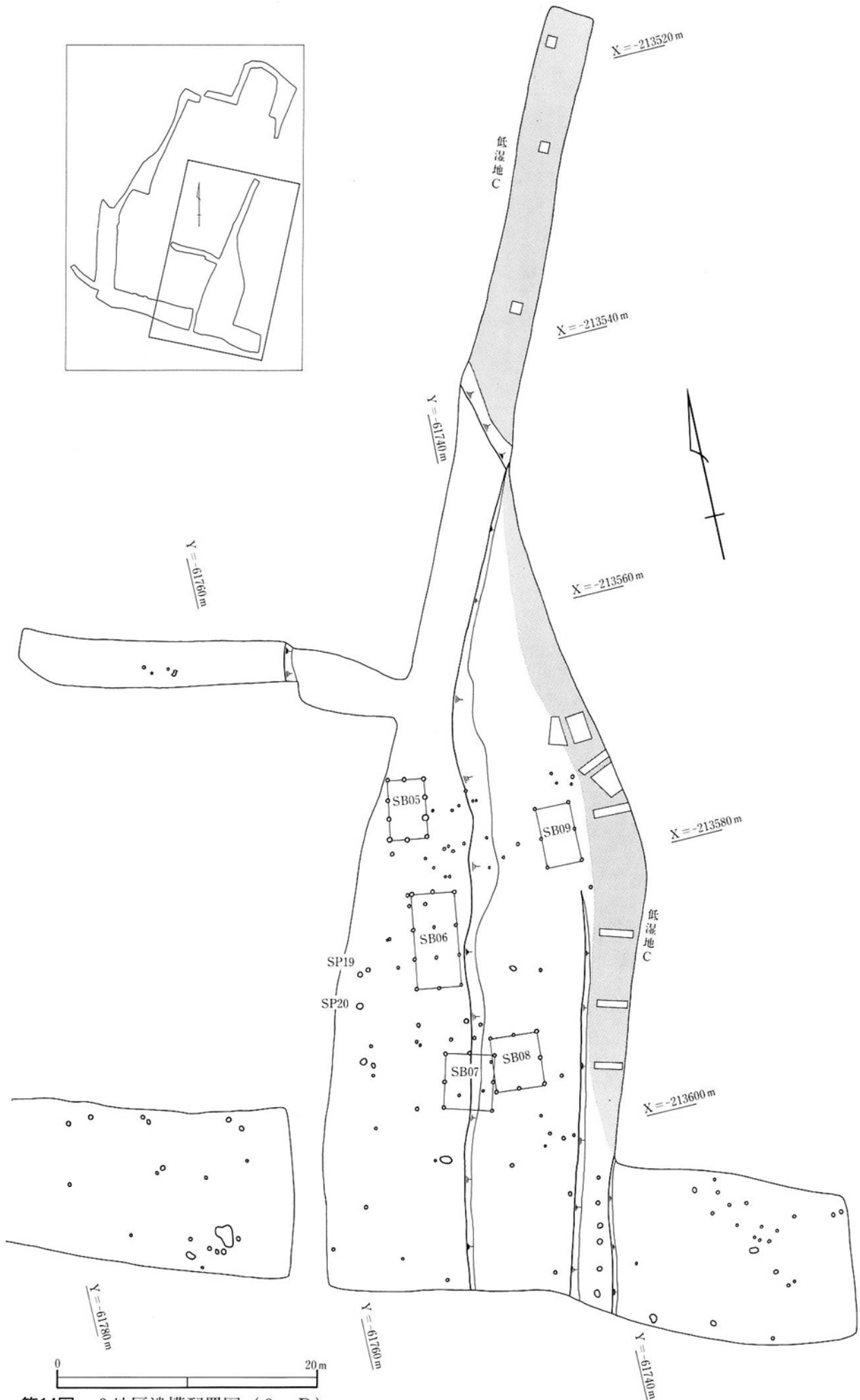
第11图 3地区遺構配全体置図



第12図 3地区遺構配置図(3-A)



第13図 3地区遺構配置図(3-B・C)



第14図 3地区遺構配置図(3-D)

3 調査の成果

遺跡が立地する切畑地区は、主として花崗岩に由来する土壌の分布地域で、遺構の多くがこの土壌に掘り込まれている。調査によって、掘立柱建物跡16棟、溝状遺構13条、土坑16基、用途不明遺構12基、及び900余りの柱穴を検出した。遺構は、後世の耕地化により、その上面をかなり削平を受けており、残存状況は良好とはいえない。特に1地区は顕著である。

遺構の密度については、1地区の調査面積4000㎡に対して溝状遺構1条、土坑3基、用途不明遺構3基、柱穴100個程度が検出された。2地区は、調査面積3500㎡に対して、掘立柱建物跡4棟、溝状遺構8条、土坑6基、用途不明遺構7基、柱穴350個が検出され、3地区においては、調査面積5000㎡に対して、掘立柱建物跡12棟、溝状遺構4条、土坑9基、用途不明遺構1基、柱穴450個を検出することができた。

各遺構、遺物の説明については、前述した通り1地区の遺構密度が低いために、各地区におけるそれぞれの説明は控え、遺構ごとに説明を加えていくこととする。遺構の説明順は以下の通りである。(1)建物跡、(2)溝状遺構、(3)井戸、(4)土坑、(5)用途不明遺構、(6)柱穴。なお、遺構に伴う遺物の取り扱いについては、遺構の説明と併せておこなうこととする。(椿)

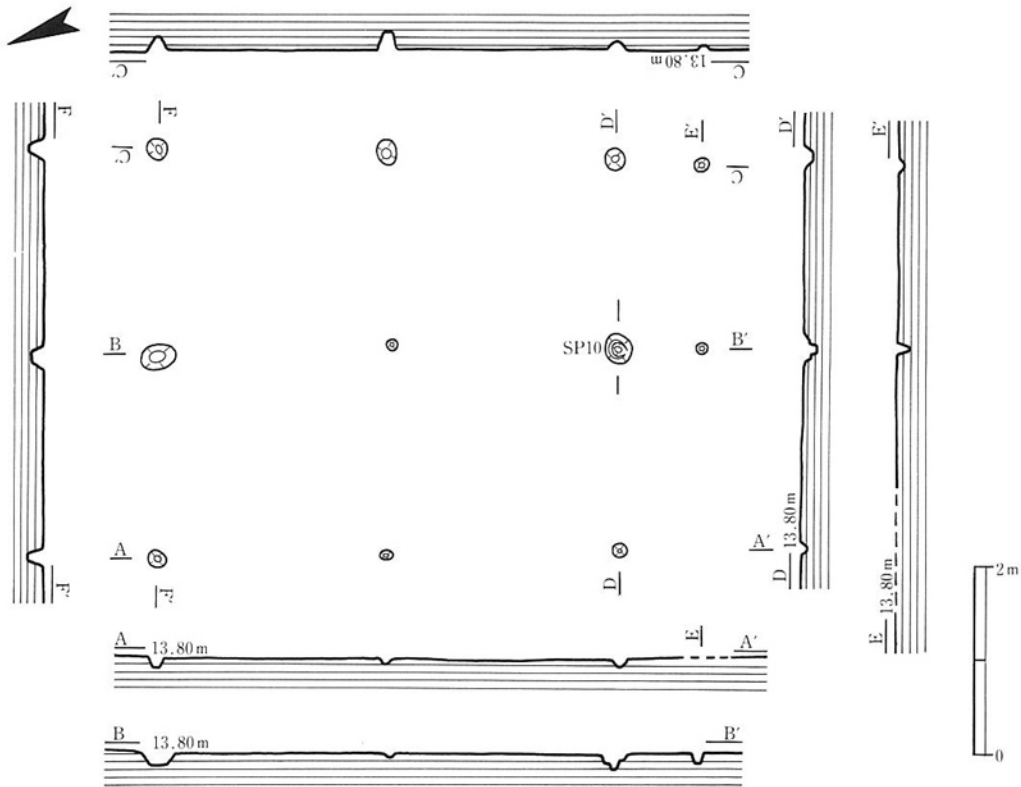
(1) 建物跡

今回の発掘で検出された建物跡は、すべて掘立柱建物跡である。2地区に4棟、3地区に12棟確認され規模は、1間×2間、2間×2間、2間×3間の建物である。柱穴からの遺物が少ないが、多くは中世の建物と推定される。(椿)



写真5 井戸と周辺の柱穴群

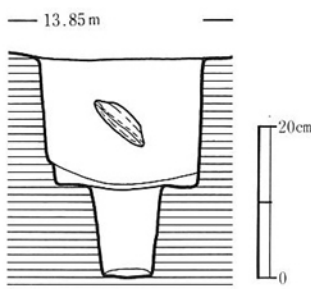
S B01 2-Dの西に位置する2間×2間の総柱の建物である。棟方向は、N20°W。梁行長432cmで桁行長492cmを測る。建物の南面には庇が設けられ、母屋から88cm離れたところに小さな柱穴が並び、西端の柱穴は土坑により確認されていないが、恐らく、3つ並んでいたものと推察できる。建物および庇を構成する柱穴は、何れも小さくて浅い。これは、このあたりが水田化される際に削平を受けたものと考えられる。S P10から土師器の皿が出土している。



第15図 S B01実測図



写真6 S B01全景 (西から)



第16図 S P10
遺物出土状況図



写真7 S P10遺物出土状況

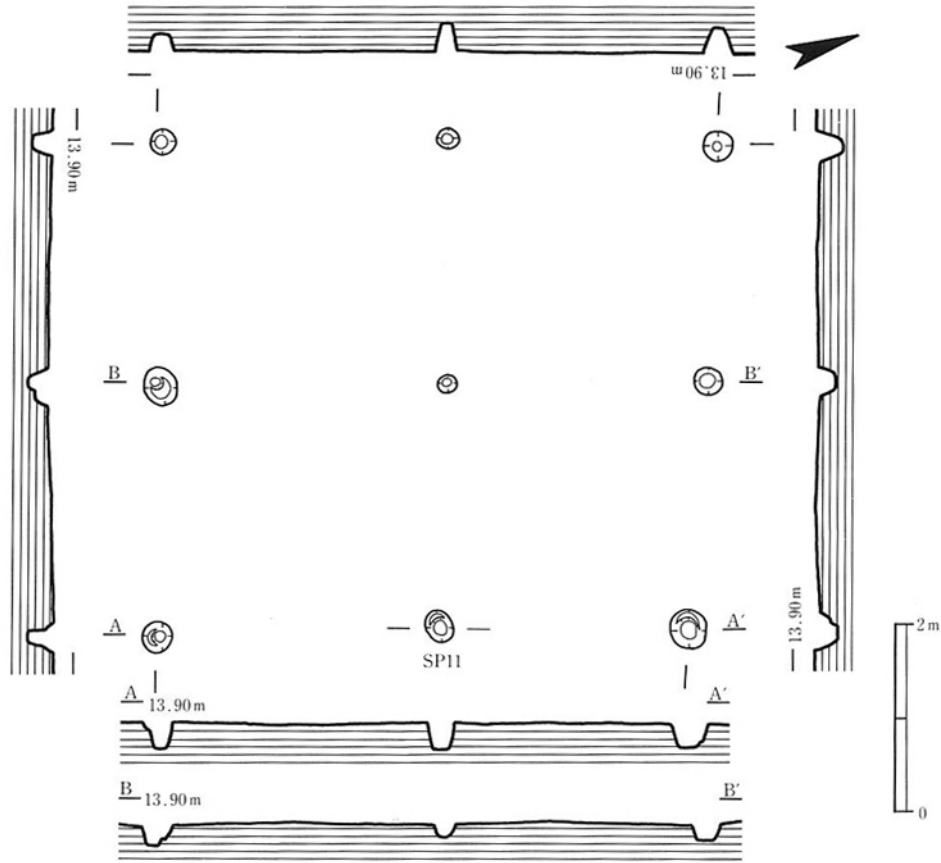


第17図 S P10出土遺物実測図



写真8 S P10出土遺物

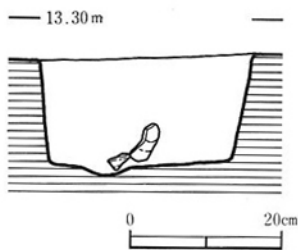
S B02 S B01の東に隣接してある2間×2間の総柱の建物である。棟方向は、隣のS B01と同じくN 20°W。梁行長520cm・桁行長580cmを測る。S B01とは、約130cmの間隔で東接し、棟方向は同じで、両建物の北面は一直線状に並んでいることなどを考慮すると、2つの建物が並存していた可能性は大きい。S P11から土師器の皿が出土している。



第18図 S B02実測図



写真9 S B02全景（東から）



第19図 S P11 遺物出土状況図

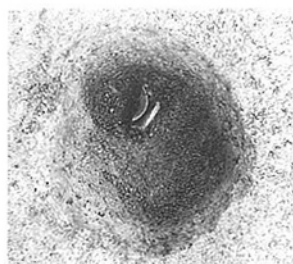


写真10 S P11遺物出土状況

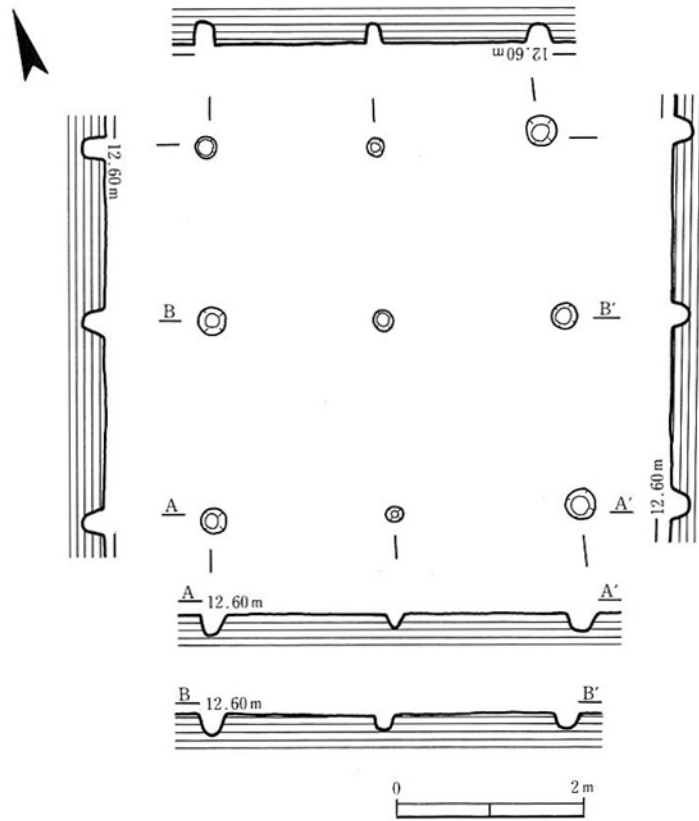


第20図 S P11出土遺物実測図



写真11 S P11出土遺物

S B03 2-Aの北にある2間×2間の総柱の建物である。棟方向は、N20°Wで梁行長388cm・桁行長400cmを測る正方形に近い建物である。このS B03は、細長い廊下のような調査区の中では1間×2間の建物として確認されていた。しかし、東西方向への広がりが必要とされたので、柱穴があると想定される位置を坪掘りし、1間×2間の建物の西にさらに1間分の柱穴列を検出した。調査区を部分的に西に拡幅し、2間×2間の総柱の建物であることを確認した。

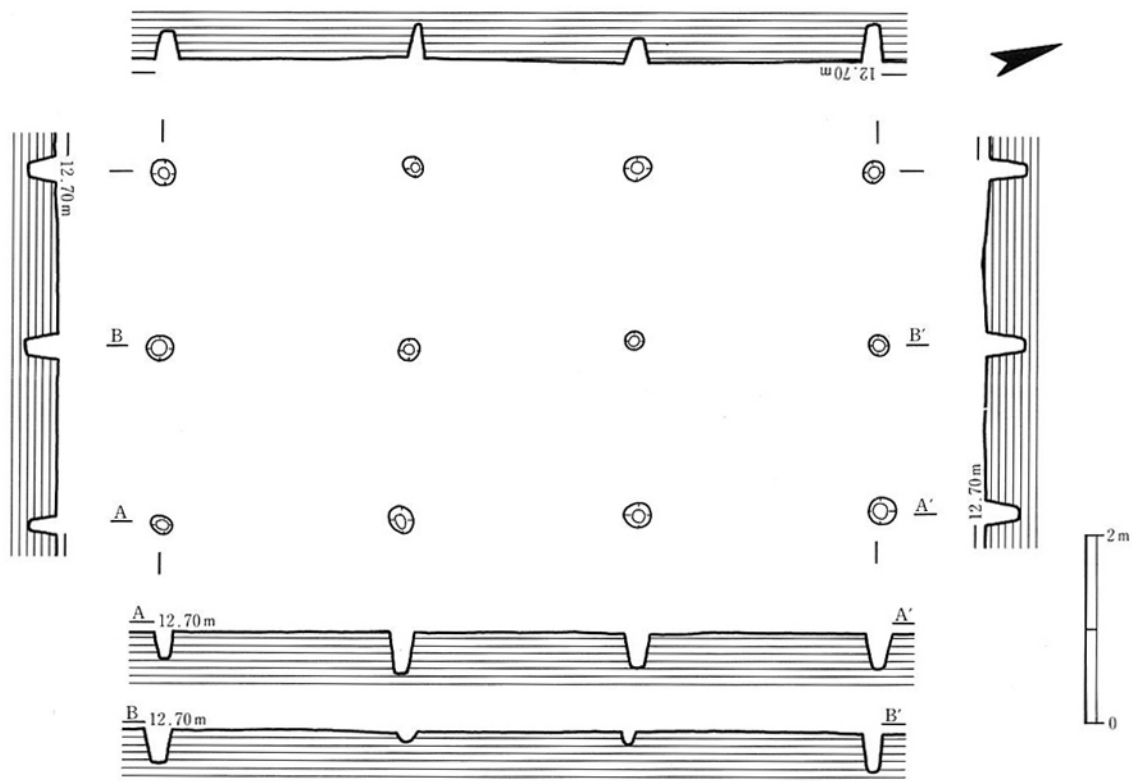


第21図 S B03実測図



写真12 S B03全景 (南から)

S B04 S B03のさらに北約14mにある2間×3間の総柱の建物である。棟方向は、N18°W。梁行長376cm・桁行長760cmを測る長方形の建物である。S B04もS B03と同様に、調査区の中では1間×3間の細長い建物が確認されていたが、東西方向への広がりをも想定して、坪掘りを行い西側へ拡幅し、2間×3間の建物であることが判明した。また、総柱の建物であるが、中央の小さくて浅い2つの柱穴は、床を支える束柱であった可能性が考えられる。

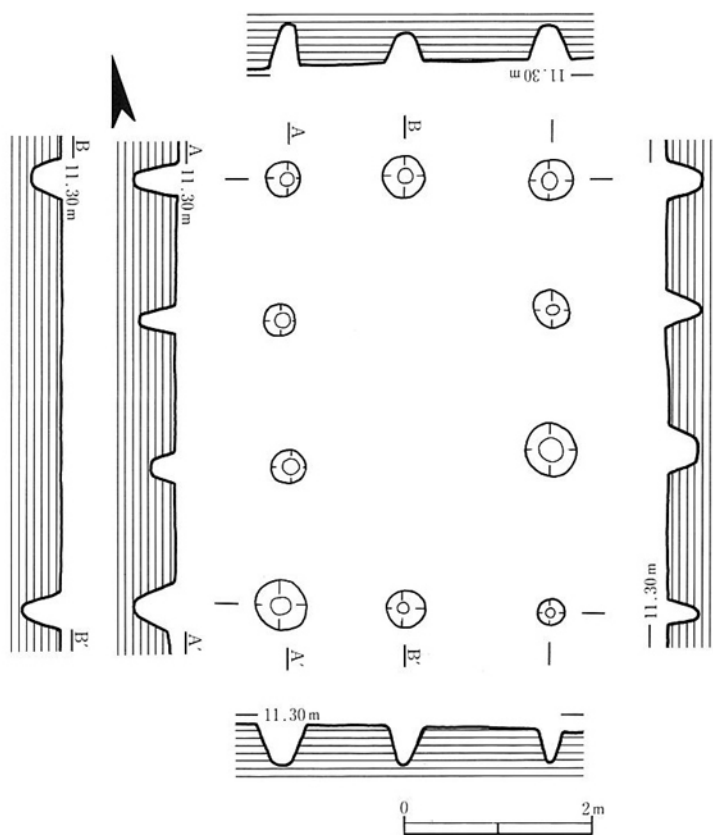


第22図 S B04実測図



写真13 S B04全景 (南から)

S B05 3-Cのほぼ中央部に位置する2間×3間の側柱の建物である。棟方向は、N12°W。梁行長288cm・桁行長460cmを測る。S B01～S B04の建物が何れも総柱であったが、S B05は中央の2つの柱穴をもたない側柱建物である。建物を構成する柱穴の規模は、径が28cm～54cmで深さは30cm～48cmと数値に幅があるもののしっかりしている。しかし、四隅の柱穴が必ずしも規模の大きいものとはいえない。

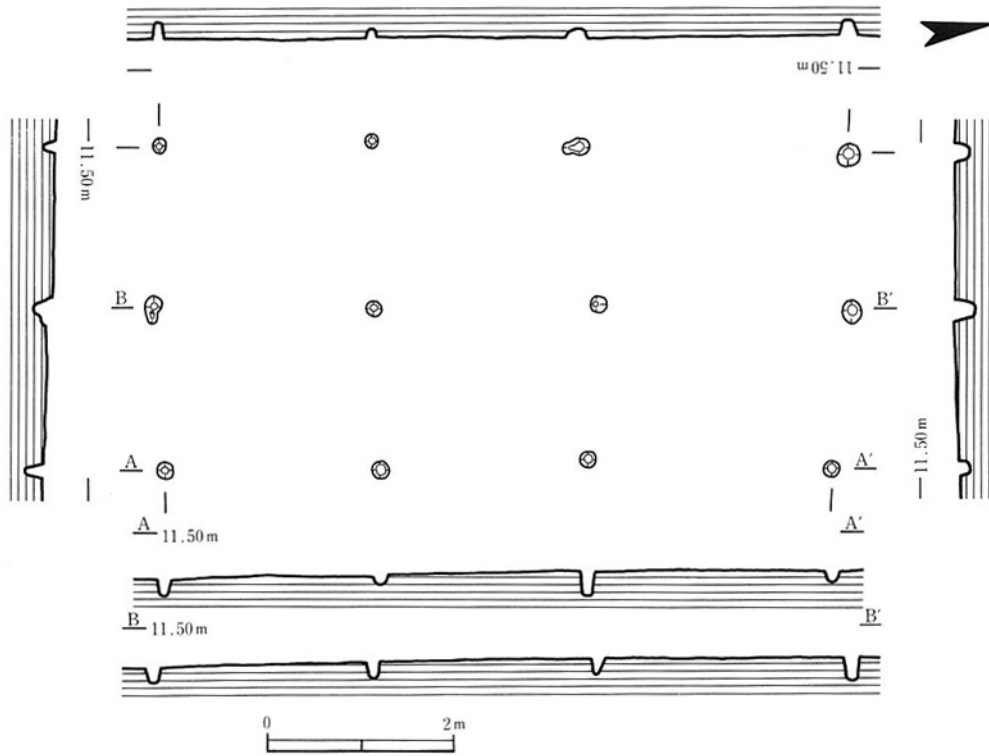


第23図 S B05実測図



写真14 S B05全景 (南から)

S B06 S B05の南方約4 mのところにある2間×3間の総柱の建物である。棟方向はN 8°Wで、梁行長352cm・桁行長736cmを測る。建物を構成する柱穴の規模は、径が10cm~20cm・深さが5 cm~20cmと小さくて浅いものである。多少の削平は考慮したとしても隣のS B05の柱穴に比べ貧弱すぎるといえる。



第24図 S B06実測図

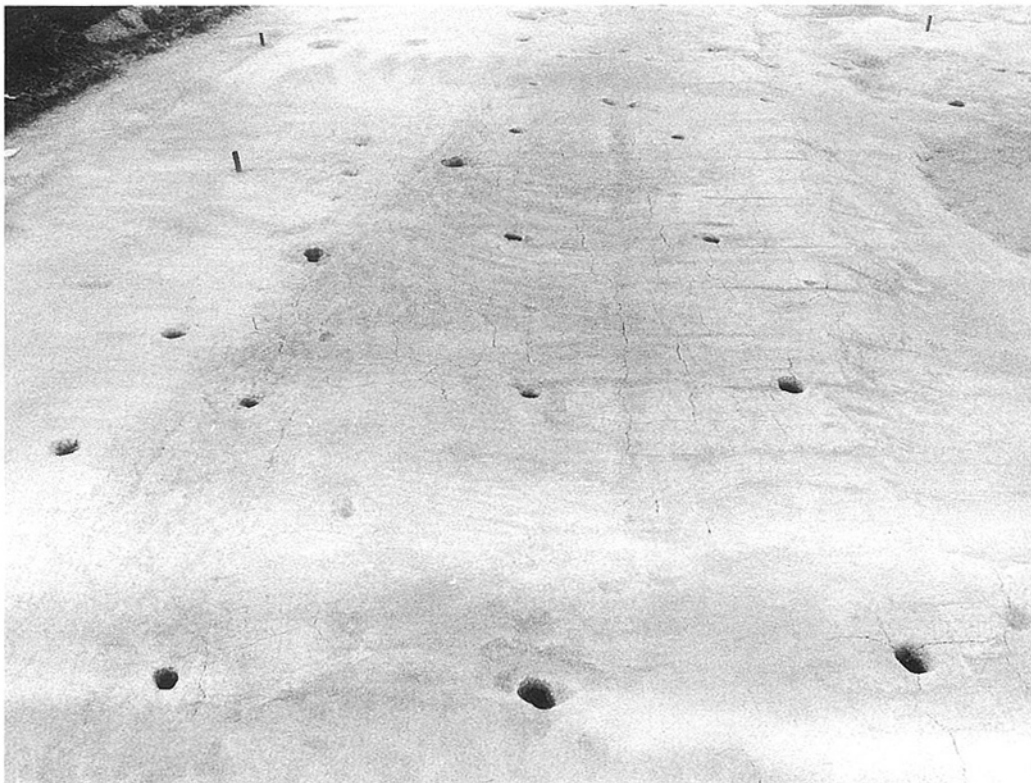
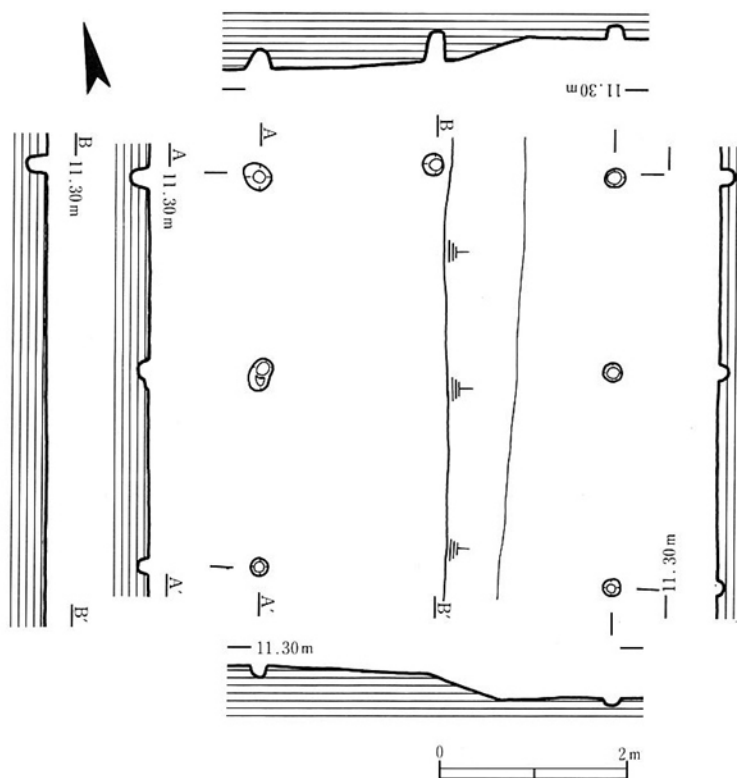


写真15 S B06全景 (南から)

S B07 S B06の南方約5 mにある2間×2間の側柱の建物である。棟方向はN14°W。梁行長376cmで桁行長436cmを測る。建物の中央を南北方向に水田の町境が走り、東が西に比べ30cm低い。しかし、残存する柱穴の深さは同じ位で、本来あった傾斜地を水平に整地せずに、そのまま柱穴を掘り込んだものと考えられる。居住を目的の建物であれば、床張の構造でなければ不便であろう。

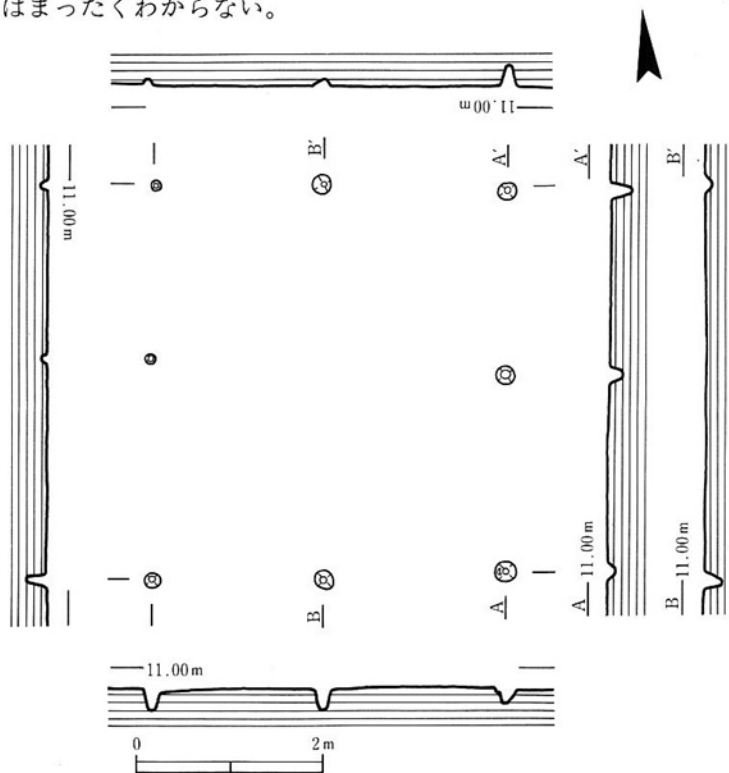


第25図 S B07実測図



写真16 S B07全景 (南から)

S B08 S B07のすぐ東に接してあり、一部が重なっている。2間×2間の側柱の建物である。棟方向はN 6°W。梁行長372cm・桁行長420cmを測る。この建物も隣のS B07と同じ中央の柱穴がない側柱建物である。隣接するS B07とは、棟方向の違いや一部が重なり合う位置関係などから並存していた可能性はないと考えられる。S B01～S B09のうち遺物が検出されたのは、S B01とS B02の2棟だけである。したがって、S B03～S B09の建物の時期は不明である。ましてや、それぞれのS Bの先後・並存関係などはまったくわからない。



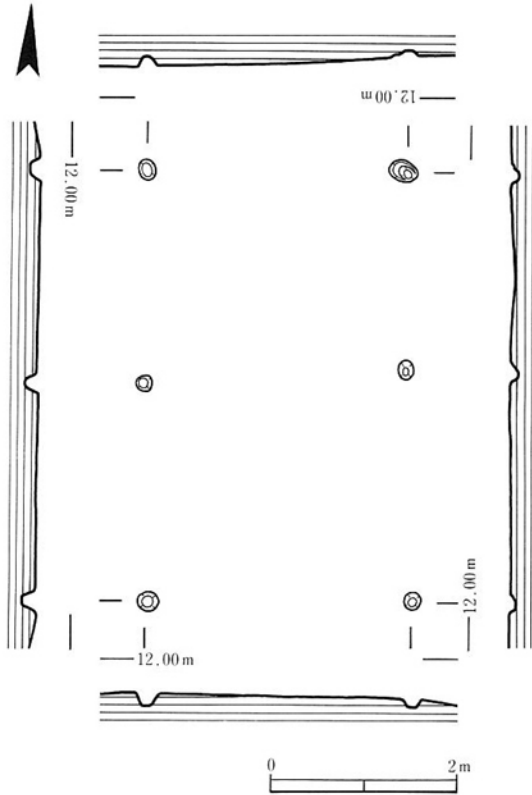
第26図 S B08実測図



写真17 S B08全景 (南から)

S B09 S B05の東約8 m、S B08の北約12 mにある1間×2間の建物である。棟方向は丁度南北線上にある。梁行長276cm・桁行長460cmを測る。S B09の東は、すぐに低湿地になり地形は東に向かって落ち込み、建物が東に拡大する可能性はなく、また、西側も精査したが柱穴は認められず、結局1間×2間の建物であることが判明した。しかし、1間×2間でも桁・梁両方の柱間が長く、2間×3間のS B05と床面積はあまり差がない。ちなみに、S B05が13.2㎡で、このS B09が12.7㎡である。

また、S B01～S B09の建物の棟方向をみるとすべて南北方向で0°～20°西に偏している。(村岡)



第27図 S B09実測図



写真18 S B09全景 (南から)

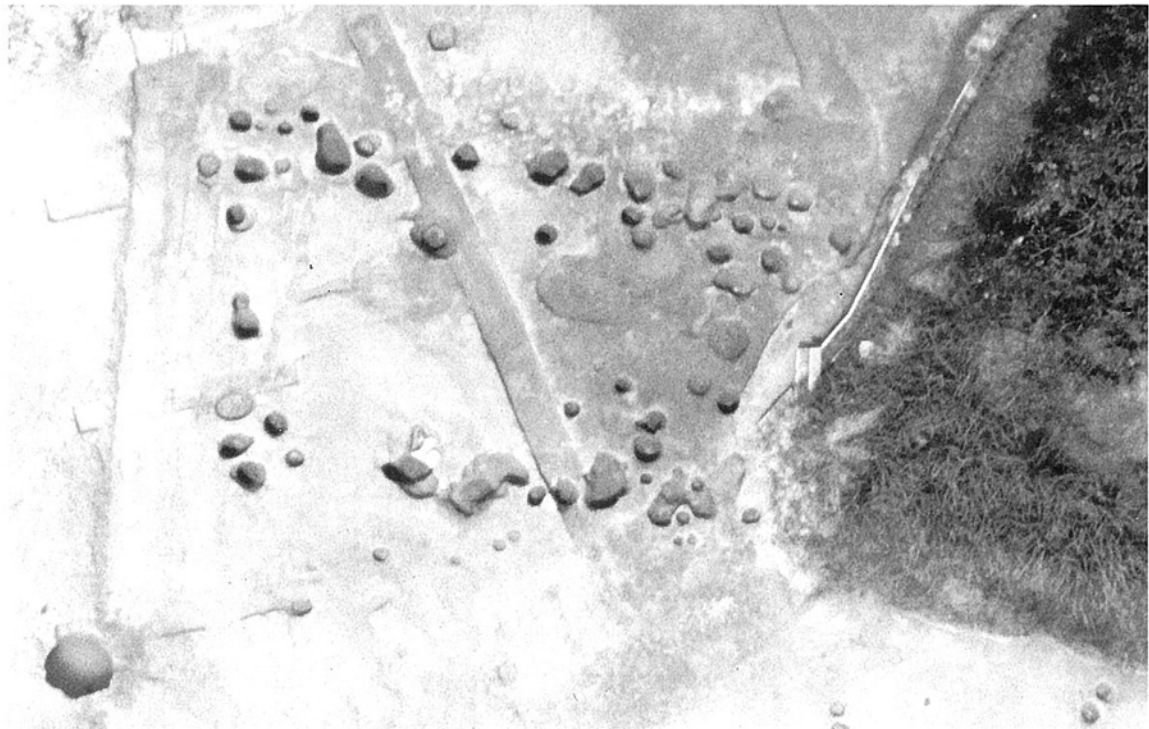


写真19 S E01周辺住居群全景 (東から)

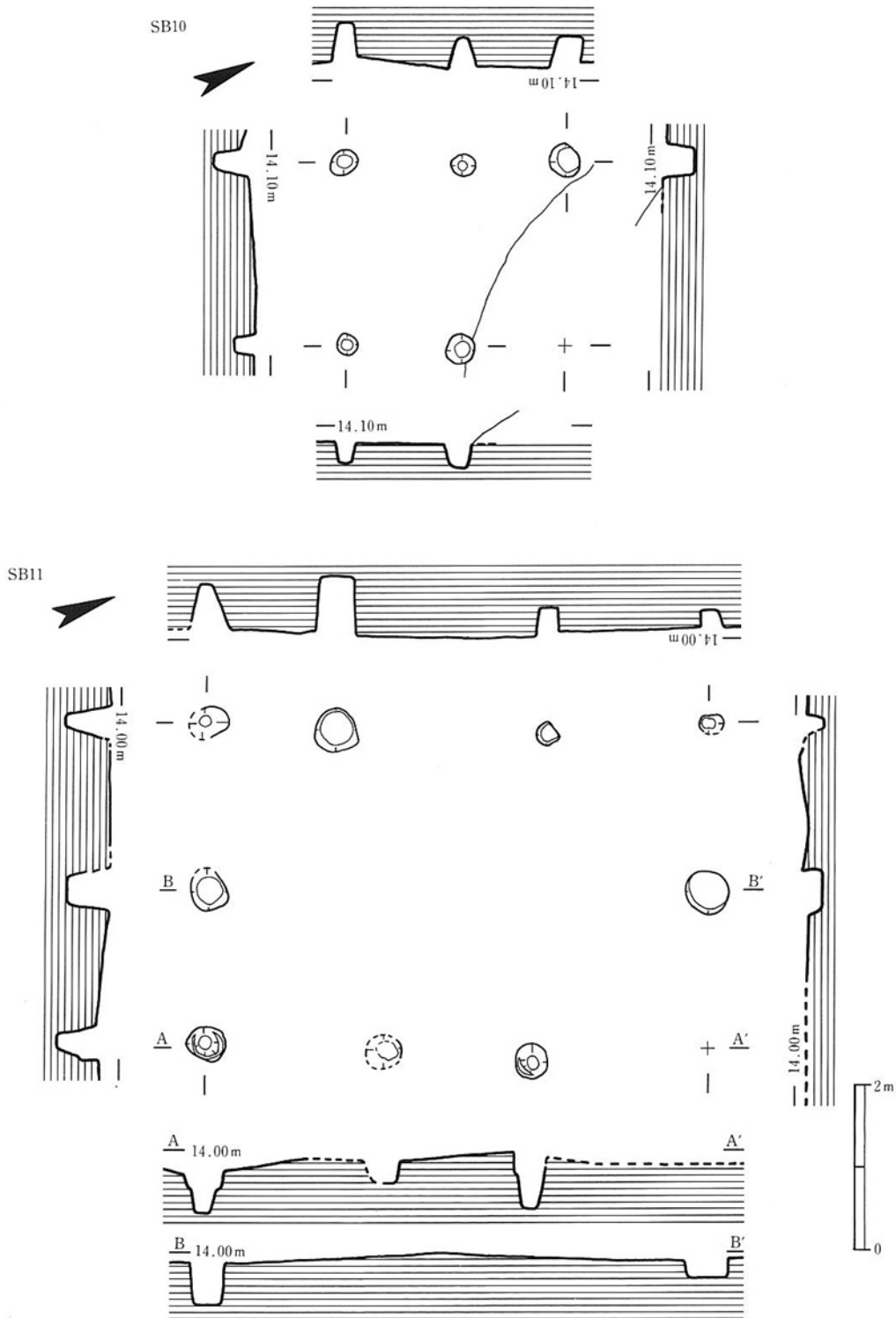
S E01周辺住居群 3地区遺構配置図Aの北東に位置し、S E01・S D02を検出するとともに柱穴が密集していることが確認された。また、柱穴の遺物から14世紀から15世紀にかけて営まれたと考えられる掘立柱建物跡を6軒検出することができた。また、焦土（網掛け部分）が2箇所から検出され、工房跡の可能性も考えられる。 (椿)



第28図 S E01周辺住居群実測図

SB10 1間×2間の建物。棟方向はN23°E。梁行長316cm・桁行長272cmを測る。北東端の柱穴については、調査区外のため未確認である。SE01周辺住居群の中では最小の規模である。

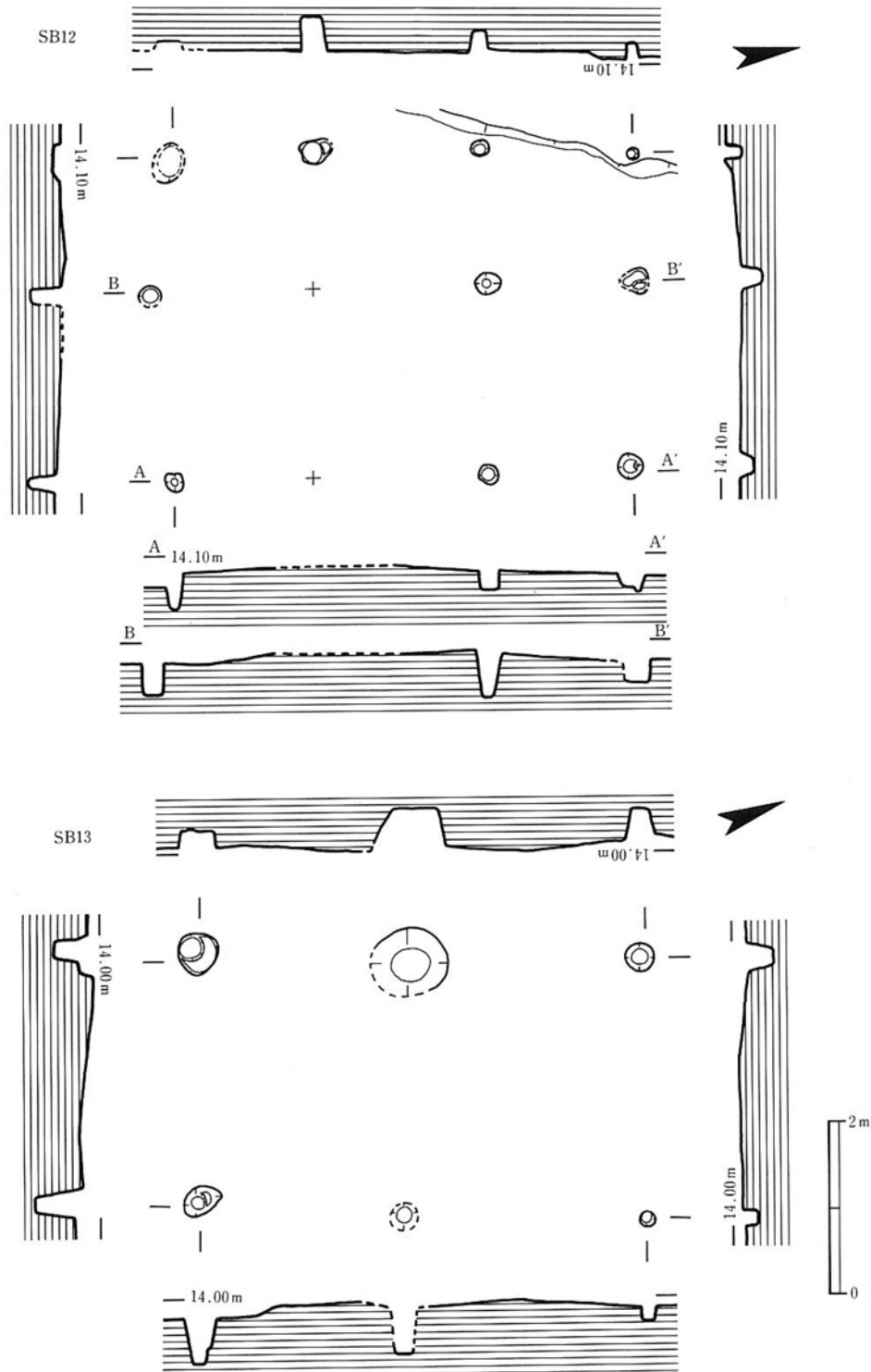
SB11 2間×3間の建物。棟方向はN22°E。梁行長384cm・桁行長600cmを測る。SE01周辺住居群の中では、最大の規模である。



第29図 SB10・11実測図

S B 12 2間×3間の総柱建物。棟方向はN10°E。梁行長360cm・桁行長544cmを測る。桁方向の柱間は、152cm+208cmである。

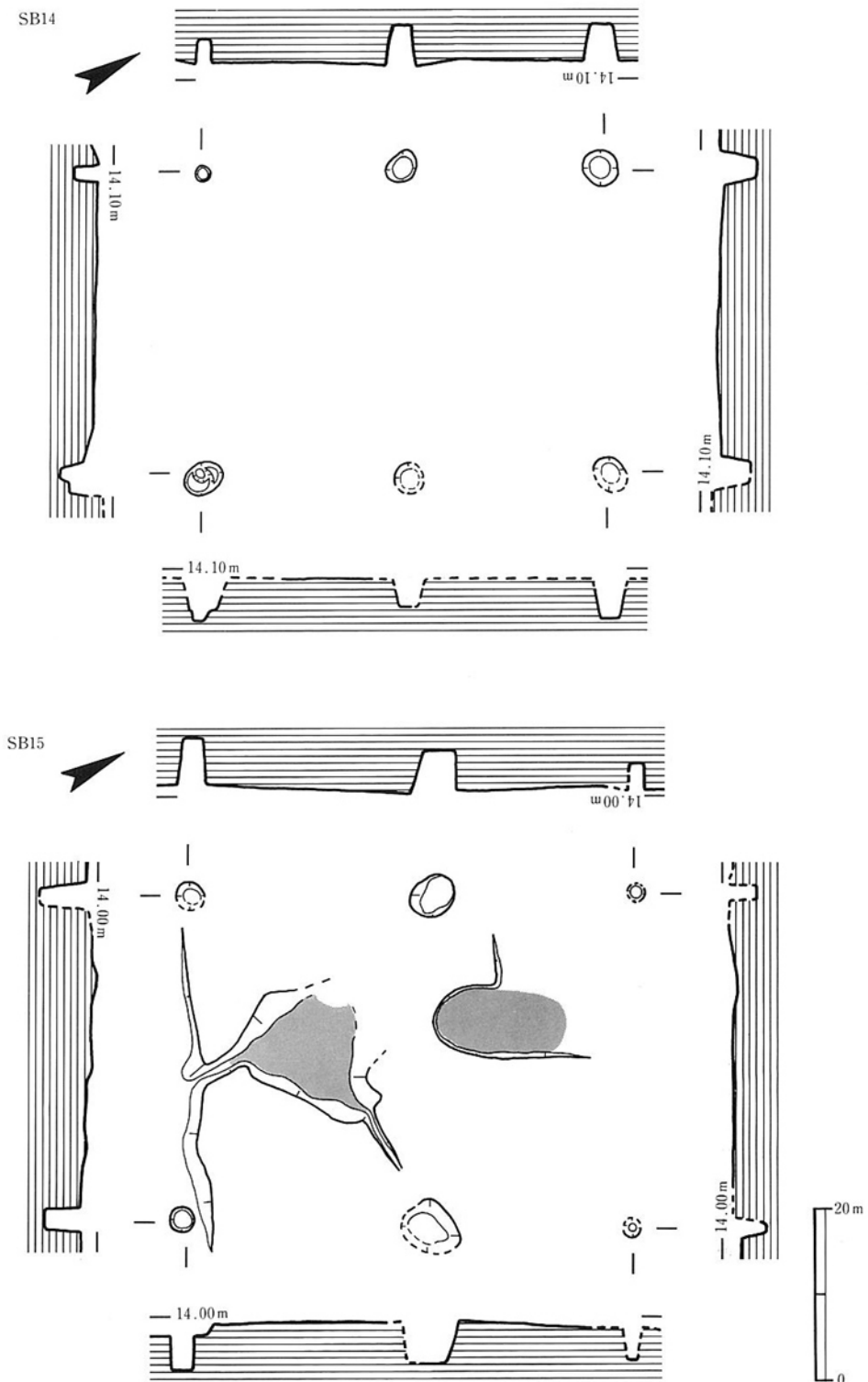
S B 13 南側寄りに位置し、1間×2間の建物。棟方向はN21°E。梁行長304cm・桁行長520cmを測る。S B 11に次ぐ規模である。



第30図 S B 12・13実測図

S B 14 南側に位置し、1間×2間の建物。棟方向はN27°E。梁行長354cm・桁行長480cmを測る。S E01周辺住居群の中では中規模の建物である。

S B 15 中央部に位置し、1間×2間の建物。棟方向は、N26°E。梁行長384cm・桁行長512cmを測る。S B 14と同規模で、方向性も同じである。建物にともなうとみられる2基は焼土痕跡が2つ確認されこれに付属する溝状の遺構が認められる。 (林)



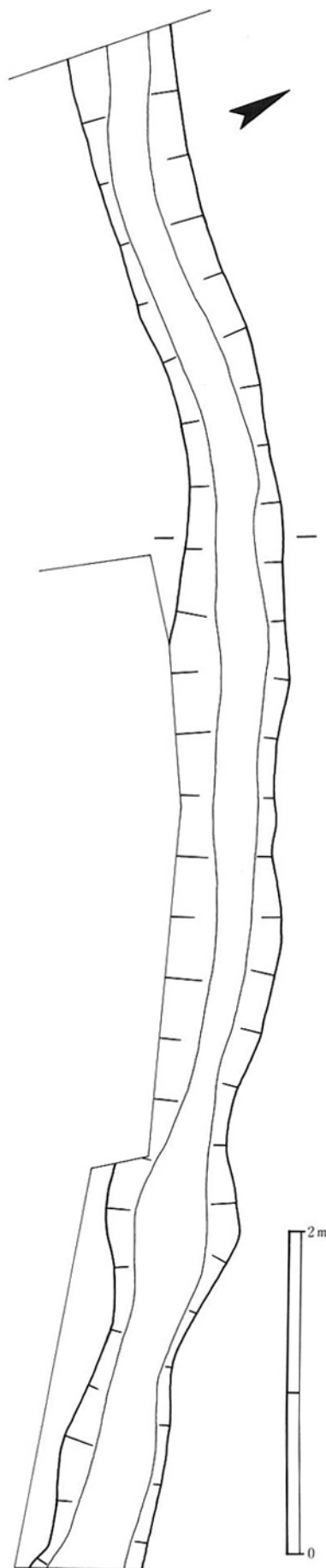
第31図 S B 14・15実測図

(2) 溝状遺構と遺物

溝状遺構は、全地区で13条が検出された。各地区ごとでは、1地区1条・2地区8条・3地区4条である。

SD02（第32図・第33図・写真20） 2地区北東部に位置し、検出部分の長さ約20m、幅80~160cm、深さ15~50cmを測り東西に延びる。底部は、凹凸がある。断面は、U字形または逆台形になっている。SD02は、他の遺構との関連については不明である。

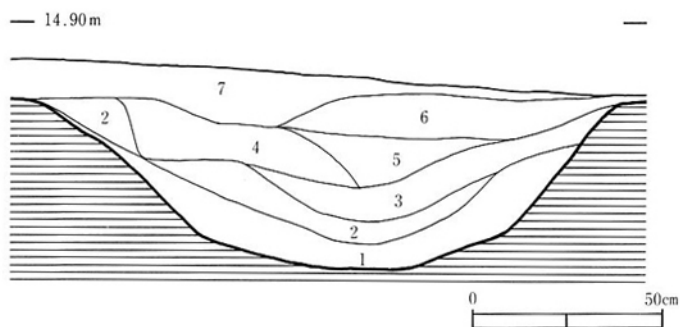
埋土は、砂質層や粘土層からなり、中層の明黄褐色砂質土に、鉄分の沈着がみられる。下層からは足鍋や摺鉢等中世の土器片が多数出土した。また、上層からは、陶器や磁器等が出土している。このような遺物の出土状況から、この溝状遺構は、中世から近世にかけてのものと考えられる。



第32図 SD02実測図

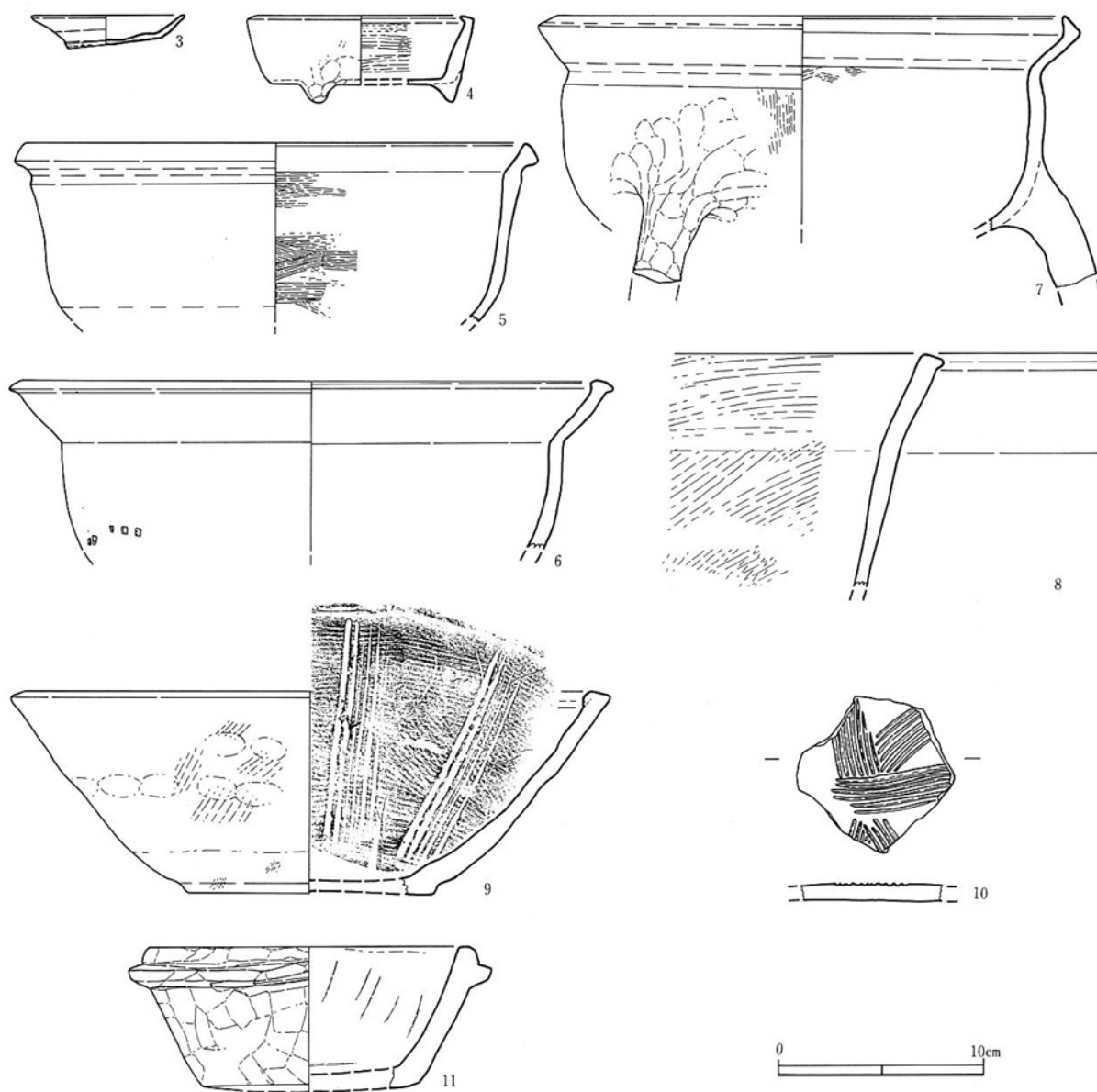


写真20 SD02完掘（東から）



土層凡例	
1 におい黄褐色砂質土（無砂粒）	5 明黄褐色砂質土（鉄分を含む）
2 におい黄褐色粘質土土	6 におい黄褐色砂質土（無砂粒）
3 灰黄褐色砂質土（砂粒大）	7 橙色砂質土（細砂粒）
4 におい黄橙色砂質土（細砂粒）	

第33図 SD02土層断面図



第34図 S D02出土遺物実測図(1)

3は、土師器皿。全体が黒っぽく焼成不良。口径7.2cm。4は、瓦質土器の香炉。脚部を体部に貼り付け指で押さえた痕跡がある。口縁端部は、内側に折れ曲がる。外面内面共に、ハケ後ナデ調整。口径9.9cm、底径8.4cm、器高4.3cm。5～8は、瓦質土器鍋。口縁端部は「く」の字状に屈曲。内面ナデ調整。7の脚部は指圧痕がみられる。底部は格子状の叩き。外面は煤が付着。口径24.4cm。8の内面には、ハケ後ナデ調整。9・10は瓦質の摺鉢。9は、内面ハケ調整後6本を単位とする櫛目。体部下部には粘土帯の継ぎ目の痕跡がある。外面は指圧痕。ハケ後粗いナデ。口径29cm、底径12cm、器高10cm。色調は、褐灰色。10の底部は、破片であり内面は6本を単位とする櫛目が施される。11は石鍋。ノミによる加工・切削痕あり。内面はノミ痕を消して平滑にしている。鏝部は横断面が台形で体部と直交して、外側に伸びる。口径15.4cm・外径(鏝部)17.6cm・底径10.4cm・器高7cm。



3



4



5



7



6



8



9

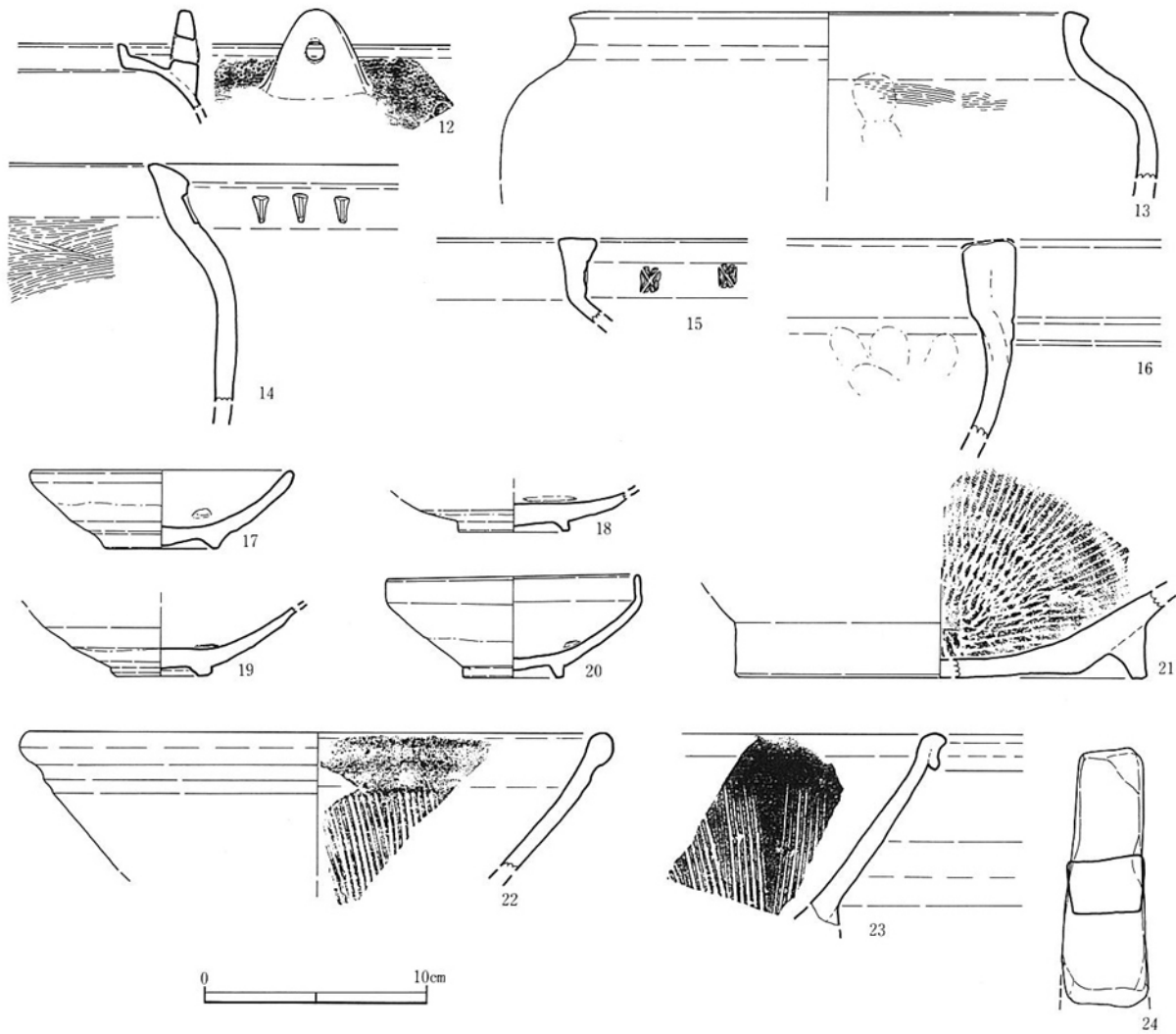


10



11

写真21 S D02出土遺物 (1)



第35図 S D02出土遺物実測図(2)

12は、瓦質土器の土瓶。型合わせ。耳部貼り付け。13は、瓦質の火鉢。内面外面共に、ハケ後ナデ調整。口縁部は外面にやや肥厚する。口径は22.8cm。14・15は、火鉢。14は、瓦質で口縁部外面上部に刺突を施す。内面上部の口縁部についてはハケをナデで消している。外部は叩き後ナデ調整。15は、瓦質で口縁部外面上部印花を施す。14・15共に焼成は、硬質。16は甕の口縁部。口縁部上端は剥落。外面の口縁下部に、2本の沈線を施す。17~19は陶器皿。17の器壁は肉厚で、高台は無釉。釉は、黄緑色に発色している。見込み部に4か所の胎土目。底部は肉厚で膨らむ。口径11.4cm・器高3.6cm・底径5.2cm。18は、見込みに貝目痕3か所。高台は無釉。釉は藁灰釉。20は、萩焼浅鉢。釉は藁灰釉を施し、高台は無釉。見込み部分にハマ痕4つ。21~23は、摺鉢。21は、二重高台。焼成は硬質。回転ヘラ削り後に高台貼り付け。22は、薄く鉄釉を施す。23は、胴部から高台が貼り付けてある。口縁端部を外側に折り返す。内面には7本を単位とする櫛目。鉄釉を施す。24は、砥石。粗粒の砂岩。荒砥とみられ4面使用。

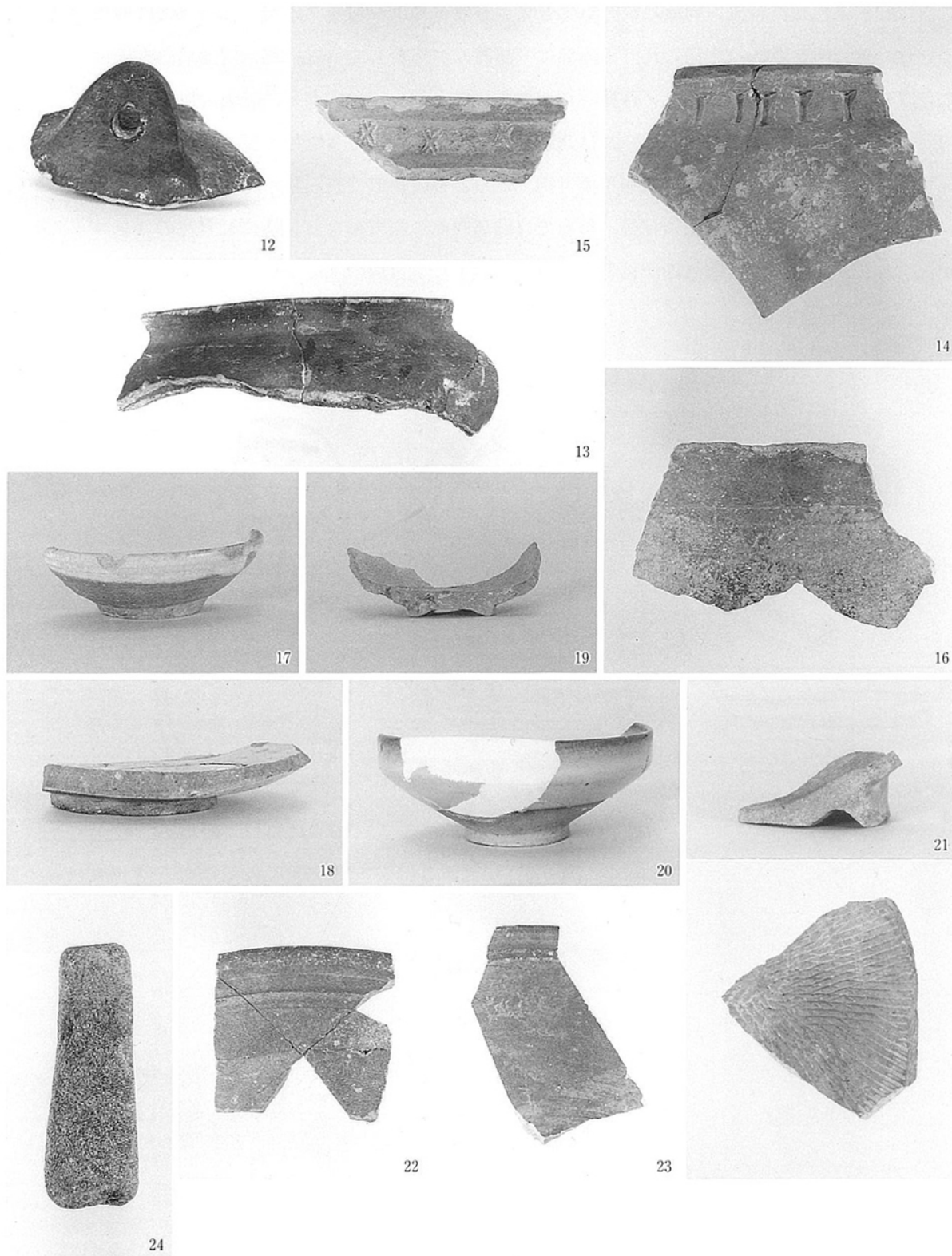
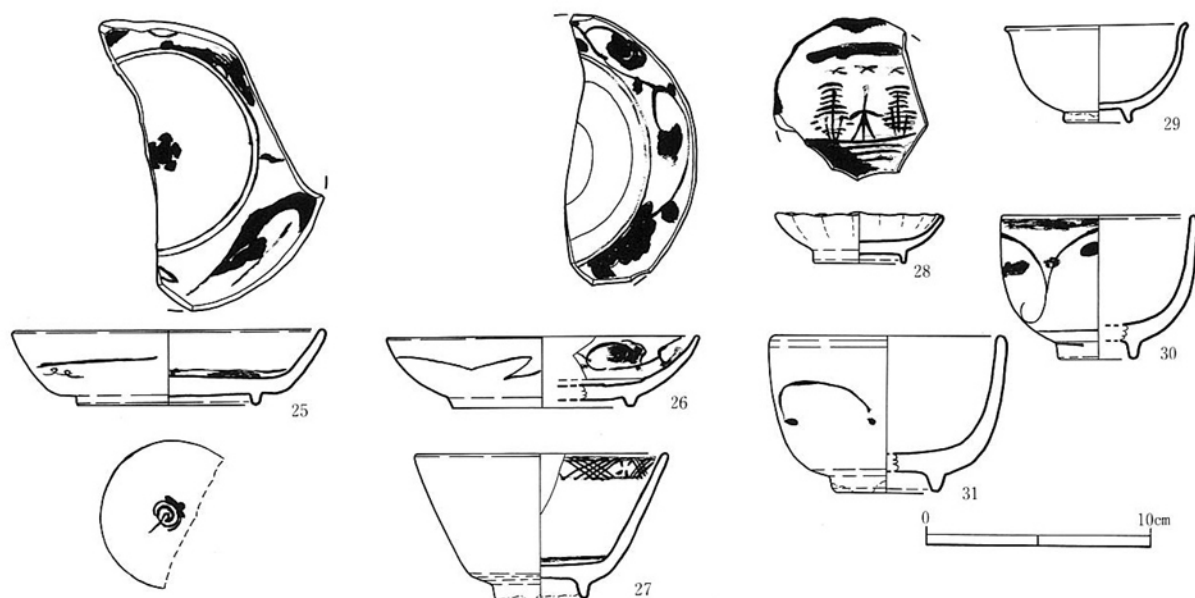


写真22 S D02出土遺物 (2)

25は肥前系白磁染付皿。内面に花唐草文と見込五弁花のコンニャク印判、外面底部に渦福が描かれている。重ね焼きされたと見られ外面体部に一部破片が溶着している。26は肥前系白磁染付皿。内面に花唐草文が描かれており、蛇ノ目釉ハギが施されている。27は肥前系白磁染付皿。輪花が施され、内面に楼閣山水文が描かれている。28は萩焼小椀。内面、外面とも灰釉が施されており、口縁部に端反りが見られる。29・30は肥前系陶胎染付椀。どちらも腰張形で長石釉が施され、外面に唐草文が描かれている。31は肥前系青磁染付椀。杉形で口縁部内面に四方禪文と見込に五弁花のコンニャク印判が見られ、高台部内側に離れ砂が付着している。いずれも遺構の上層から出土した近世の陶磁器である。



第36図 SD02出土遺物実測図(3)

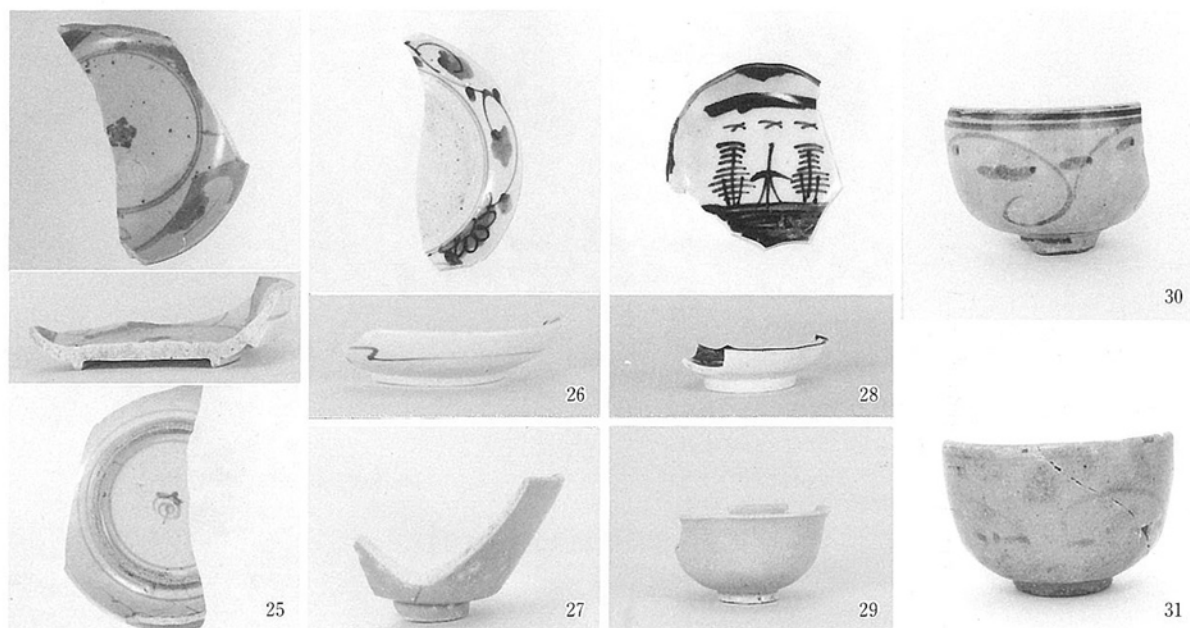
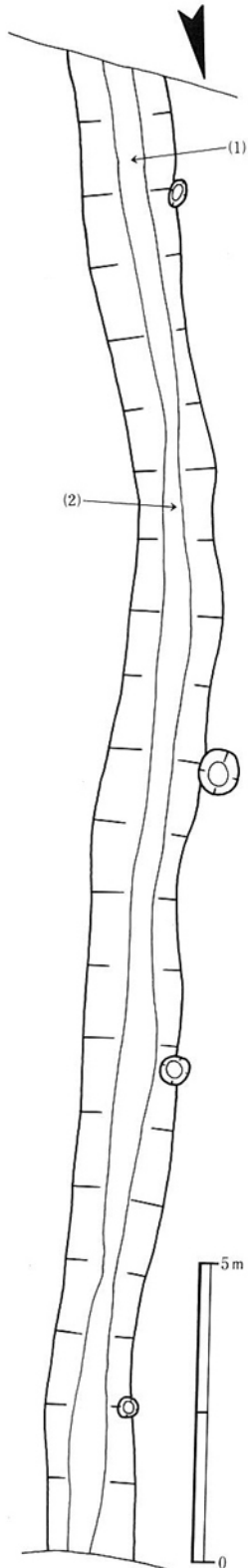


写真23 SD02出土遺物(3)

S D03 2地区の北西部をほぼ南北に走る幅150cm、深さ10cmの溝状遺構で、その流路は同じ地区から検出された掘立柱建物の棟方向と一致している。溝に沿っていくつか柱穴が検出されたが、溝にともなうものであるかどうかは明確ではない。遺構にともなう出土遺物としては瓦質の足鍋と角閃安山岩製の茶臼がある。足鍋は口縁端部は「く」の字状に屈曲。内面はハケ後粗いナデ、脚貼り付けにともなう指頭痕。外面は口縁部から体部にかけてナデ・粗いナデ、脚部から底部にかけて貼り付け指頭痕。底部は格子状のタタキ。茶臼は、使用による摩滅が激しい。直径40cmと推定される。

(林)



第37図 S D03実測図

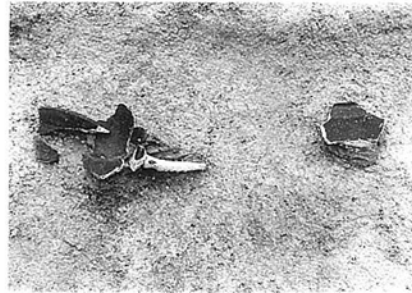


写真24 S D03遺物出土状況 (1)



写真25 S D03遺物出土状況 (2)

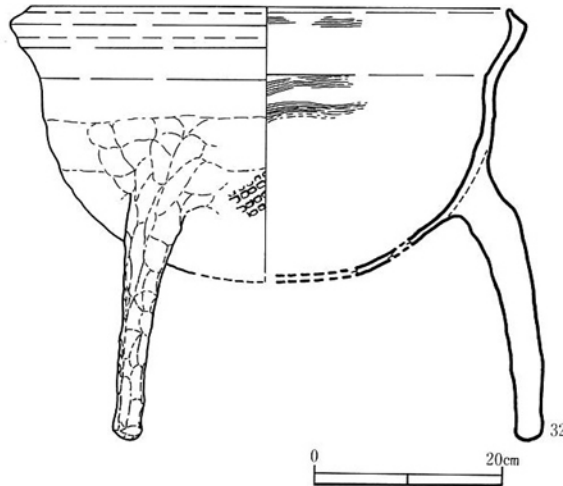
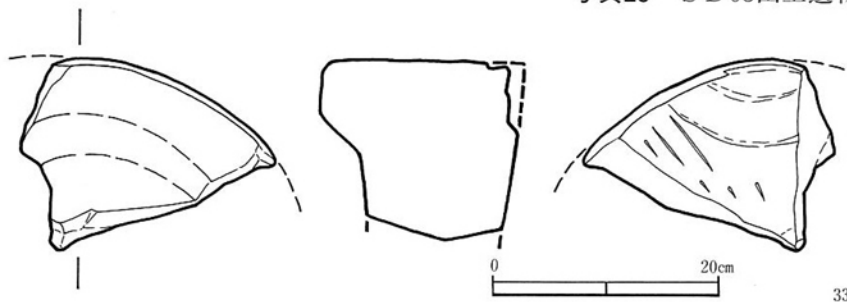


写真26 S D03出土遺物 (1)



第38図 S D03出土遺物実測図

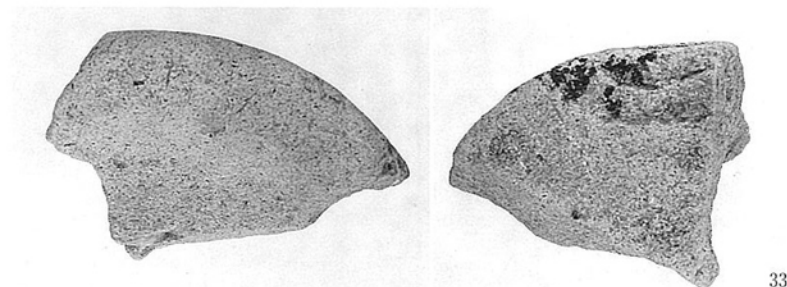
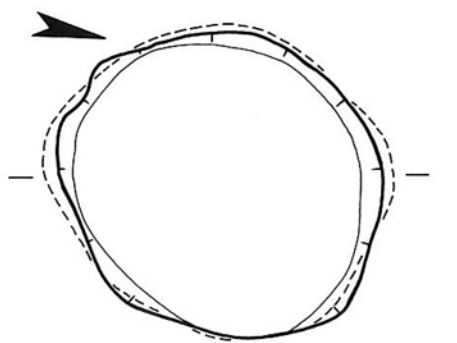


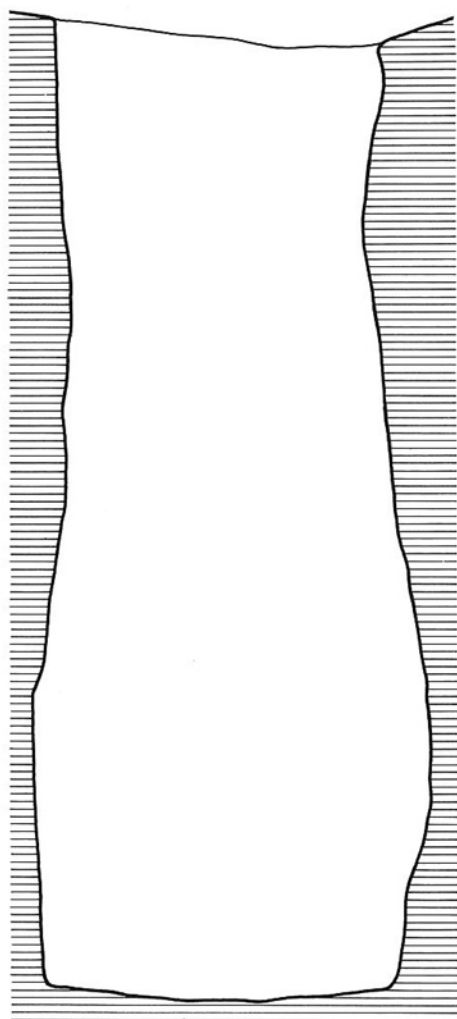
写真27 S D03出土遺物 (2)

(3) 井戸と遺物

今回の調査で確認された井戸は、S E01の1基のみであった。この井戸は、3地区の南西に位置し、平面が楕円形で長径94cm、短径80cm、深さ260cmの底脹型の素掘りの井戸である。壁体は、花崗岩の風化土の堆積層を掘り抜いており安定している。底から10cm～60cmに湧水層が確認され水量も多い。また、底部は粘土層にあり、礫や小石等は確認されない。最下層の遺物として、近世の風呂釜、火鉢、磁器等が出土している。



—13.80 m



第39図 S E01実測図



写真28 S E01土層断面 (東から)

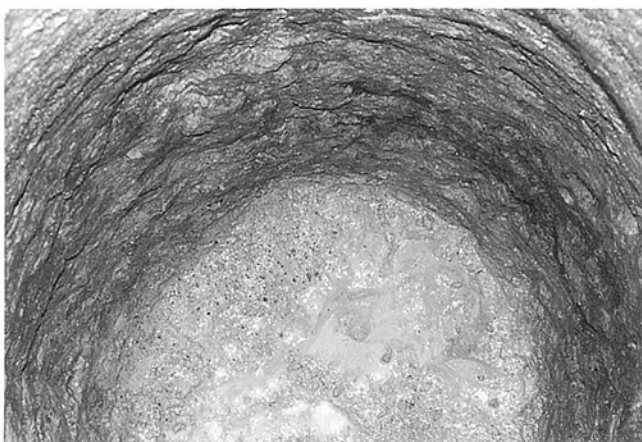
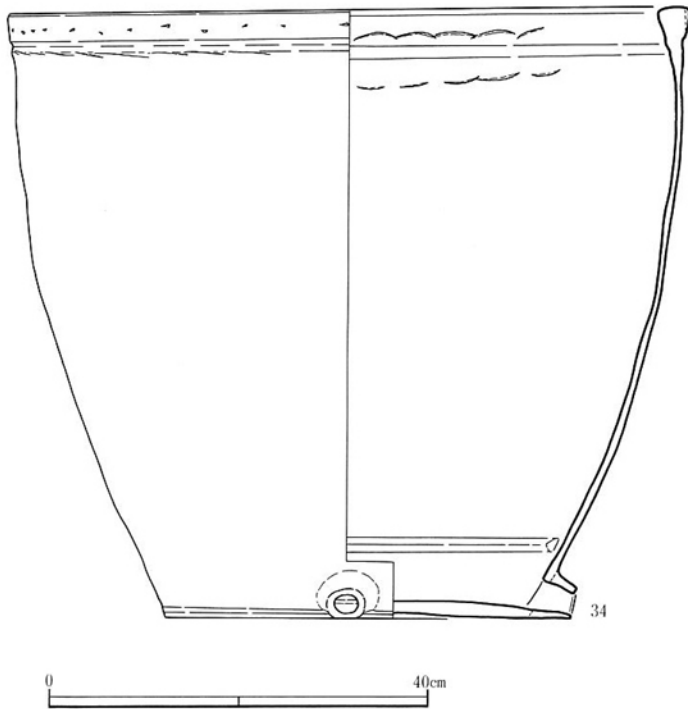


写真29 S E01完掘 (東から)



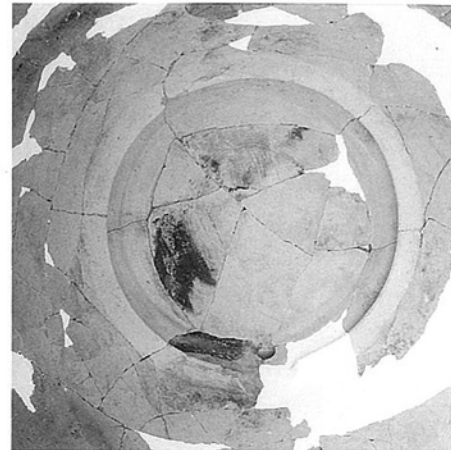
34は、陶器風呂釜である。器壁は5mm～6mmで均一に仕上げられている。内面調整は、タタキ後ナデ。外面は、丁寧なナデで仕上げられている。煤の付着が底部から体部下部にまで確認できるため、使用後にS E01の廃棄と同時期に投棄されたと考えられる。内面底部から5cmの高さには、げす板を置くためのツメが巡っている。排水口は、内側から止水栓が取り付けられるように口径が外部より、内部の方が大きく設定されている。

近世佐野焼と考えられ、江戸時代後半以降のものと推定される。

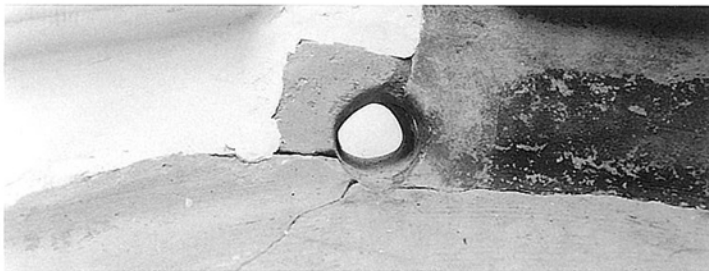
第40図 S E01出土遺物実測図(1)



正面



底部内面



内部排水口



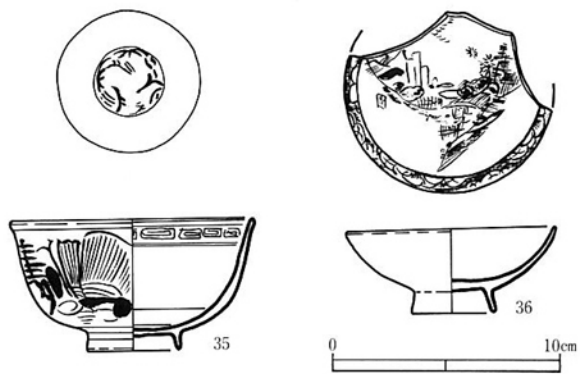
排水口外面

写真30 S E01出土遺物(1)

36は、肥前系の染付碗である。口縁は端反ぎみで、高台畳付で釉ハギである。口径10.5cmで器高6.6cmである。外面には「寿」を3方に配し、その間に草花文を施す。内面口縁には、雷文をほどこす。見込は「松竹梅くずし」か。

37は、瓦質土器の瓶掛形と考えられる火鉢である。型づくりによる成形。胴膨らみで内面の側面・底面をハケで調整している。高台貼り付けである。2箇所に「獅子面」の装飾把手があり、貼り付けである。把手より渦巻き文・山水文を施している。口径19cmである。切畑遺跡から3kmあまりにある佐野窯では、江戸時代後期まで、土鍋・釜・火鉢・土瓶等の小物を生産していた。火鉢に関しては、黒焼きによって瓦質に焼成していた。したがって、佐野で生産された可能性がある。

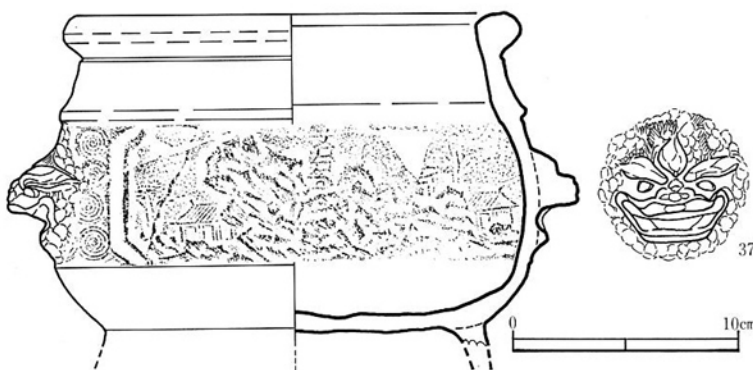
35は、薄手木杯型の酒杯で、見込みには線描で山水文を描く。色絵付けである。口縁には、花文を施し、高台畳付は、釉ハギである。口径9.2cmで、器高3.8cmである。S E01から出土した遺物の中では最も新しく、江戸後期の遺物と比定できる。S E01の上限をあらわす遺物である。 (椿)



第41図 S E01出土遺物実測図 (2)



写真31 S E01出土遺物 (2)



第42図 S E01出土遺物実測図 (3)



写真32 S E01出土遺物 (3)

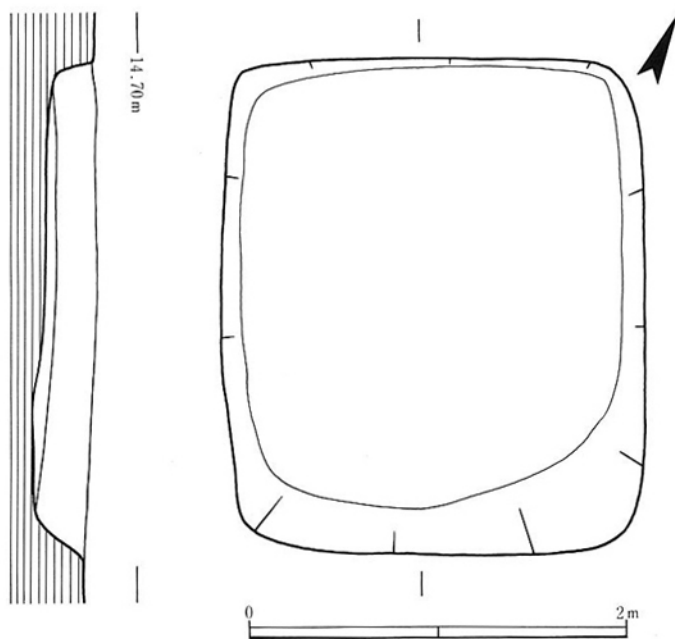
(4) 土坑と遺物

今回の調査では、全地区で合計18基の土坑が確認された。S K05とS K10からは多数の遺物が出土したが、その他の土坑については出土遺物が少なく、その用途・時期について不明なものが多い。平面形は円形、長円形、隅丸長方形、不整形円形に分かれる。

S K04

S K04は2地区の北部東寄りに位置する。平面形が220cm×186cmの隅丸長方形で、深さが27cmの土坑である。平面の規模の割に浅いので、後世の削平を受けたと考えられる。埋土は単一で、遺物から12世紀の土坑と考えられる。

38、39は土師器皿である。38は口径7.8cm、底径4.2cm、器高1.9cm、39は口径7.8cm、底径4.0cm、器高1.9cm。ともに器壁は回転ナデで調整し、底部は回転糸切り。ロクロはともに右回転である。40は白磁皿である。口径10.3cm、底径4.0cm、器高3.1cm。釉は浅灰橙色、胎土は灰白色である。底部内面から口縁部外面にかけて回転ナデで調整し、その他は回転ヘラ削りを施す。ロクロは右回転である。



第43図 S K04実測図

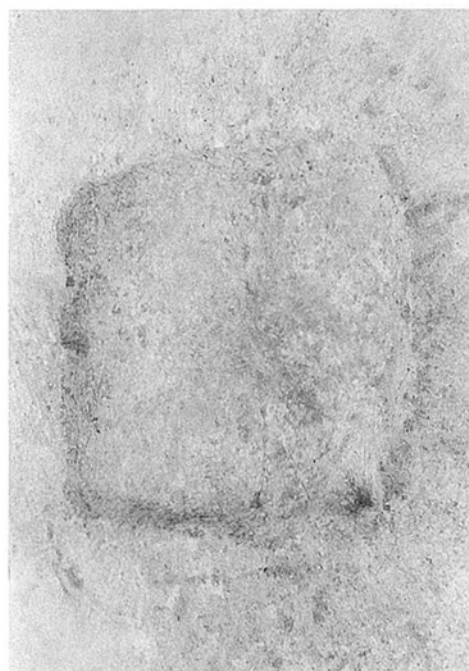
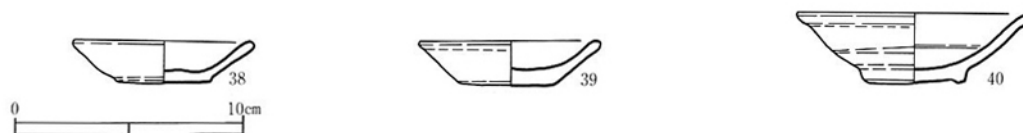


写真33 S K04完掘（北から）



第44図 S K04出土遺物実測図



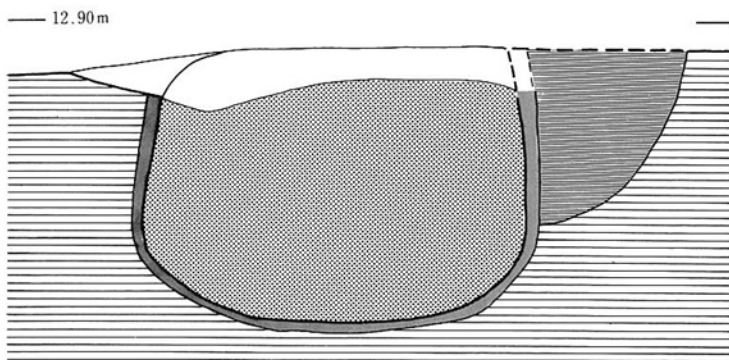
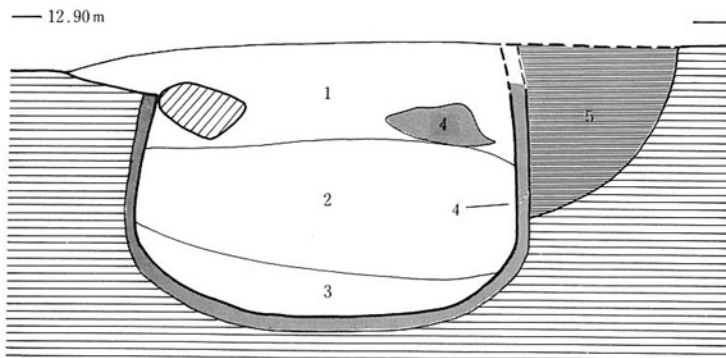
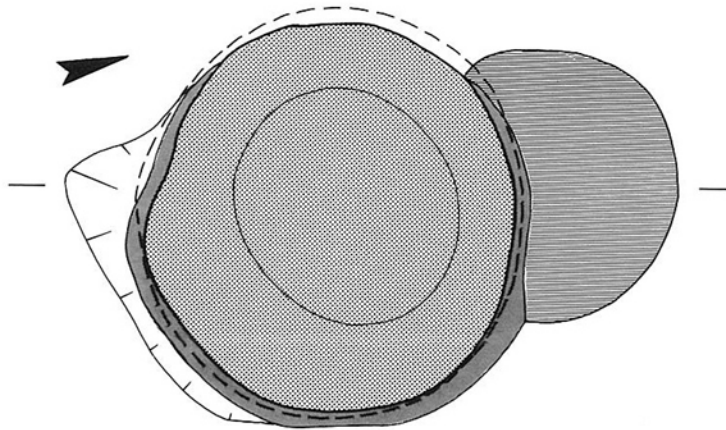
写真34 S K04出土遺物

S K 05

S K 05は2地区の南部ほぼ中央に位置する。平面形は105cm×95cmの円形、深さ7cmの土坑で、S X 04を切る。埋土中層は、近世の遺物を多量に含む黄褐色砂質土の層である。土坑内面全体に厚さ4cm程度の明赤褐色粘土が貼られていることから灌水用の水溜であったと思われる。

第46図(41~60)は陶器である。41は小碗である。萩焼の丸腰碗で、口径7.1cm、底径2.9cm、器高3.3cm。高台は削り出し、他は回転ナデで調整する。ロクロは左回転。釉は明緑灰色、胎土は浅黄色で

ある。42は碗である。萩焼の端反碗で、口径8.5cm、底径2.8cm、器高4.2cm。高台は削り出し。高台内の十文字は墨書である。釉は灰白色、胎土は灰白色である。43は小碗である。口径8.2cm、底径3.0cm、器高5.7cm。高台は削り出し。ロクロ左回転。釉はオリーブ灰色、胎土は浅黄橙色である。44~46は碗である。ともに萩焼の広口碗である。44は口径9.0cm、底径3.4cm、器高4.8cm。釉は灰白色、胎土はにふい黄橙色である。45は口径10.3cm、底径4.0cm、器高5.4cm。釉は浅黄橙色、胎土は浅黄橙色である。46は口径11.7cm、底径4.2cm、器高6.0cm。釉は灰白色の藁灰釉、胎土は浅黄色である。ともに体部下半はへう削り。47, 48は鉢である。ともに萩焼の浅鉢。47は口径1.4cm、底径5.0cm、器高4.9cm。ロク



[土層凡例]	
1.	黄褐色砂質土 + 灰黄褐色土
2.	陶磁器層 (すき間に1の土)
3.	オリーブ黒色粘質土
4.	明赤褐色粘質土
5.	褐色砂

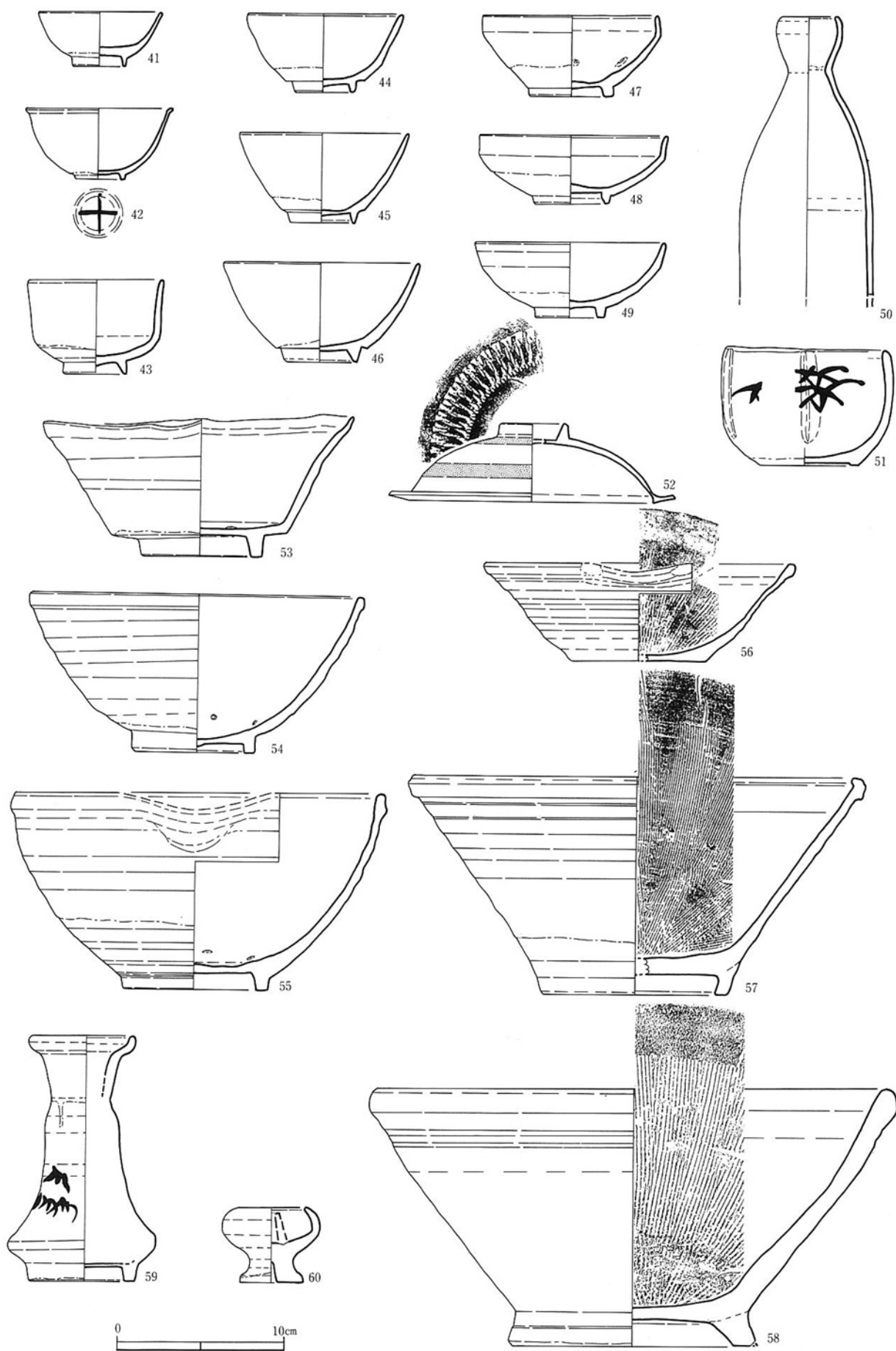
第45図 S K 05実測図



写真35 SK05遺物出土状況（東から）



写真36 SK05完掘（東から）



第46图 SK05出土遗物实测图(1)

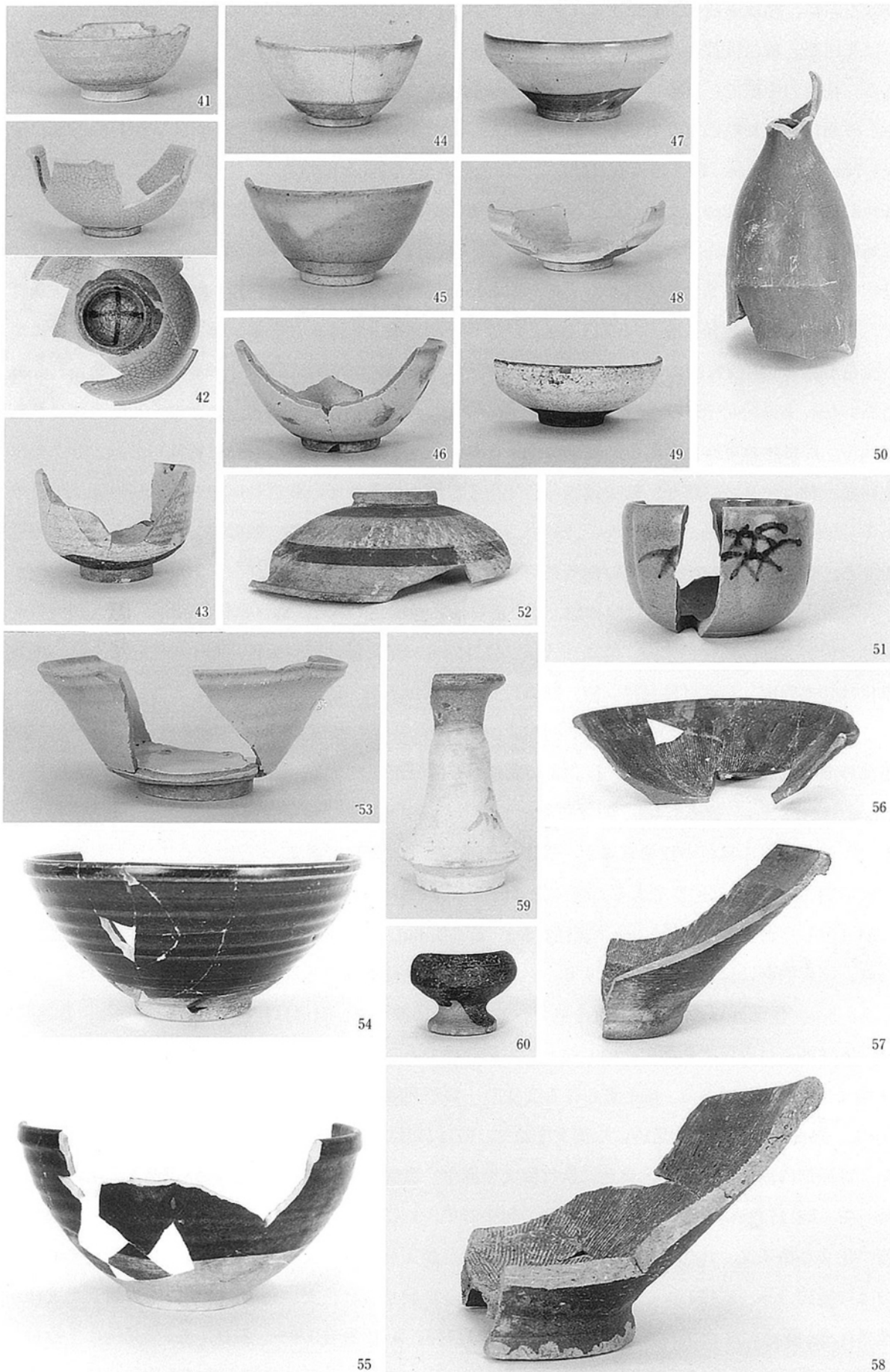
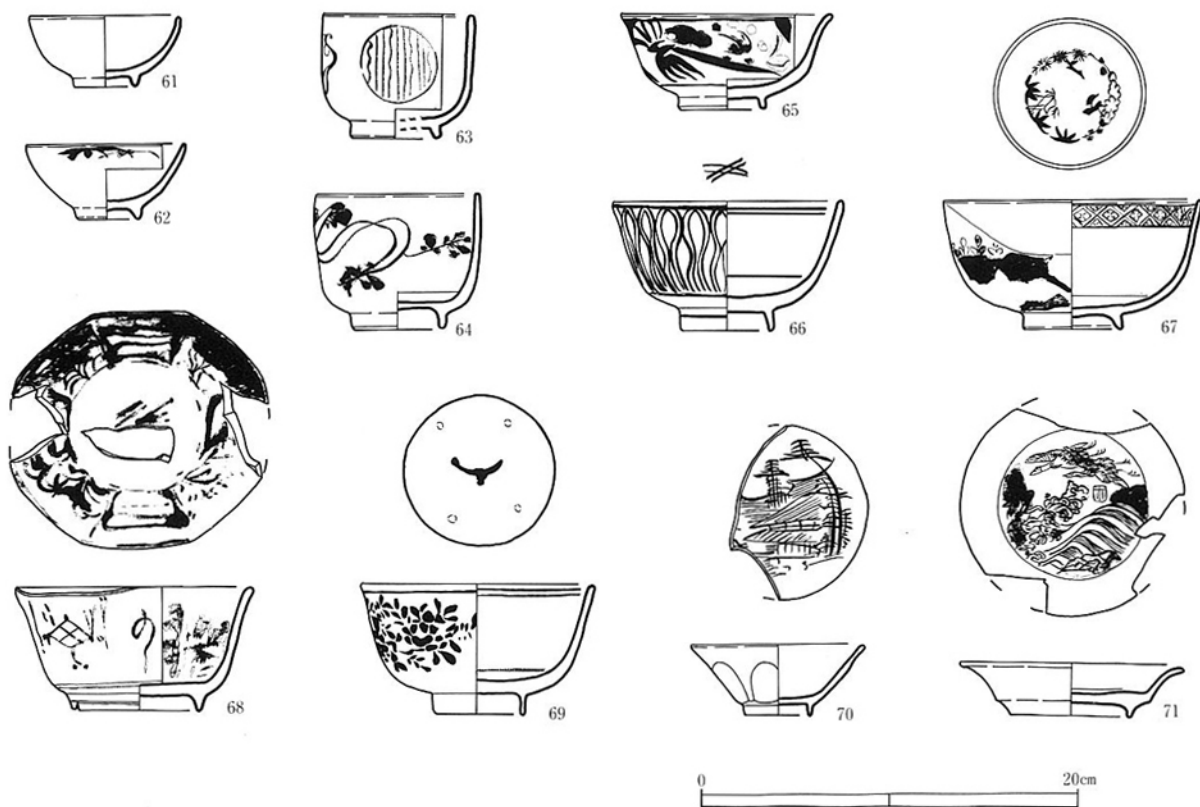


写真37 SK05出土遺物(1)

口は左回転。釉は灰白色、胎土はにぶい黄色である。48は口径11.1cm、底径4.4cm、器高4.2cm。ロクロは左回転。釉は灰黄色の藁灰釉、胎土は浅黄色である。47には4か所の窯道具痕がある。49は椀である。萩焼の中椀で、口径11.4cm、底径4.0cm、器高4.6cm。釉は灰白色の土灰釉、胎土は灰褐色である。外面は二次加熱により変色し、煤が付着する。内面に窯道具痕が見られる。50は徳利である。口径3.2cm、胴径8.1cm。釉は緑灰色、胎土は灰黄色である。51は火入である。肥前系陶器で、口径9.5cm、底径6.4cm、器高7.2cm。ロクロ成形後に体部外面5か所をおさえる。化粧掛け長石釉を施すが、内面は無釉、底部は碁笥底である。52は壺蓋である。口径14.6cm、器高4.7cm、暗褐色彩色(図の網掛け部分)の間にへら状工具の刺突による文様が施される。内面のみ褐色の釉を施す。53は鉢である。萩焼で、口径18.5cm、底径7.2cm、器高8.2cm。口縁6か所を押さえ輪花とする。釉は灰白色、胎土はにぶい橙色である。内面底部に5か所の窯道具痕がある。54は鉢である。萩焼で、口径20.1cm、底径7.0cm、器高9.4cm、回転へら削りを施す。釉は黒褐色、胎土はにぶい黄橙色である。内面に5か所の窯道具痕が残る。片口鉢の可能性ある。55は片口鉢である。口径21.8cm、底径8.5cm、器高11.7cm、ロクロは左回転。釉はオリーブ黒色、胎土は灰白色である。内面に5か所の窯道具痕がある。56~58は摺鉢である。56は口径18.8cm、底径8.2cm、器高5.9cmで、底部外面のみ無釉。釉は黒褐色、胎土は明赤褐色である。櫛目単位は14本。底部は回転糸切り。57は口径26.0cm、底径11.0cm、器高13.2cm、体部下位から高台内にかけて無釉。釉は暗褐色、胎土はにぶい赤褐色である。櫛目単位は21本。高台は貼付け。58は口径31.0cm、底径15.2cm、器高15.3cm。畳付のみ無釉。釉は極暗褐色、胎土は橙色である。櫛目単位は10本程度。高台は貼付け。57、58の片口の有無は不明。59は花瓶である。口径6.0cm、底径6.5cm、器高14.9cm。回転へら削りを施す。頸部で釉を掛け分けており、上部内外面の釉は灰オリーブ色、下部外面の釉は灰色である。胎土はにぶい黄橙色。60は乗燭である。タンコロ形で、口径4.0cm、胴径5.8cm、底径3.8cm、器高4.4cm。芯立て部を欠損する。底部は糸切りで底面中央に軸孔がある。ロクロは左回転。極暗赤褐色の鉄釉を施す。底部は無釉。胎土は橙色である。

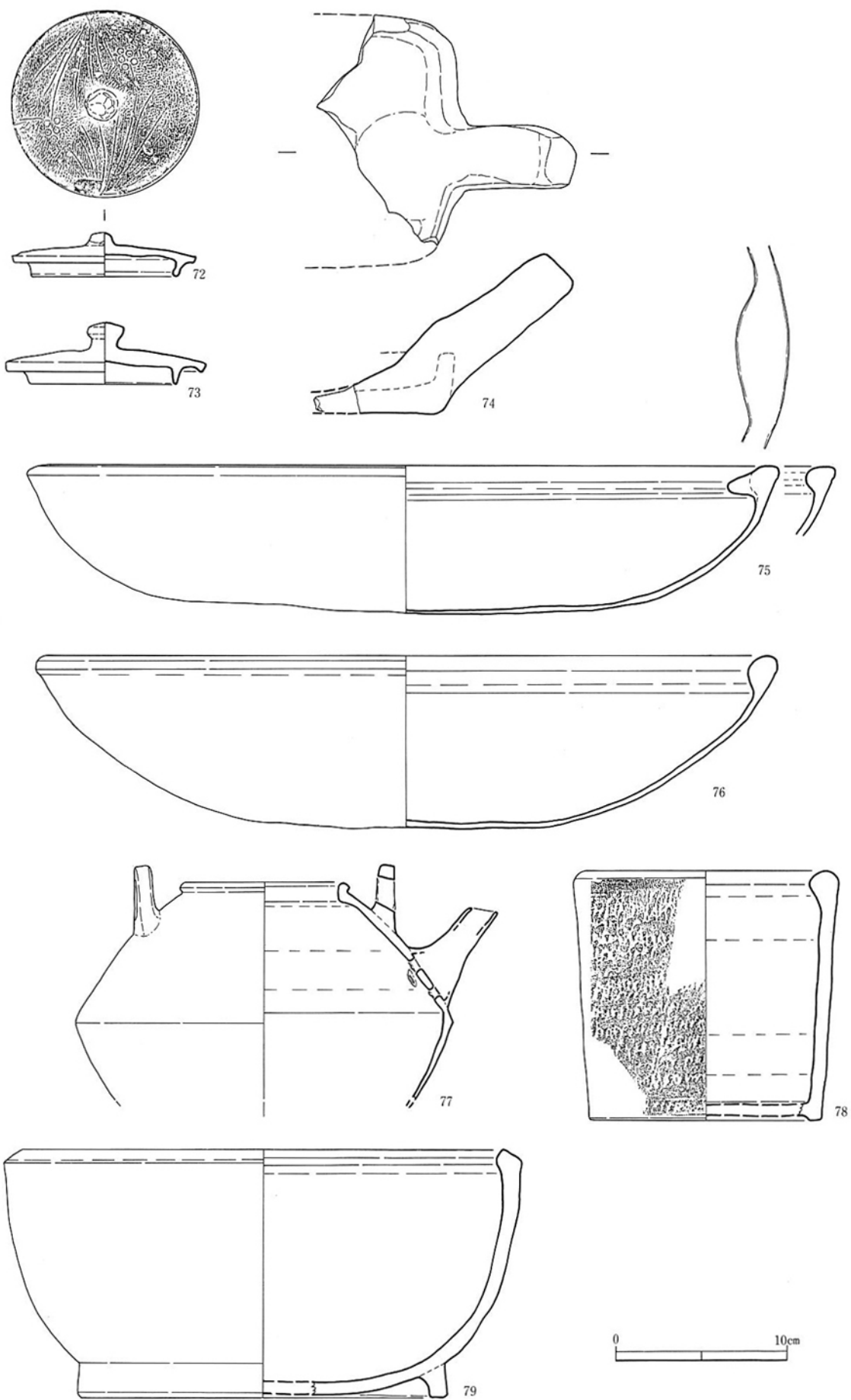
第47図(61~71)は磁器である。61、62は白磁小椀である。61は口径6.5cm、底径2.9cm、器高3.1cmで削り出し高台。62は口径6.9cm、底径2.6cm、器高3.4cm。口縁部外面に笹の文様を施す。高台畳付釉ハギ。高台内側には離れ砂が付着する。63~67は白磁染付小椀である。63は口径6.4cm、底径4.2cm、器高5.5cm。体部外面に丸文と鳥文を施す。高台畳付は釉ハギ。64は口径7.0cm、底径3.8cm、器高6.1cm。体部外面に唐草文を施す。63、64ともに肥前系である。65は口径9.3cm、底径4.2cm、器高4.3cm。文様は全て上絵付である。梅と思われる文様の一部が剥離する。66は口径10.0cm、底径4.0cm、器高5.7cmで、外面に花びら文、見込に松葉文を施す。67は口径11.3cm、底径4.4cm、器高5.7cm。外面に桐葉文、口縁部内面に四方嚮文、見込に松竹梅文を施す。裏底には「大明年製」の銘がある。高台畳付は釉ハギ。68は白磁染付椀である。八角形の旬干形で、口径10.3cm、底径5.6cm、器高5.6cm。内面に芙蓉手花文と格子文、外面に略文字とともとれる文様と菱文を交互に施す。69、70は白磁染付椀である。69は口径10.1cm、底径4.0cm、器高5.8cm、外面に型紙刷りの草花文、見込に何かの字を崩した文様が施される。見込に4か所の窯道具痕が残る。70は口径7.5cm、底径3.0cm、器高3.2cmで見込に上絵付で楼閣山水文を施す。口縁端部に赤彩。体部下半に面取りを施す。71は白磁小皿である。口径10.0cm、底径5.4cm、器高2.3cm。見込に荒磯と双鶴の文様を施す。



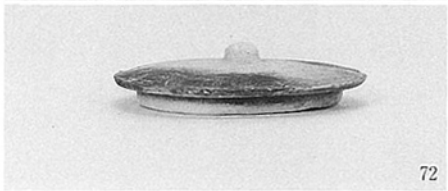
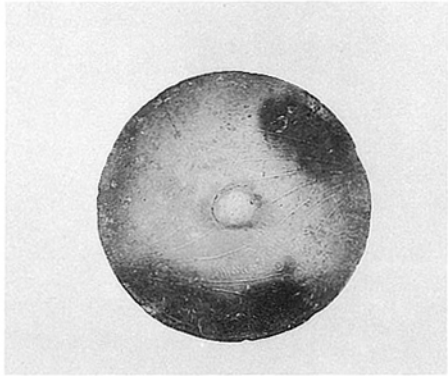
第47回 S K05出土遺物実測図（2）



写真38 S K05出土遺物（2）



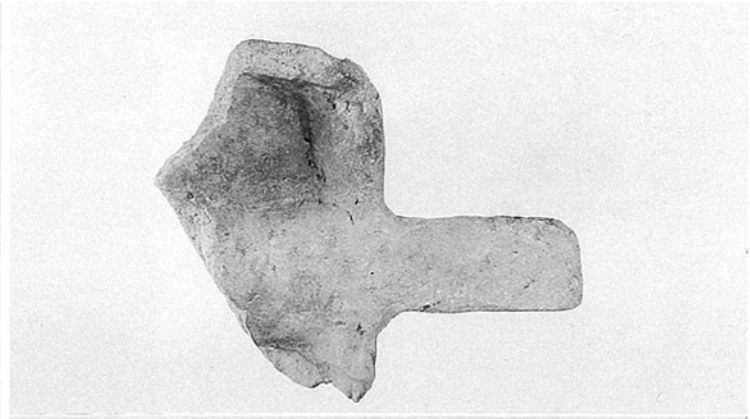
第48図 SK05出土遺物実測図(3)



72



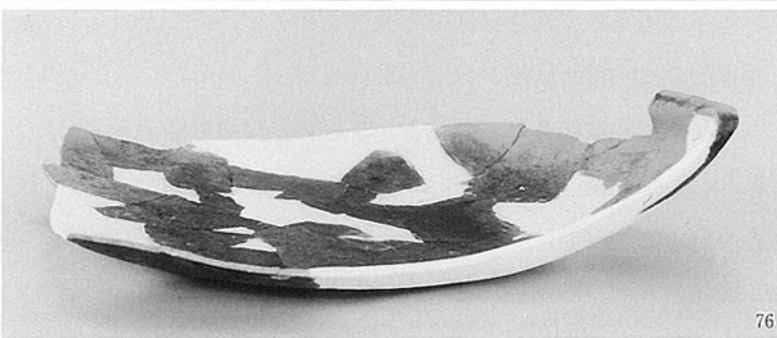
73



74



75



76



78

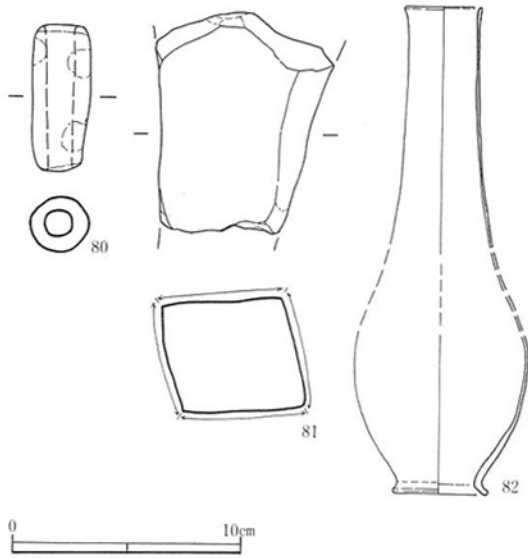


77



79

写真39 SK05出土遺物(3)



第49図 S K05出土遺物実測図（4）

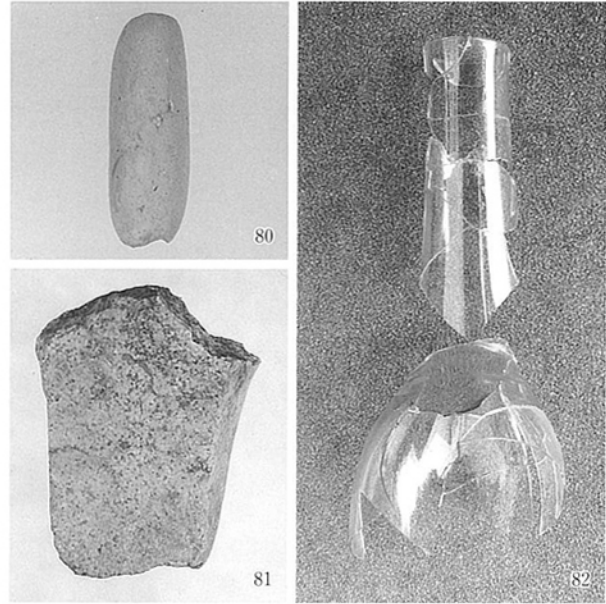


写真40 S K05出土遺物（4）

第48図72～76は土師器である。72は蓋である。口径10.8cm、底径8.2cm、器高2.6cm、上面は型押しによる草花文を施す。73は蓋である。口径8.6cm、器高3.6cm。上面に文様は見られない。74は十能である。幅は推定14.7cm、長さ8cm以上、高さ3.7cmの本体に角柱状の把手を貼付ける。75、76は焙烙である。75は口径43.8cm、器高9.0cm、76は口径41.8cm、器高10.1cm。ともに外型による成形の後、内面および口縁部を回転ナデで調整するが外面は不調整。75は口縁部内面2ヶ所に把手を貼付ける。76の把手の有無は不明である。75、76とも外面には全体的に煤が付着している。

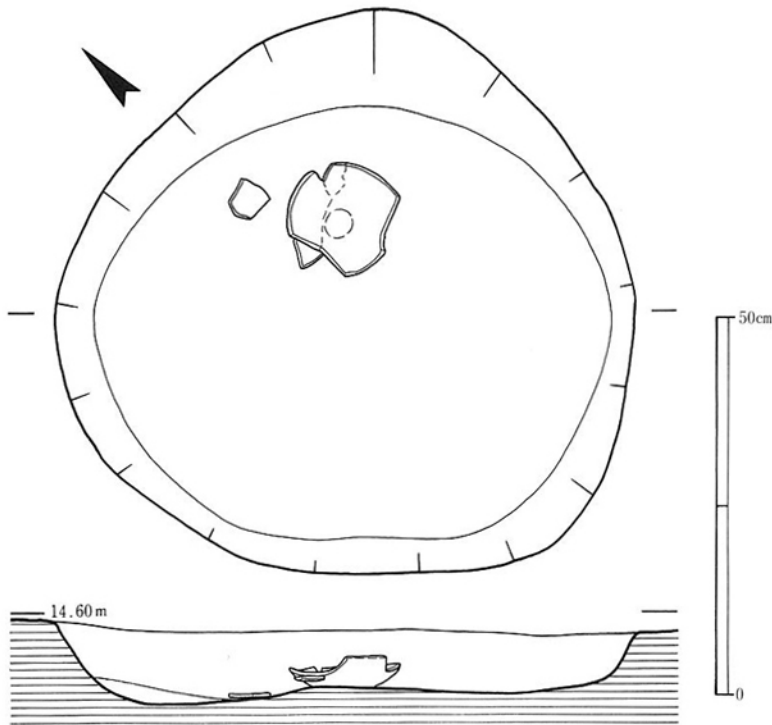
第48図77～79は瓦質土器である。いずれも胎土は精良で粗砂粒を含まない。炭素の吸着は良好で、黒ないし銀色を呈する。77は土瓶である。口径9.2cm、胴径22.0cm、注口および耳を貼付ける。78は鉢である。口径13.8cm、底径13.3cm、器高14.6cm、外面は型押しによる縄目状の文様、内面はナデで調整する。79は鉢である。口径28.0cm、底径21.0cm、器高14.3cm。内外面ともナデで調整し、高台を貼り付ける。

第49図はその他の遺物である。80は土錘である。外径26cm、内径1.1cm、長さ6.5cm、外面に指圧痕が残る。81は石英斑岩製の砥石である。残存部の幅7.9cm、長さ9.7cm。82は透明ガラス製ランプ火屋である。口径3.3cm、底径4.0cm、復元による器高は21.3cm。器厚は最小1mm、最大4mmと非常に薄手である。ガラス製品は他に、82とは別個体の透明ガラス製ランプ火屋片1、暗オリーブ色の瓶片1も出土した。

S K06

S K06は、2地区の北東部に位置する。平面形は最大径155cmの円形土坑で、深さは20cmである。埋土は単一で、遺物から13世紀の土坑と考えられる。83は土師器杯である。口径14.5cm、底径5.5cm、器

高3.9cm。胎土は淡黄色で、石英を含む。回転ナデで調整し、底部は糸切り。口クロは右回転。



第50図 S K06実測図

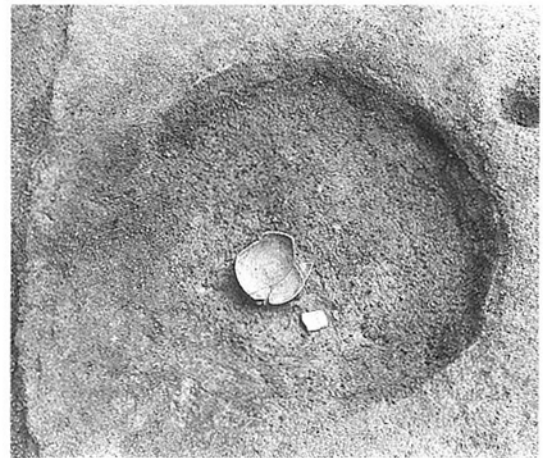


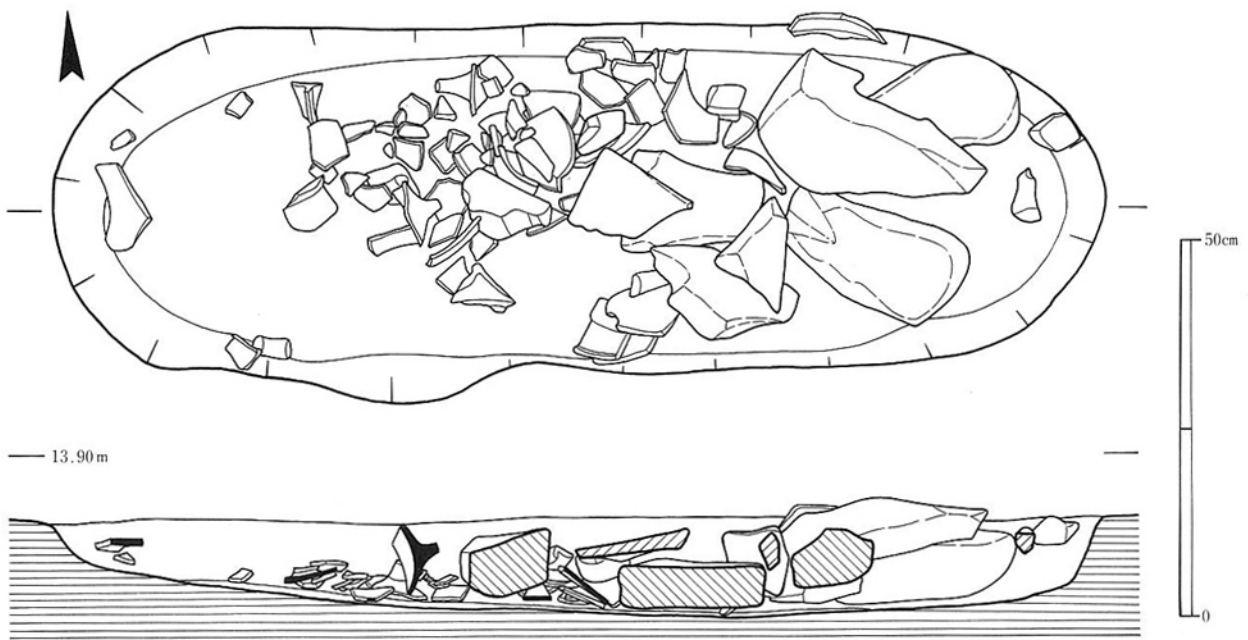
写真41 S K06遺物出土状況（北から）



第51図 S K06出土遺物実測図



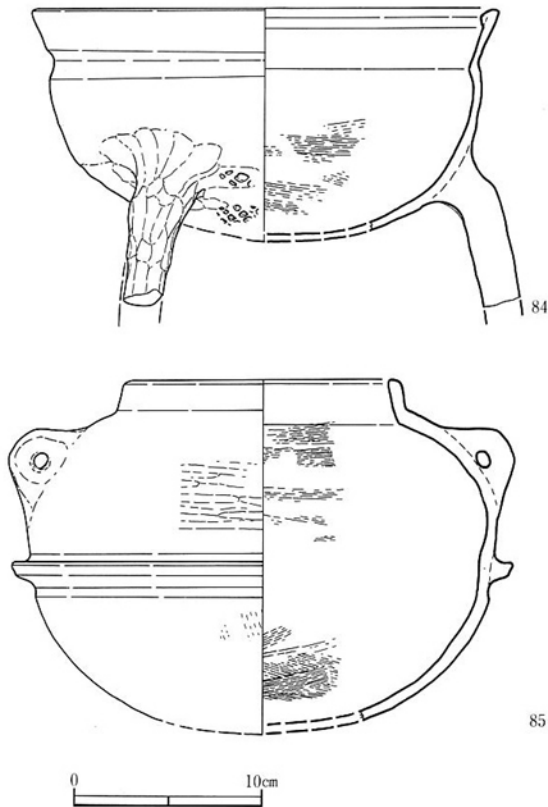
写真42 S K06出土遺物



第52図 S K07実測図



写真43 S K07遺物出土状況（南から）



第53図 S K07出土遺物実測図

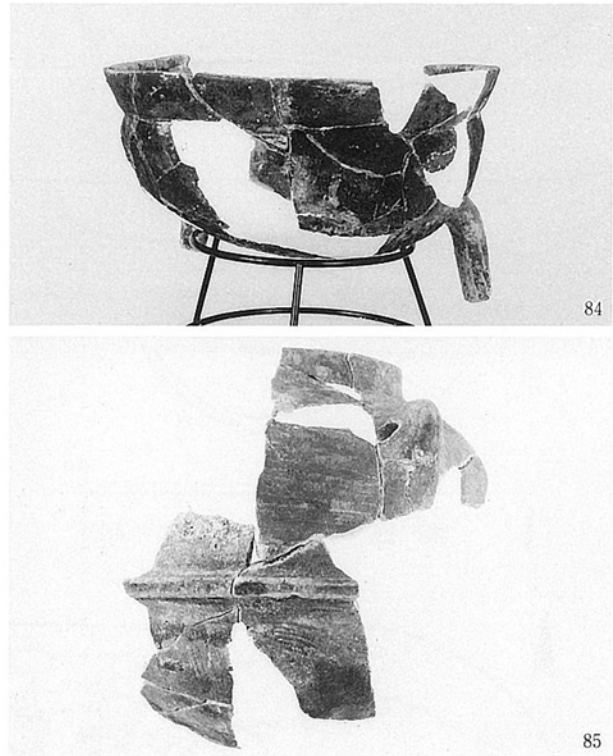


写真44 S K07出土遺物

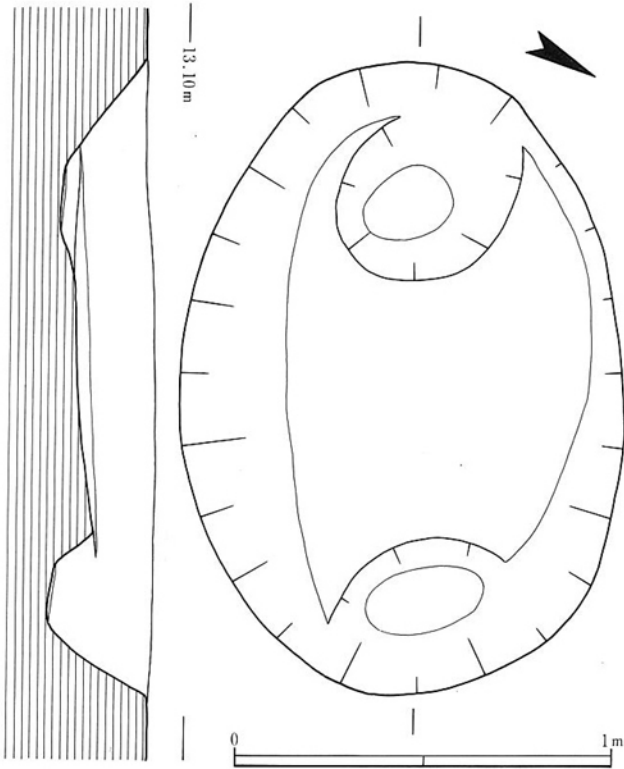
S K07

S K07は、2地区の北部に位置する。平面形は280cm×100cmの長円形の土坑で、深さは25cmである。埋土は単一で、遺物から16世紀の土坑と考えられる。

84は瓦質土器足鍋である。体部内面はハケ、口縁部内外面はナデ、体部外面は粗いナデによって調整する。底部外面には格子状叩き目が残る。85は瓦質土器茶釜であり、図上復元した。胎土は粗砂粒を含まない精良なものである。焼成はやや軟質。内面は全体的にハケによって調整し、外面上半にはミガキを施す。耳および鏝は、貼付けである。

S K08

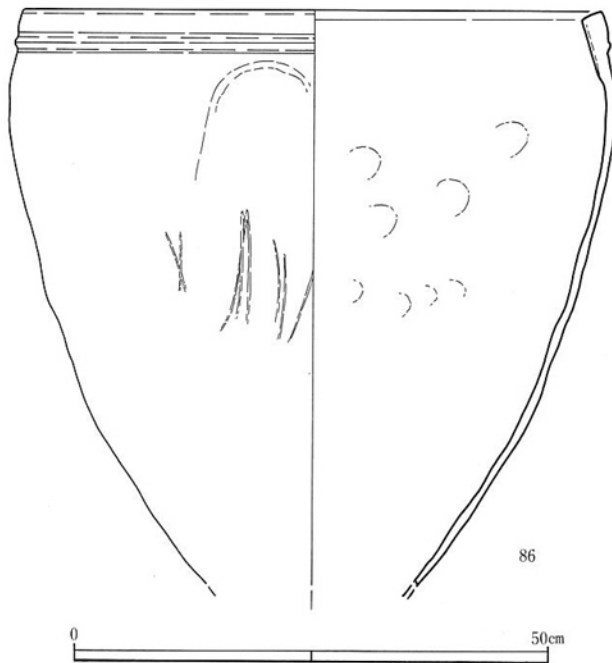
S K08は2地区の北東部に位置する。平面形が170cm×120cmの長円形、深さ20cm、その両端にさらに30cmと25cmの2つの掘り込みをもつ土坑である。埋土には大甕の破片が多数含まれており埋甕遺構であった可能性もある。甕(86)は口径60cm、器高65cm程度の大きさと考えられ、内面に叩きにとまなう当具の痕、外面に縦方向の暗文が見られる。(向上)



第54図 S K08実測図



写真45 S K08完掘 (東から)



第55図 S K08出土遺物実測図



写真46 S K08出土遺物

S K10

3地区西部の山裾に位置する浅い土坑である。当初は遺物包含層中の土器堆積と考えられたが、その場に置いた状況の個体が複数存在することなどから、遺構として扱った。土坑掘形は長径134cm、短径117cm、深さは最大18cmであるが、土器の広がりはこの土坑の範囲を超えている。土坑東方は南北に走る小溝（S D10）によって一部を攪乱される。

本遺構を特徴付けるのは、16個体を超える足鍋の出土である。これら足鍋の中には伏せた状態のも

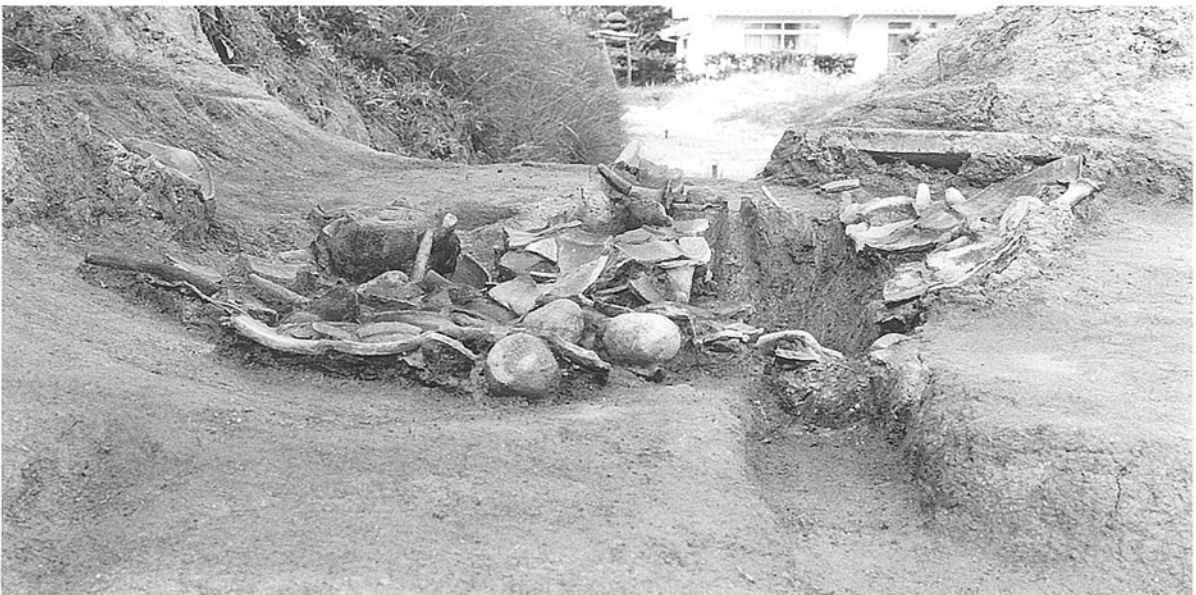


写真47 S K10遺物出土状況（南から）



95 出土状況

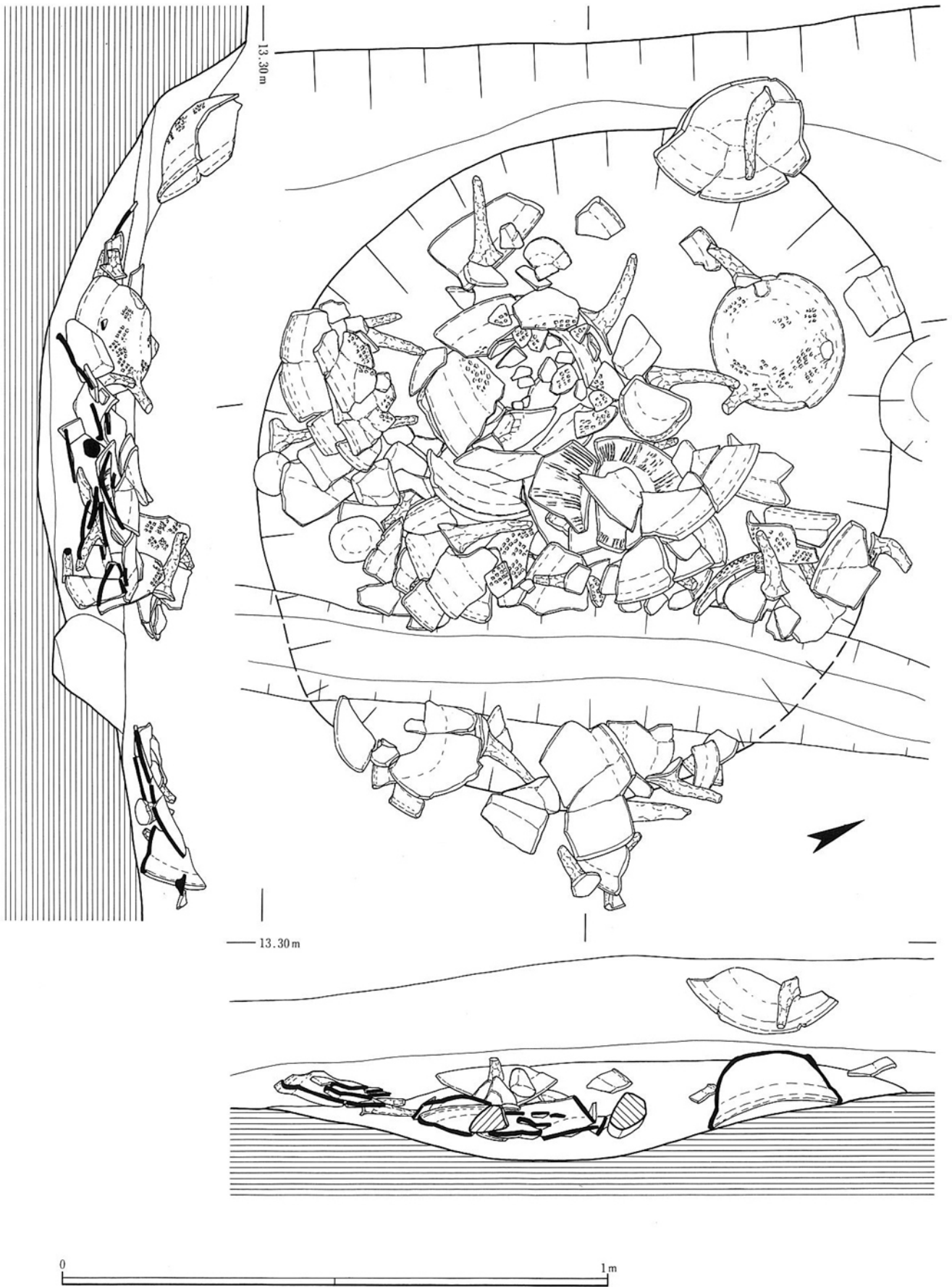


94 出土状況



104 出土状況

写真48 S K10遺物出土状況 (数字は遺物番号)



第56図 SK10実測図

の、横倒しの状態のものなどがあり、土坑中央部分では重層的に集積される（写真47・48、第56図）。摺鉢は土坑のほぼ中央、集積した足鍋の上位にのせられたような状態で出土した。土器の出土位置については第57図に示した。なお、90・91・93は遊離した状態で土坑埋土中および溝による攪乱部分から出土した。

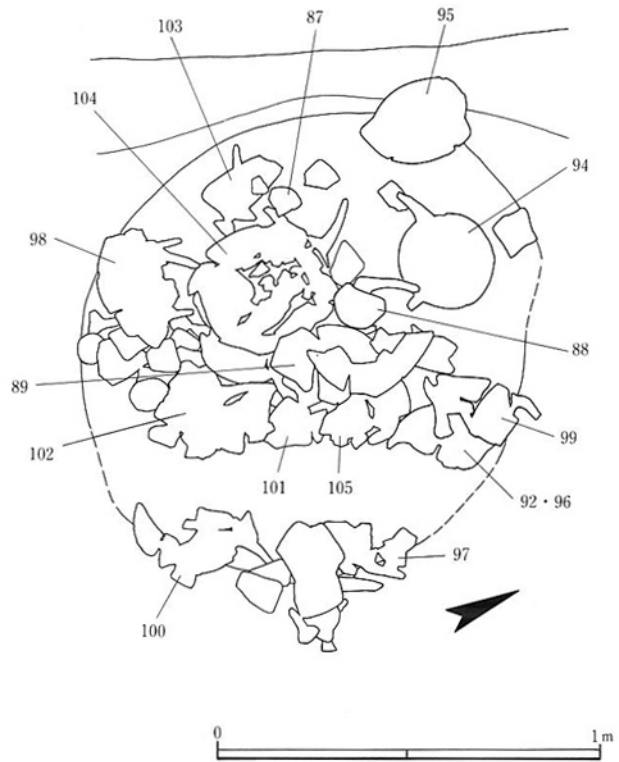
出土遺物は土師器杯1、瓦質土器足鍋16以上・摺鉢1・香炉1、砥石2である（第58・59図、写真49・50）。砥石については、破片となっているため、図示しなかった。足鍋については図示したもの以外にも、復元できないものの、数個体分の破片が確認できる。

87は土師器杯である。灰白色を呈し、薄手（器壁は最大3mm程度）である。88は短い三足をもつ瓦質土器香炉である。比較的硬質で、外面へラ磨き、内面ハケ調整の痕跡が明瞭に残る。89はやや軟質の瓦質土器摺鉢である。櫛目は9本を単位としており、見込には櫛目による「メ」

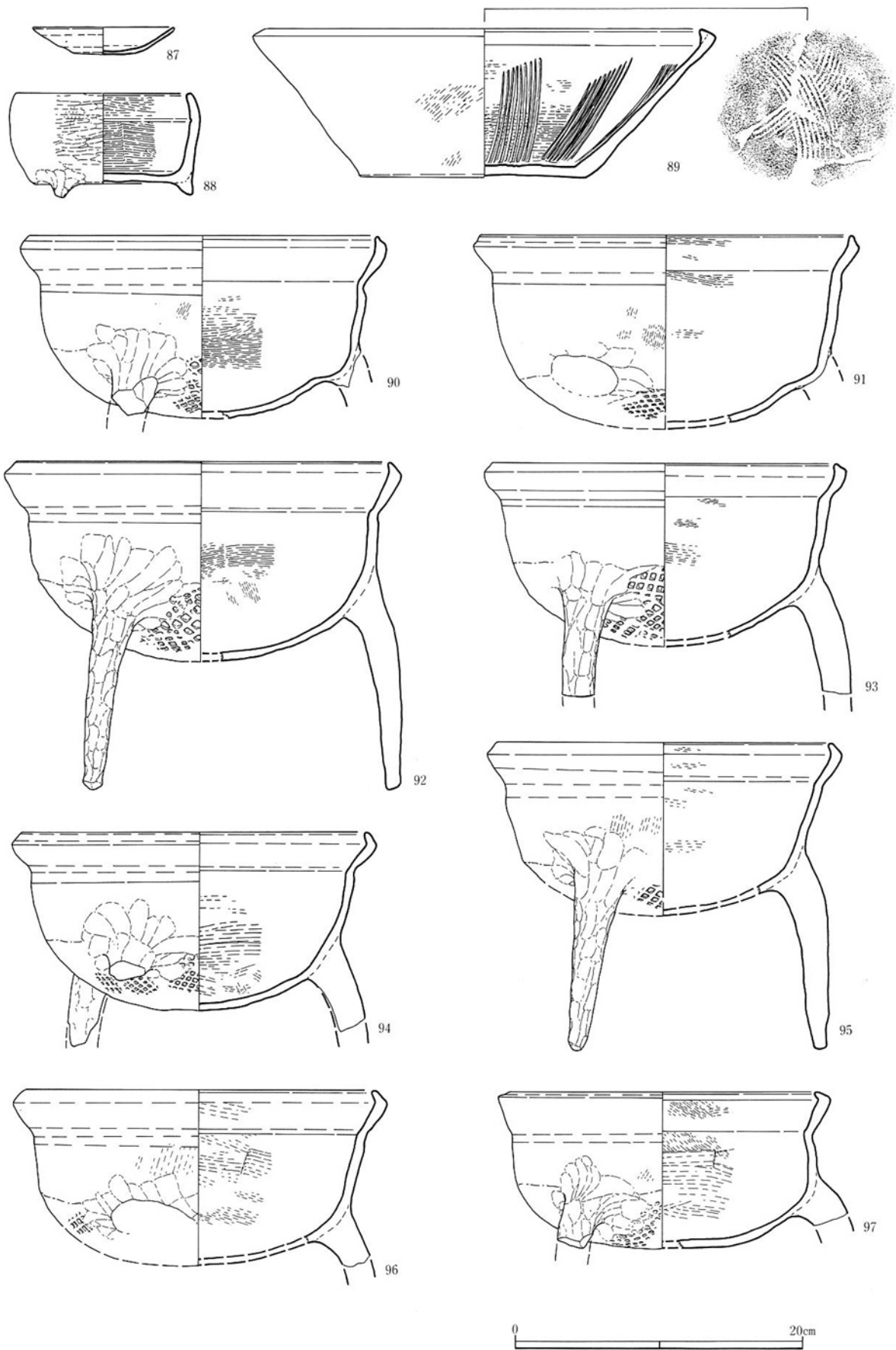
字状の卸目を施す。内面の体部下位から底部にかけては、使用に伴う摩耗がみられる。90～105は瓦質土器足鍋である。灰色・黒褐色ないし暗灰黄色を呈し、97・99・102が硬質であるほかは、いずれも軟質である。96については内面の炭素吸着が不完全であり、105は器表の磨滅が著しい。製作技法はほぼ共通しており、底部の叩き締め、体部外面の粗い縦方向のハケ、体部内面の細かい横方向のハケ、指頭圧痕および掌痕をそのまま残す脚部などが特徴である。叩き締めには格子状の溝を刻んだ叩き板が使用され、底部外面の叩き痕跡は消さない。叩きの当て具については、底部内面にその痕跡をとどめるものがまったく存在しないため知り得ない。

これらの足鍋には小型のもの（105）・大型のもの（103・104）を含んでおり、口縁部の形状に着目すれば、端部の屈曲が緩やかなもの（90～93）、端部の屈曲が明瞭なもの（94～102）、端部を屈曲させず平坦におさめるもの（103・104）、平坦化した端部を外方に拡張したもの（105）などに分類できる。脚部についてはいずれも緩やかに湾曲した棒状であり、端部を獣足状に屈曲させる例はみられない。体部外面を観察した結果、大半の個体には煤が付着しており、実際に使用されたものであることが明らかである。

（岩崎）



第57図 SK10遺物出土ポイント図



第58図 S K10出土遺物実測図(1)

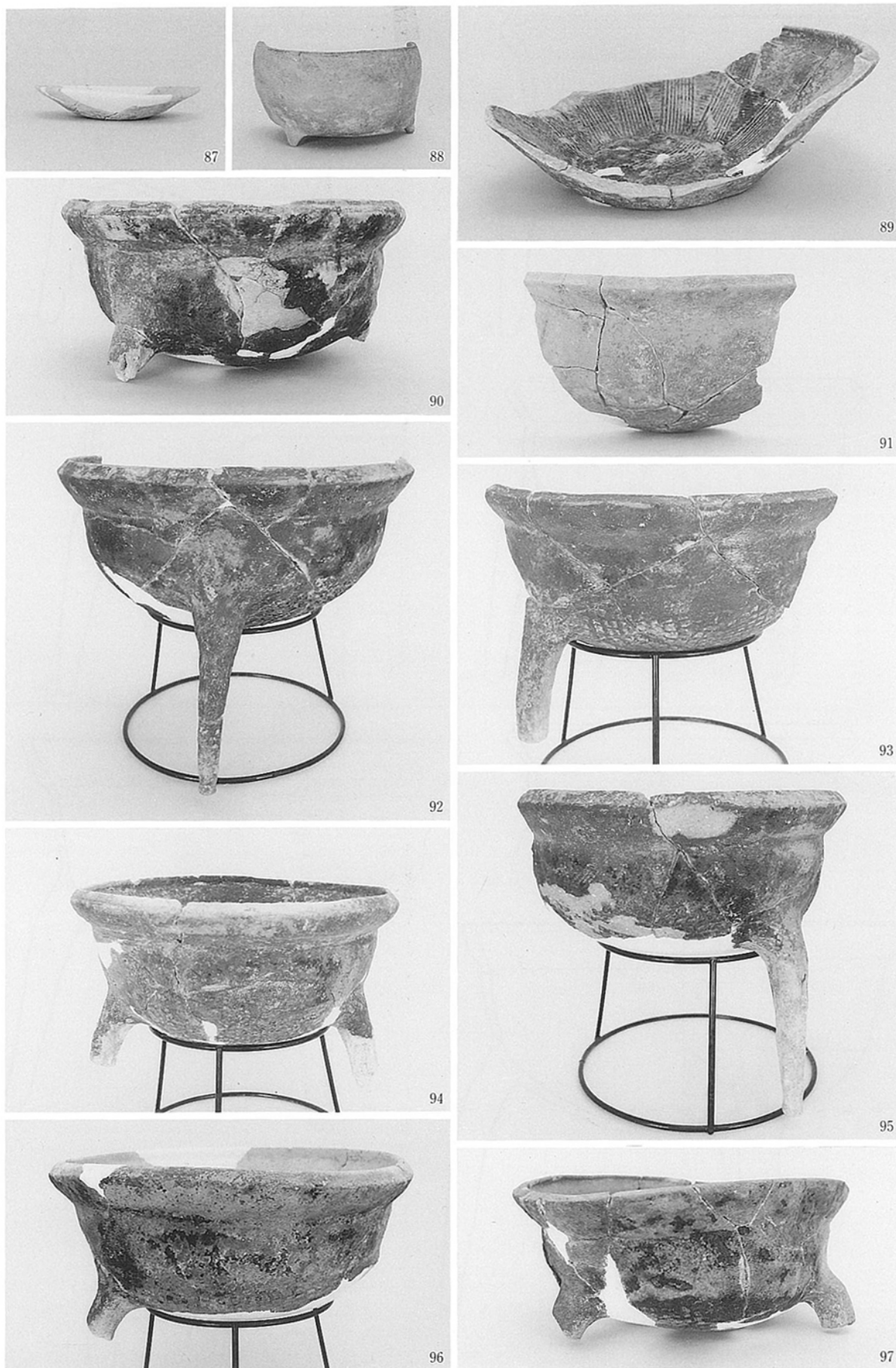
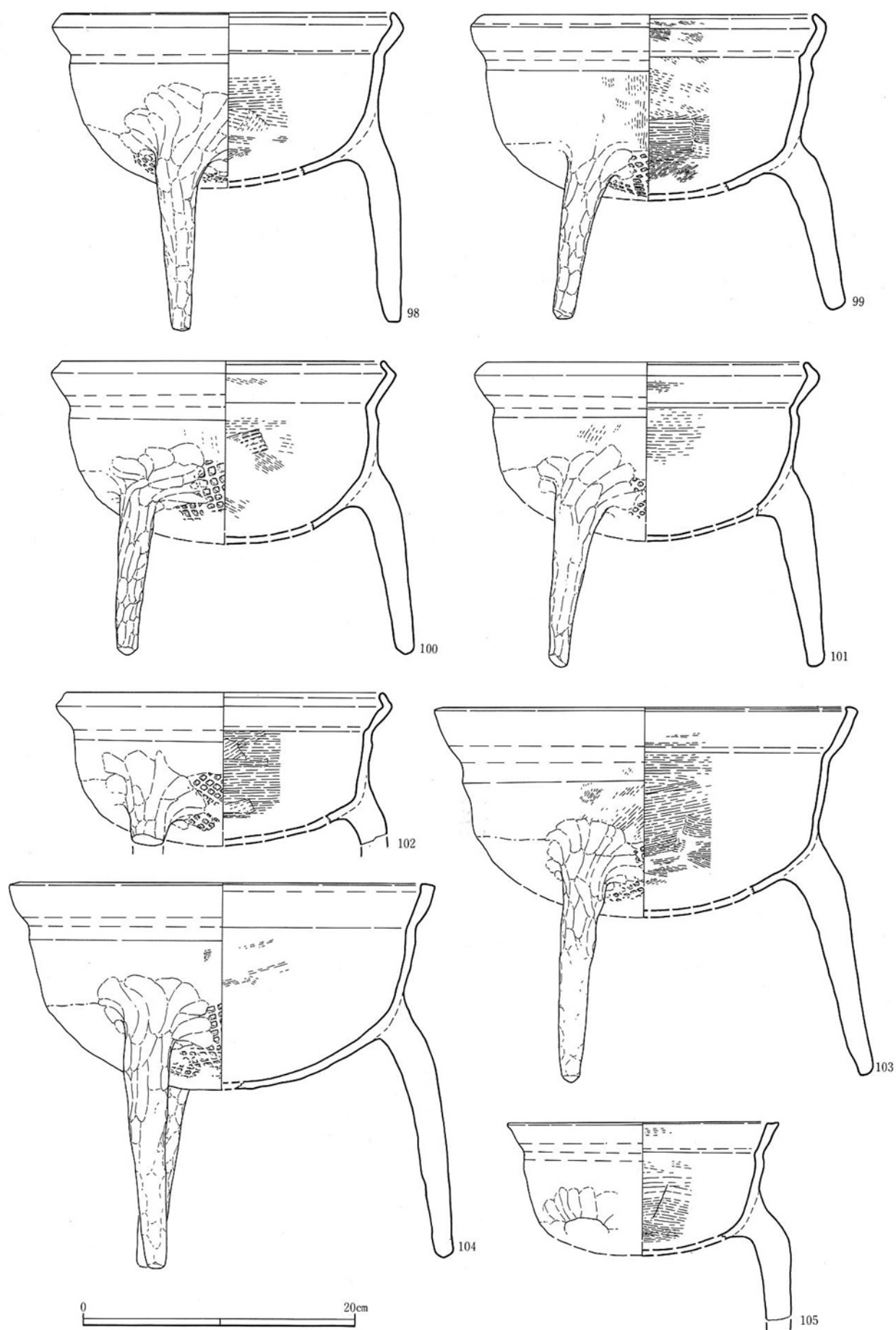


写真49 SK10出土遺物(1)



第59图 SK10出土遗物实测图(2)



98



99



100



101



102



104



103



105

写真50 SK10出土遺物(2)

SK11

SK11は3地区の南西部に位置する。145cm×126cmの不整形形で、深さ26cm。SD13に切られる。埋土は黒褐色層と黄褐色層の2層で、長径12cm~55cmの石が検出されたが遺物は出土しなかった。

SK12

SK12は、3地区の南部ほぼ中央に位置する。平面形が200cm×190cmのほぼ円形の土坑で、深さは65cmである。SK13~16と、規模や土層が似通っている。

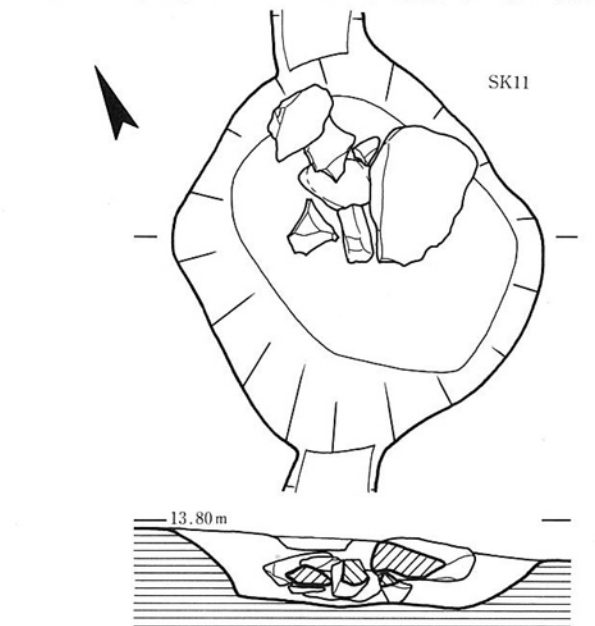


写真51 SK11土層断面図（南から）



写真52 SK11完掘（南から）

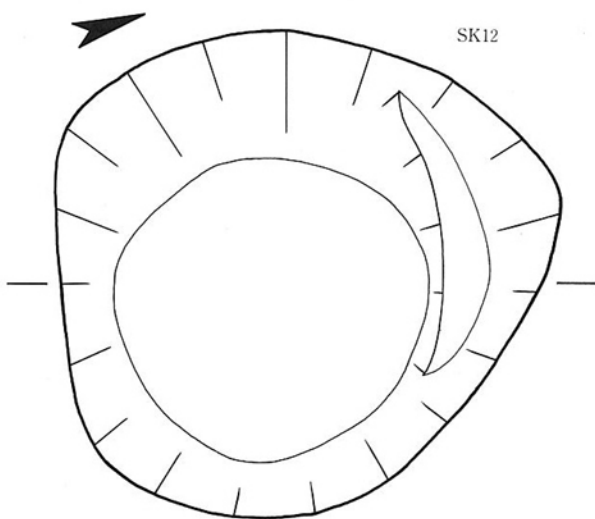
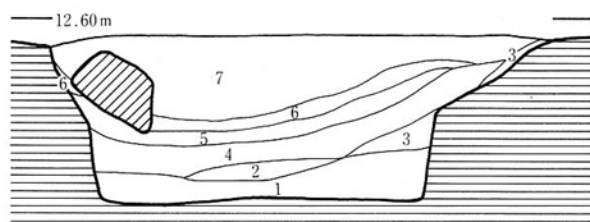


写真53 SK12土層断面図（東から）



- SK12土層凡例
- | | |
|----------------|--------------|
| 1. 濃い黄橙褐色粘質砂質土 | 5. 黄橙褐色粘質砂質土 |
| 2. 灰黄色粘質砂質土 | 6. 灰褐色砂質土 |
| 3. 濃い黄橙褐色粘質砂質土 | 7. 黄灰色粘質砂質土 |
| 4. 濃い黄橙褐色砂質土 | |

第60図 SK11・12実測図



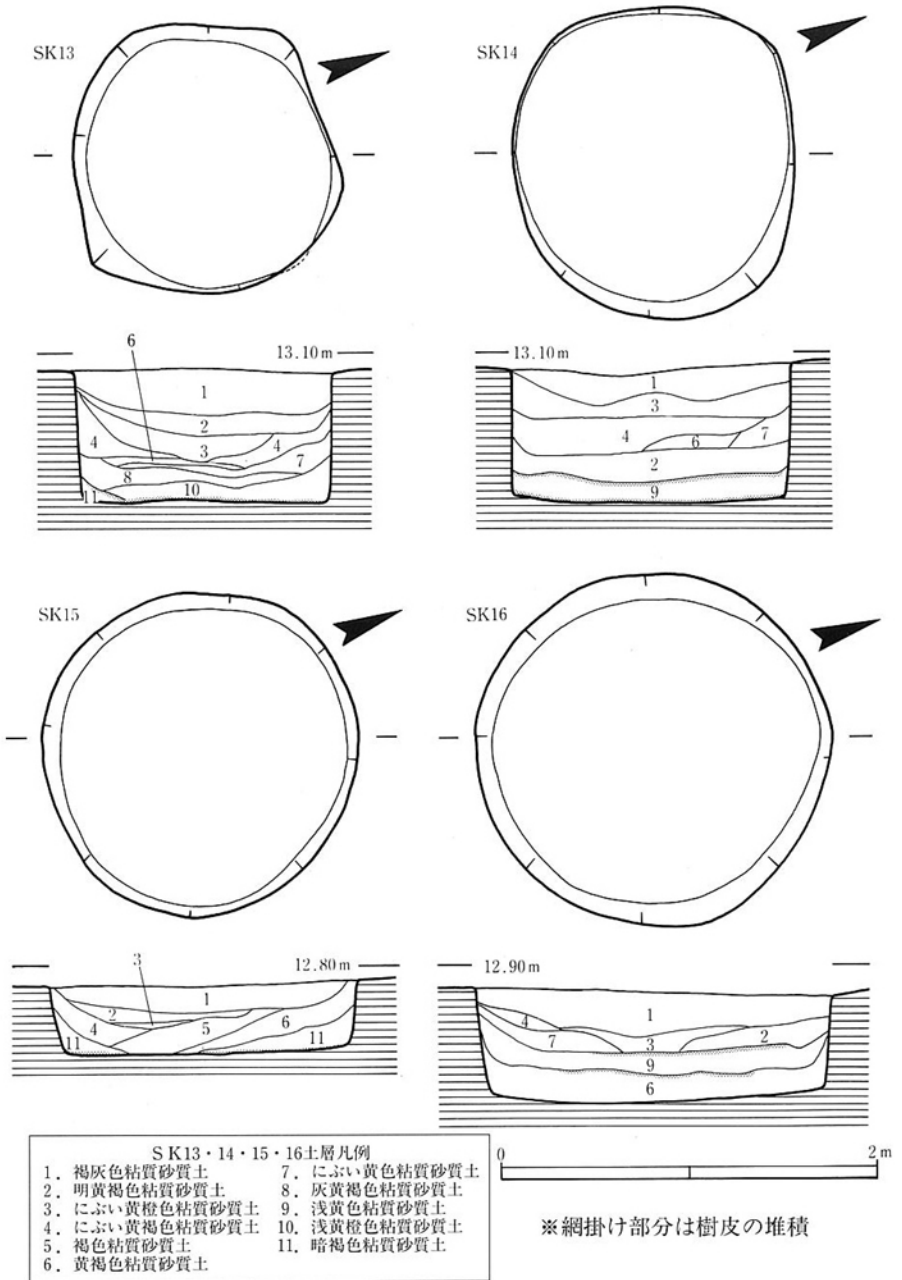
写真54 SK12完掘（南から）

SK13・14・15・16

SK13~16は、3地区の南部ほぼ中央の緩傾斜面上に位置する。各土坑の中心間を結んだ線が、1辺6.5mの正方形を成すように配置される。

いずれの土坑もほぼ円形で、最大径はSK13が145cm、SK14が165cm、SK15が171cm、SK16が190cm、深さはSK13、SK14が70cm、SK15が35cm、SK16が60cmである。

これら4つの土坑は、規模がほぼ同じであること、概ね垂直に掘り込まれ、底面はほぼ平坦であることから、相互に何らかの関連があるのではないかとと思われるが、建物跡ではない。土器等は出土しなかったが、底面又はその上層に厚さ1~2cmの樹皮の堆積があることから、何らかの貯蔵用施設ではないかと考えられる。



第61図 SK13・14・15・16実測図

(向上)

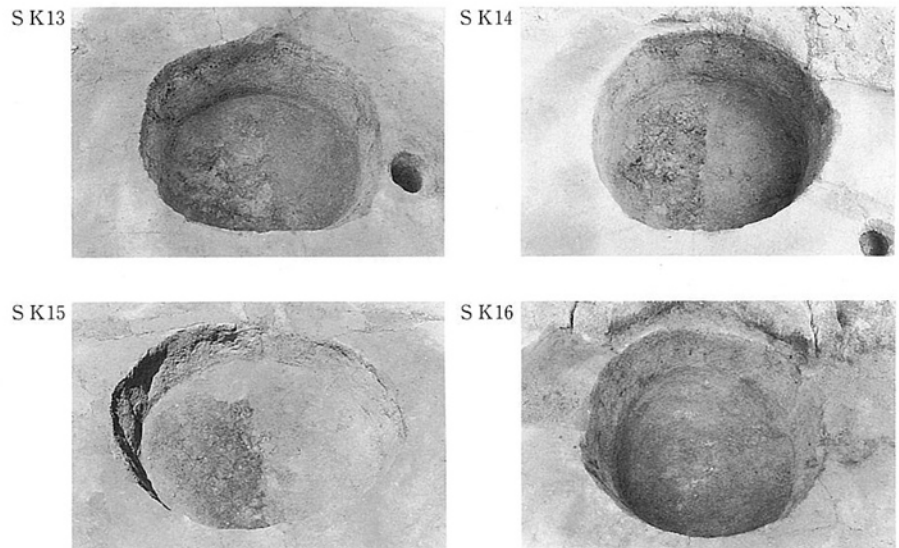


写真55 SK13・14・15・16完掘(南から)

(5) 用途不明遺構と遺物

今回の発掘調査で確認された遺構のうち、用途不明遺構として扱ったものは11基である。その内訳は、埋甕遺構7基（S X01～07）、火鉢を納めた土坑1基（S X08）、長径が3 mにおよぶ浅い土坑2基（S X09・10）、2石が対をなす立石（S X11）である。

このうち埋甕遺構については、埋設されていた甕はいずれも近世の大型品であるが、その質は土師質、瓦質、陶質のものときまざままである。埋甕遺構の用途については、一般に食物や水の貯蔵用、酒や醤油などの醸造用、藍染用、便所などが考えられるが、今回の調査では用途を判別する資料を得ることはできず、建物にともなう遺構であるかどうかも明確ではなかった。ただ、S X01・02・03、S X04・05・06はそれぞれ3基が隣接して埋設されていることから、一連の遺構であることも考えられるが、積極的な根拠は見い出せなかった。

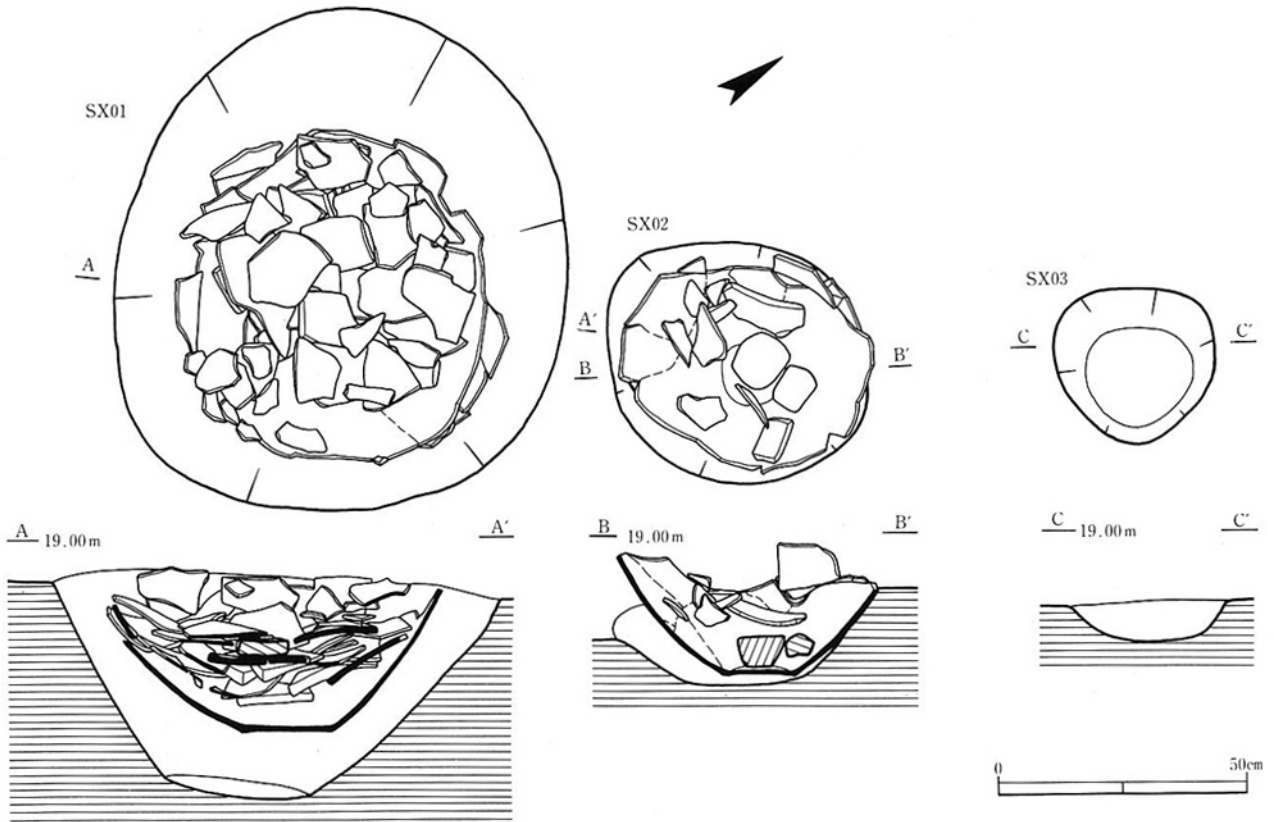
S X09・10については、ほぼ同じ大きさ（平面形300cm×160cm）の2つの土坑が切り合って検出された。周辺の遺構と比べてみても大きな土坑であるため、何らかの機能を持っていたものと考えられるが、深さが10cm程度と浅く遺構にともなう遺物も確認できなかったため、時期や用途を明確にすることができなかったので、ここだけでの紹介にとどめる。



写真56 中世火鉢出土状況（S X08）

S X 01・02・03

1地区の中央部北よりに、掘形の中心をほぼ等距離にして一直線上に並んで3基の埋甕遺構が検出された。最も残存度の高いS X 01は平面形が直径1 mの円形、深さ95cmの掘形をもち、反対にS X 03は削平が著しくわずかに掘形が確認できる程度であった。3基が一連の遺構である可能性も考えられるが、掘形や甕の底部のレベル、甕の器形に若干の違いが見られるため否定的要素ももつ。



第62図 S X 01・02・03実測図

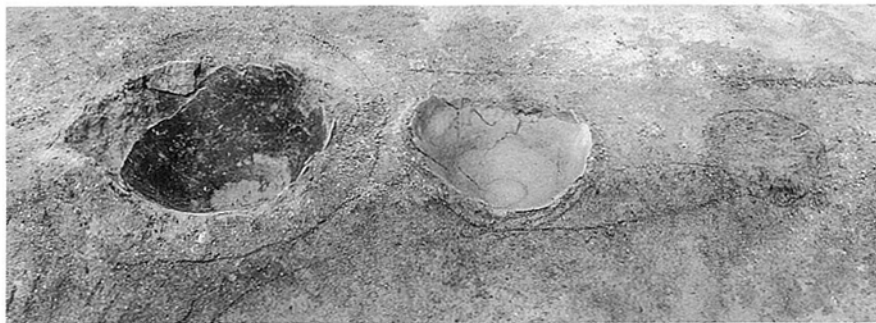


写真57 S X 01・02・03遺物出土状況（東から）

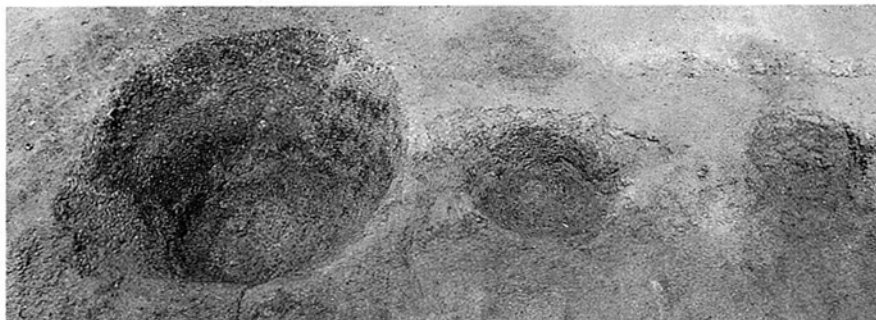
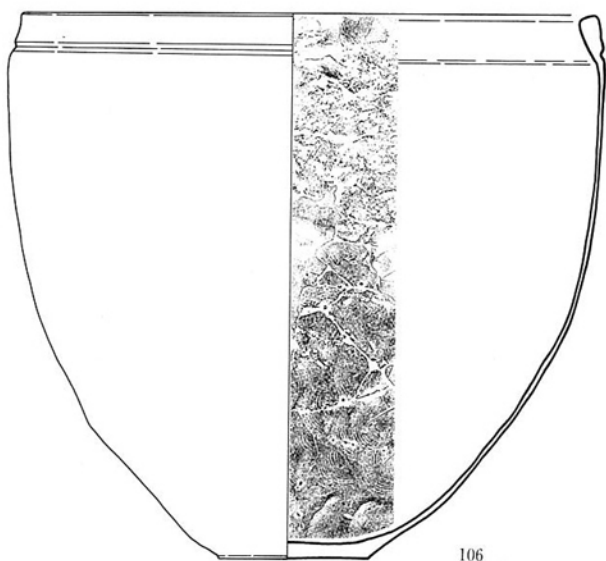


写真58 S X 01・02・03完掘（東から）

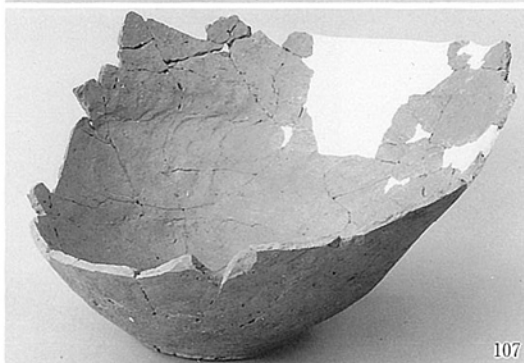
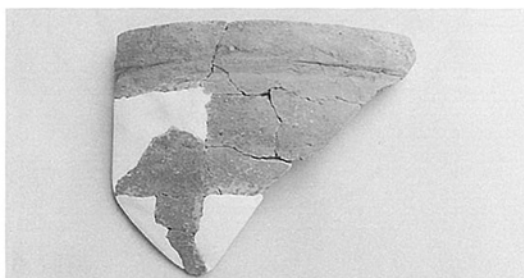
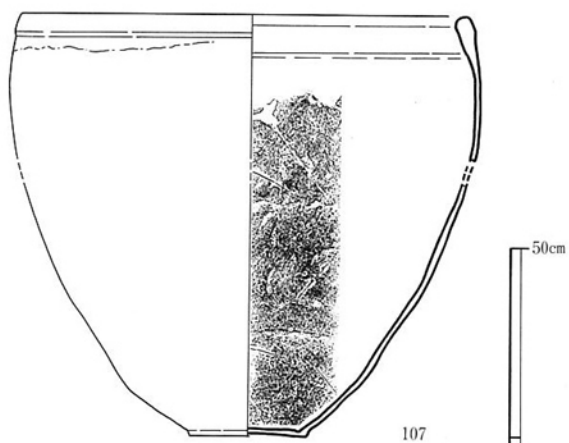
第63図はS X01・02・03から出土した甕である。106は、残存度が高くほぼ完全な形に復元することができた。口径76cm、底径20cm、器高72cmの大きさを持ち、内面に叩きにとまなう当具の痕がはっきりと残っている。107は、底部と口縁の一部が復元できたため、図上復元により口径60cm、底径16cm、器高55cm程度の大きさと推定できる。108は、削平が著しく遺構内からは元位置を保つ土器は検出できなかったが、採集された甕片も含めS X03に埋設されていた甕の底部を復元することができた。S X01の甕と同程度の大きさの底径をもつ。いずれも瓦質の甕で用途は不明。

S X01



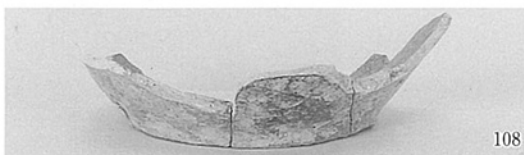
S X01

S X02



S X02

S X03



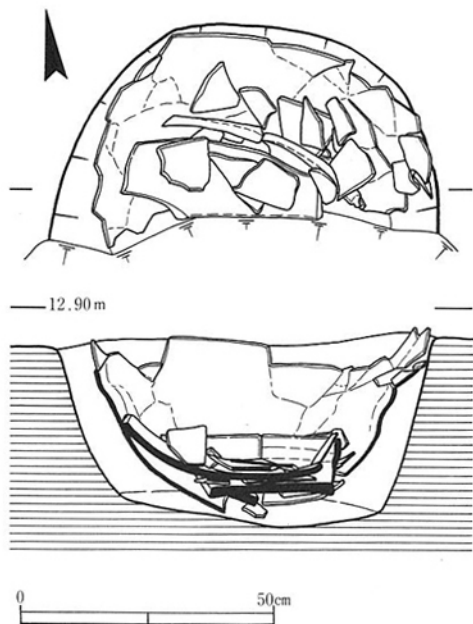
S X03

第63図 S X01・02・03出土遺物実測図

写真59 S X01・02・03出土遺物

S X04

2地区の中央部南よりに隣接して出土した3基の埋甕遺構のうちの1基である。後に甕を撤去しないままS K05が掘り込まれたらしく、掘形、甕ともちょうど半分がS K05に切られたままの状態で見出された。掘形の平面形は推定直径75cmの円形、深さ40cm。埋設されていた甕(109)は陶質で外面に自然釉がかかっており、内面には叩きにもなう当具の痕が残っている。図上復元から口径70cm、底径19cm、器高65cm程度の大きさのものと考えられる。



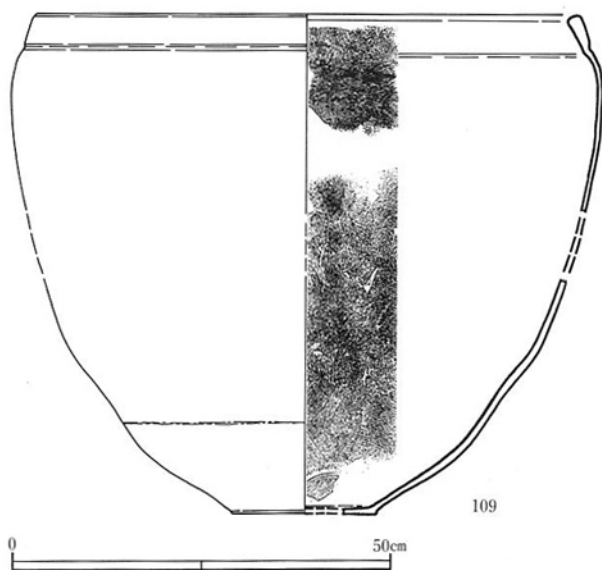
第64図 S X04実測図



写真60 S X04遺物出土状況(南から)



写真61 S X04完掘(南から)



第65図 S X04出土遺物実測図



写真62 S X04出土遺物

S X 05

検出された7基の埋甕遺構を比較した時に、最も異質なのがS X 05である。平面形が直径70cmの円形、深さ30cmの掘形は底部が広く平らな円筒形で、埋設されていた陶質の甕(110)も底部を残して撤去されていたが、底径が45cmと他の甕に比べて底径が広がっている。さらに甕の底部外面にはかなりの煤が付着していることから、埋甕遺構として扱ったが、陶器の風呂釜の破片が投棄された可能性も考えられる。

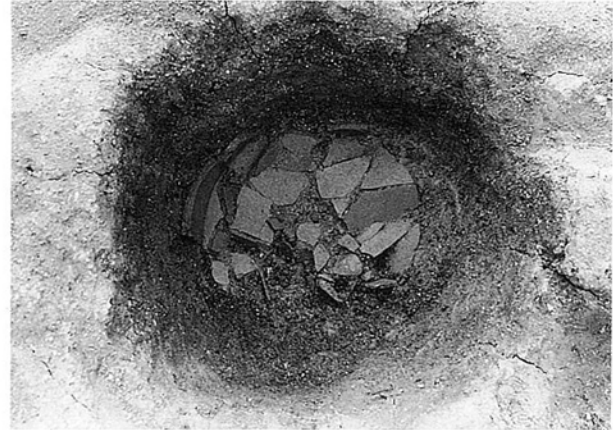
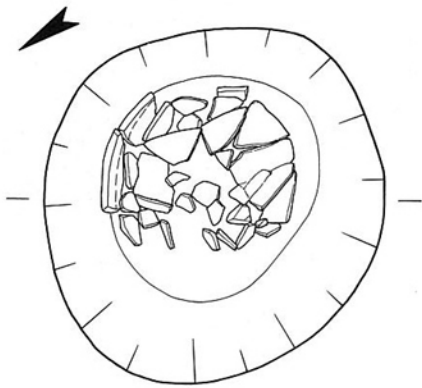


写真63 S X 05遺物出土状況(西から)

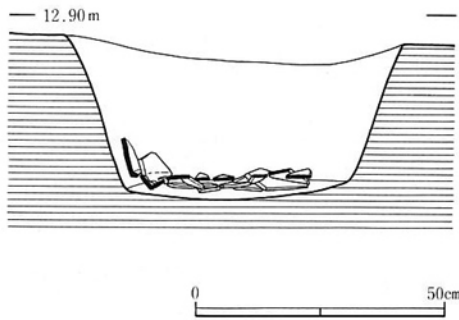
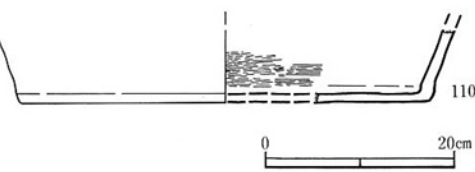
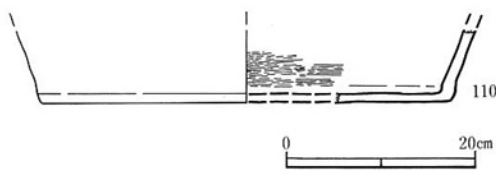


写真64 S X 05完掘(西から)



第66図 S X 05実測図



第67図 S X 05出土遺物実測図

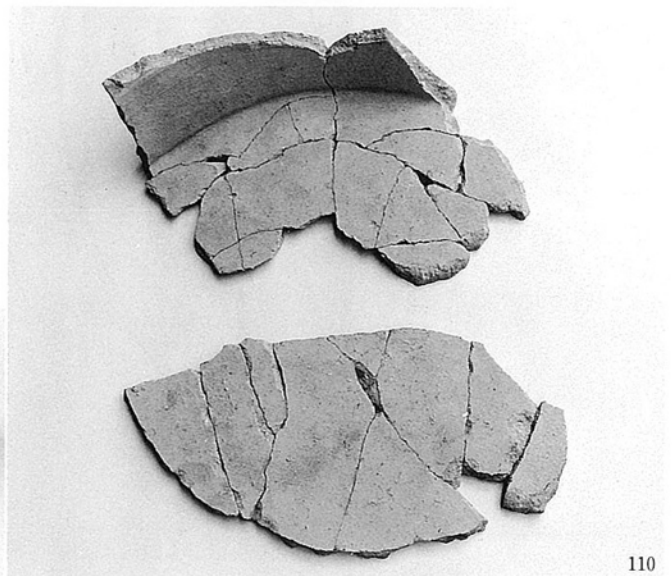
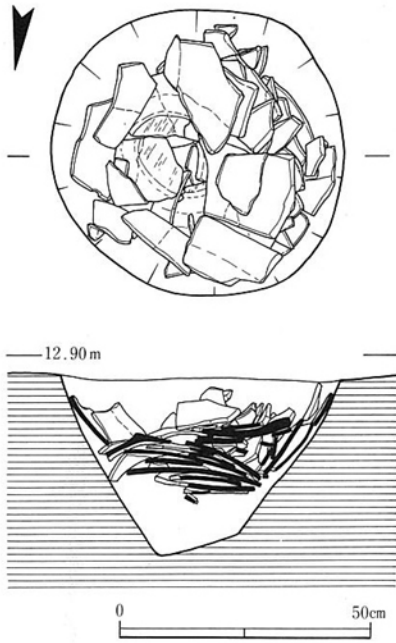


写真65 S X 05出土遺物

S X 06

平面形が直径60cmの円形、深さ40cmの掘形に陶質の甕(111)の破片が多数折り重なって検出された。特筆すべきことは、甕の底部の破片が口縁部の破片より上層部から逆向きに検出されたことで、後に著しい攪乱を受けたか、もしくは使用されなくなった甕が底部を上にして投棄された可能性も考えられる。復元の結果、甕の大きさは口径80cm、底径19cm、器高75cmと推定される。



第68図 S X 06実測図

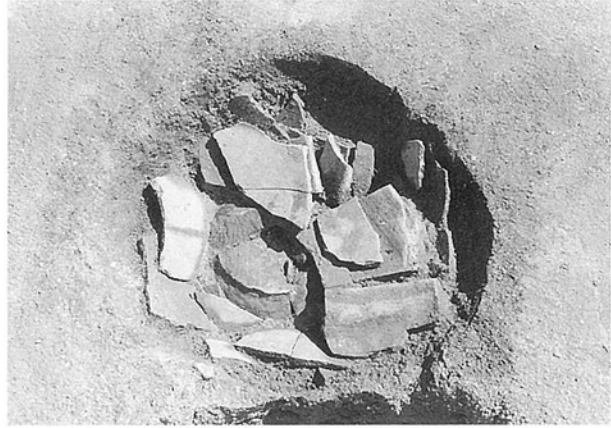


写真66 S X 06遺物出土状況 (北から)

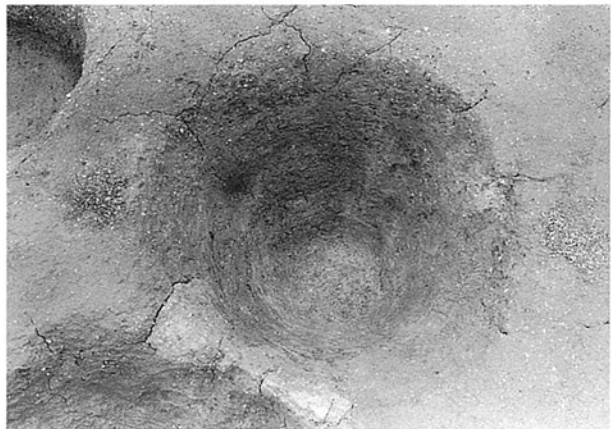
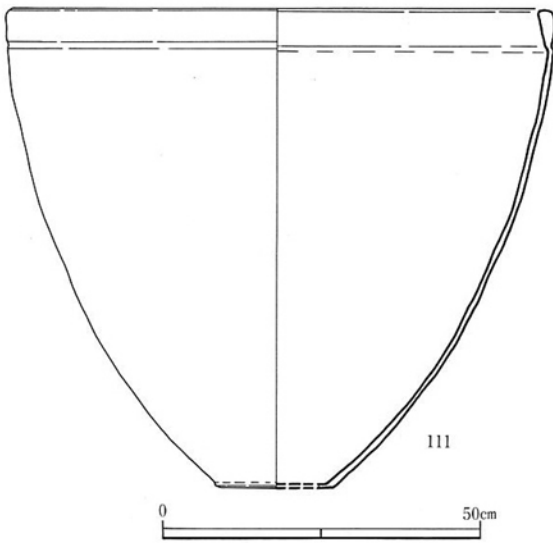


写真67 S X 06完掘 (北から)



第69図 S X 06出土遺物実測図

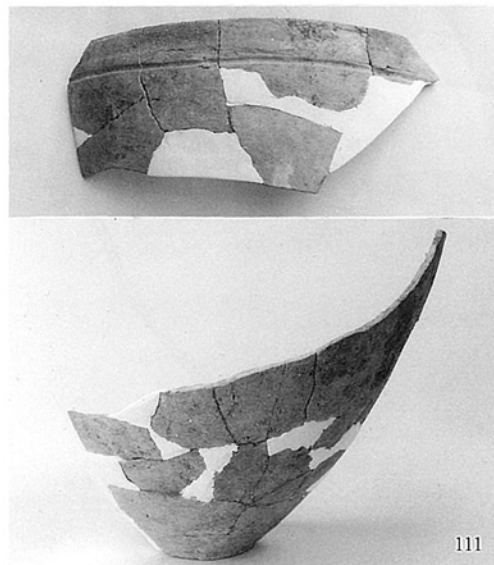


写真68 S X 06出土遺物

S X07

平面形が90cm×80cmの長円形、深さ45cmの掘形から陶質の甕(112)が検出された。ここで注意したいのは、掘形は2段に掘り込まれているが下段は甕の埋設には不必要な穴であること、さらに甕は掘形の浅い上層部に横向きに置かれていた点である。古い土坑の上から甕を埋設するための土坑が掘られたのか、使用されなくなった甕が投棄された可能性も考えられる。甕の内面には叩きの当具の痕やナデの痕が見られる。

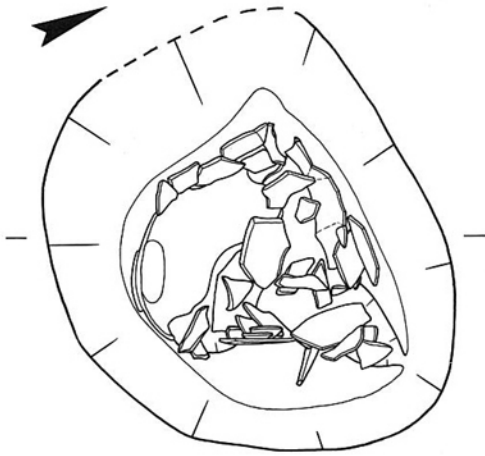
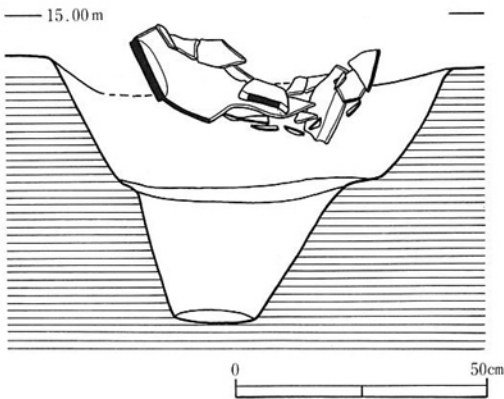
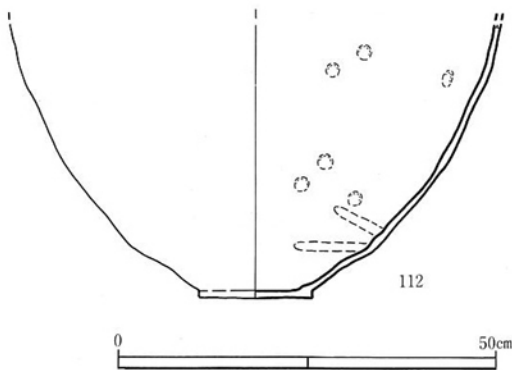


写真69 S X07遺物出土状況 (西から)



第70図 S X07実測図

写真70 S X07完掘 (西から)

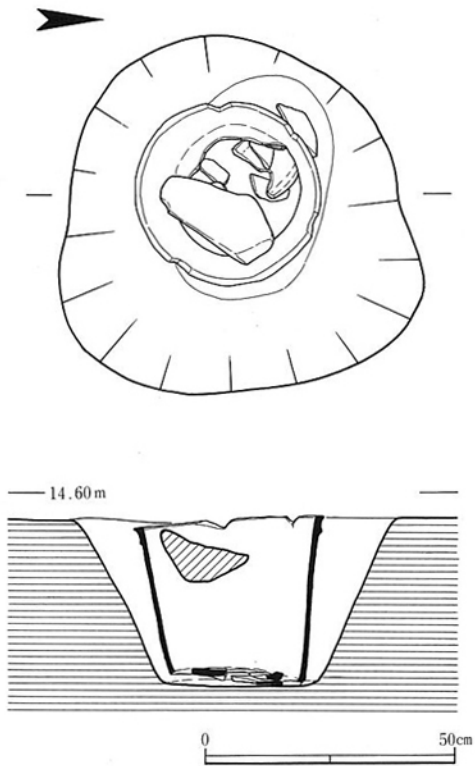


第71図 S X07出土遺物実測図

写真71 S X07出土遺物

S X08

平面形が70cm×65cmの楕円形、深さ30cmの掘形の中に、ほぼ完形の瓦質の火鉢(113)が納められていた。この土坑は明らかにこの火鉢を埋設するために掘られており、このような形で火鉢が出土する例は非常に珍しいといえる。火鉢は口径35cm、底径28cm、器高34cm、上部に2種類の印花がほどこされており、外面にはヘラ磨きの痕が明瞭に残っている。出土時には火鉢の底部は意図的に破壊された状態であり、中に石が置かれているなど、何か特別の目的のために埋設されたものと考えられる。井戸の水溜として利用される例もあるが、水が湧いたような痕は確認できない。



第72図 S X08実測図

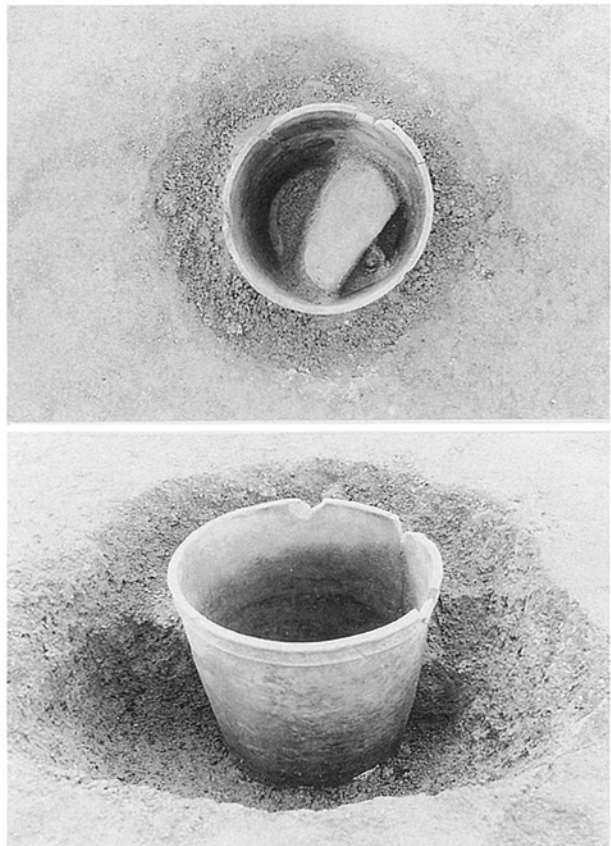
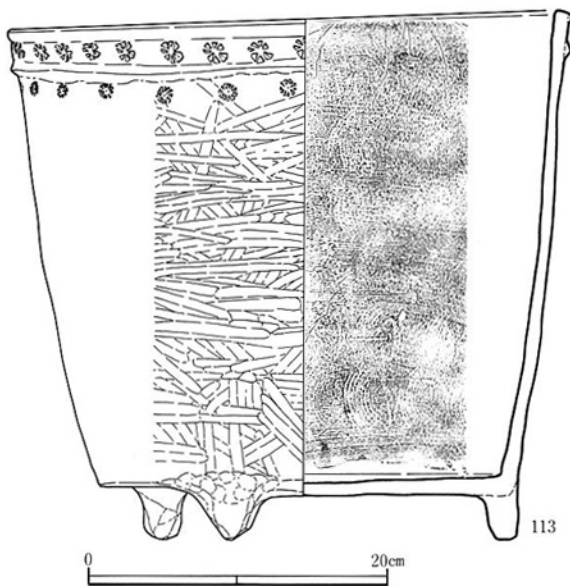


写真72 S X08遺物出土状況(東から)



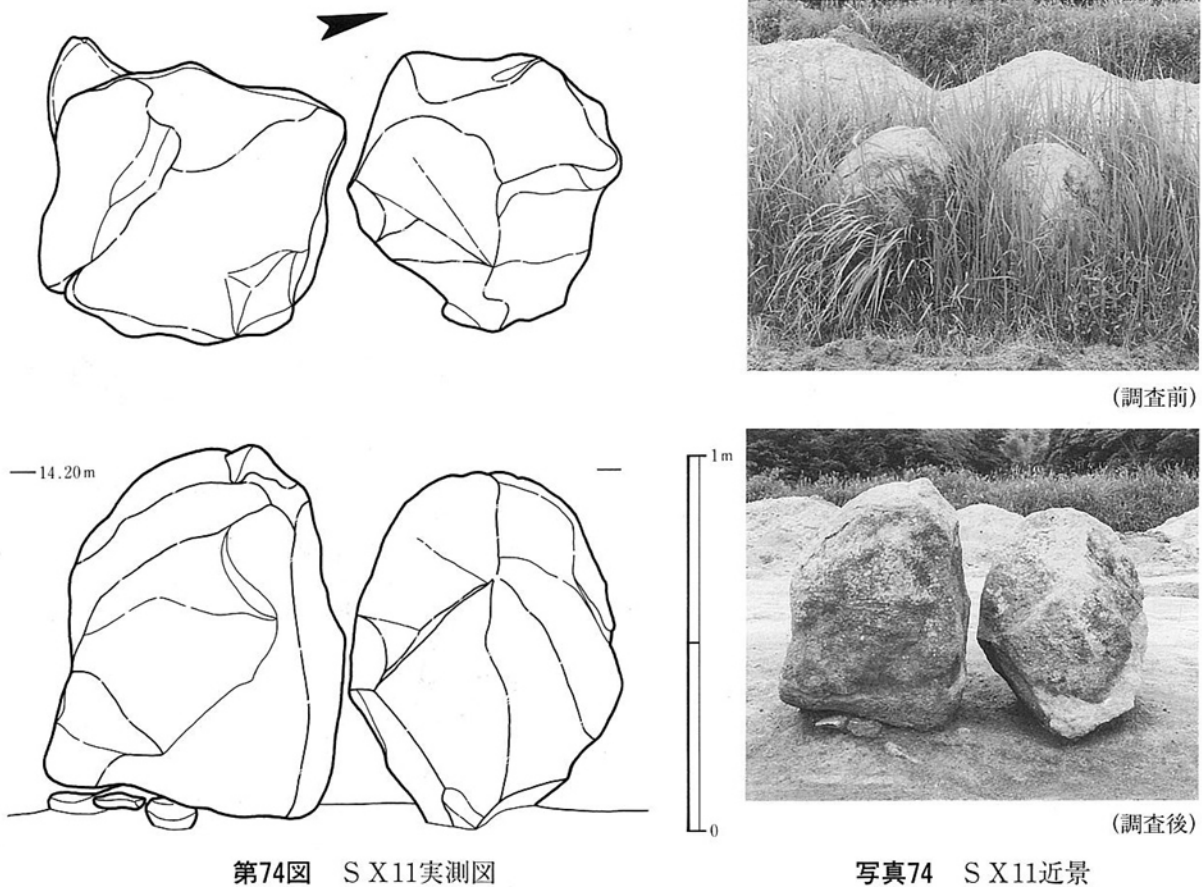
第73図 S X08出土遺物実測図



写真73 S X08出土遺物

S X11

3地区の西側の田の畦上に、高さ約1mの2つの石が寄りそうように対をなして立てられている。昔から「野武士の墓」「石を粗末に扱った者に災いが起きる」などという伝承をもつ石である。調査の結果、この石の下には墓や土坑といった遺構は見つからなかったが、石を安定させるための詰め石がいくつか置かれていることから、意図的に立てられた石であることはまちがいない。すぐ近くには住居群や井戸などがありそれらとの関連も興味を持たれるが、石は現水田の畦畔に据えられており、遺構面を掘って据えられたものではないことから時期を明確にすることはできない。(網本)



第74図 SX11実測図

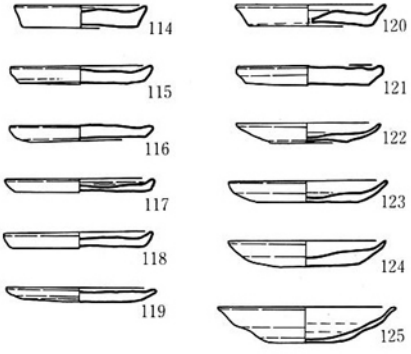
写真74 SX11近景

(6) 柱穴と遺物

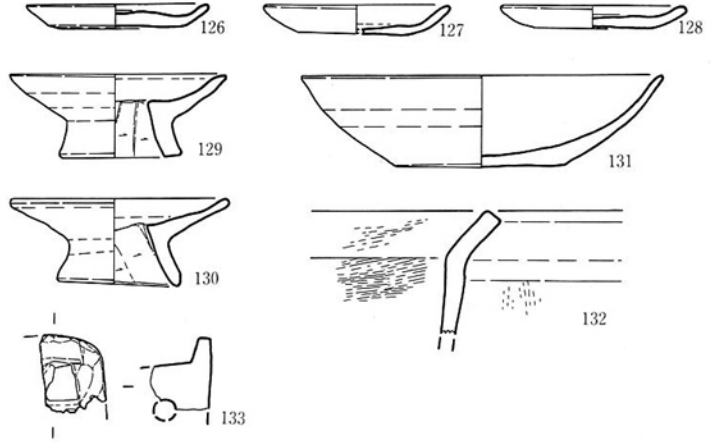
柱穴は全体で約900個が確認されたものの、調査区設定上の制約から大半は建物の復元に寄与しなかった。これら柱穴から出土した遺物のうち、主要なものを第75図に示した。

114~125はSP18出土の土師器である。皿(114~121)と杯の1点(124)は橙色系、他は白色系の色調である。126~133はSP13出土の土師器皿・有孔台付皿・杯・鍋および用途不明の滑石製品である。土器は鍋(132)が褐色である以外は橙色系の色調である。有孔台付皿(129・130)は焼成前に鋭利な工具によって削り取るように穿孔される。134~137はSP12出土の土師器杯・碗および青磁碗である。土師器杯(134)は灰橙色、碗(135・136)は灰褐色である。135は口縁部内面に沈線をもつ。138・139はSP07出土の瓦質土器である。138は足鍋であり、底部外面の格子状の叩き痕をナデによって消す。139は鍋または甕とみられる。140はSP20から、141はSP25から単独で出土した青磁であり、141は14世紀後半の李朝象嵌青磁梅瓶とみられる。(岩崎)

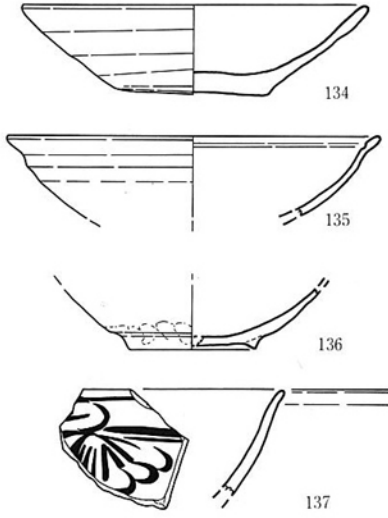
SP18



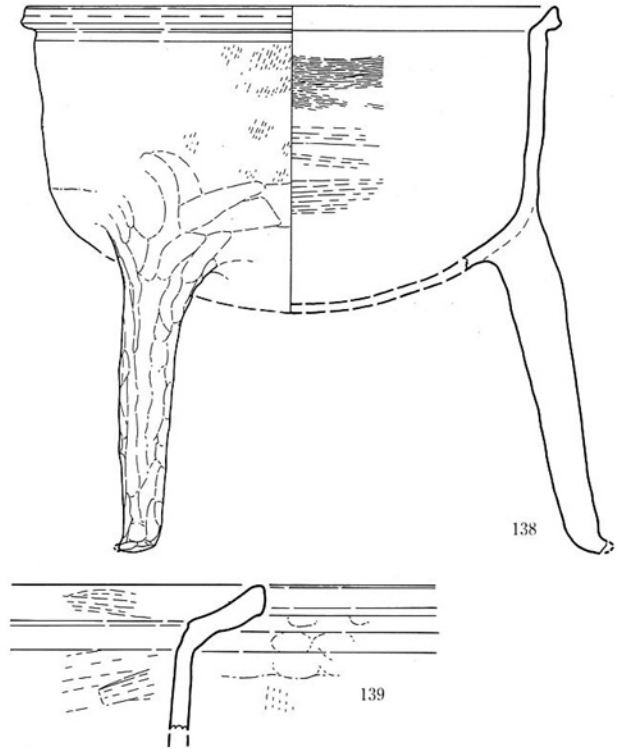
SP13



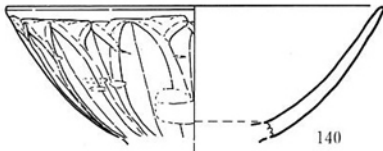
SP12



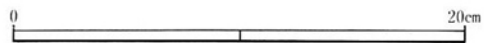
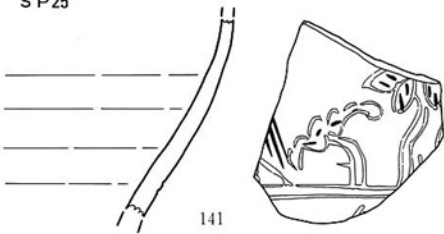
SP07



SP20



SP25



第75图 柱穴出土遗物实测图

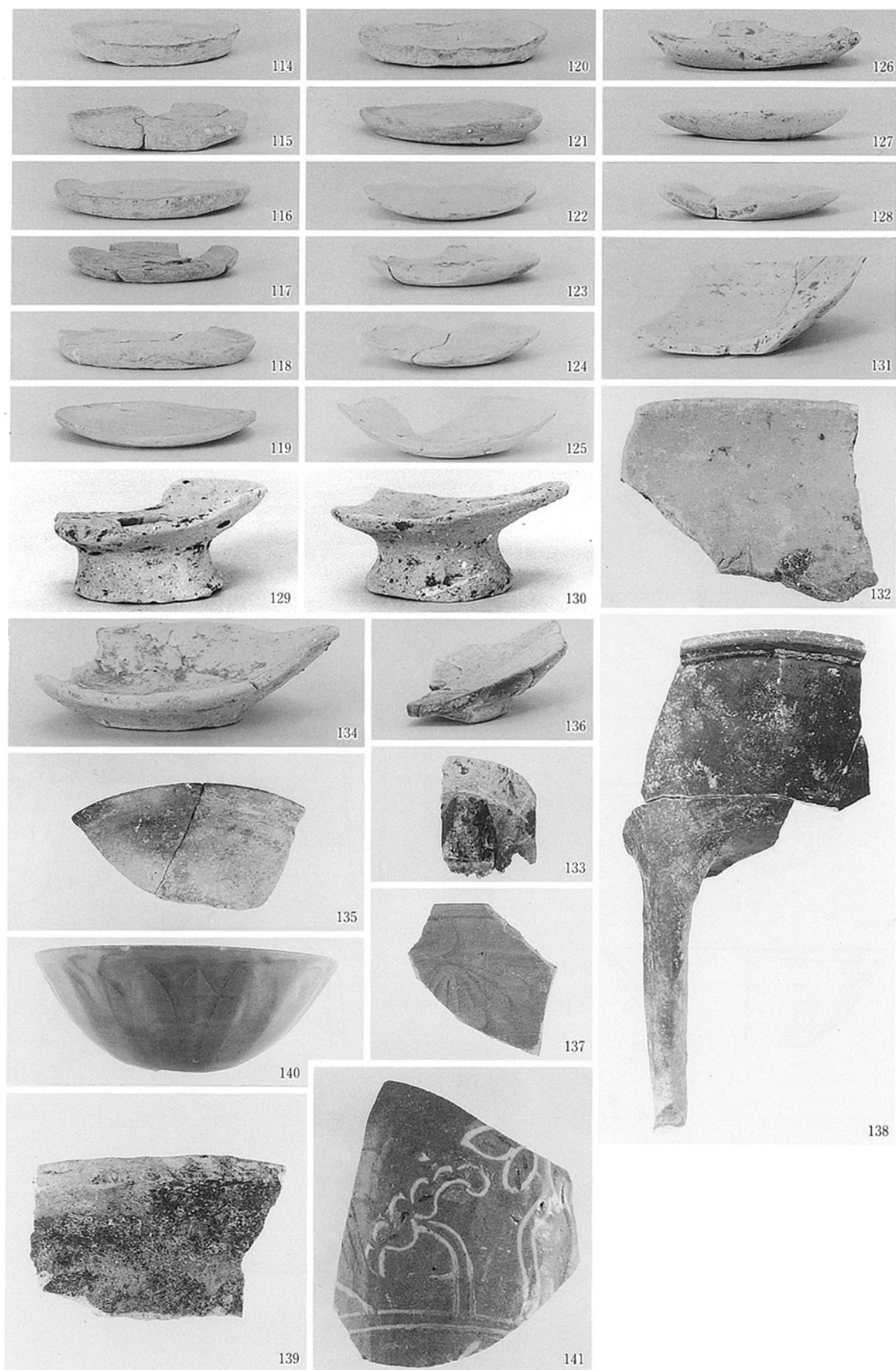
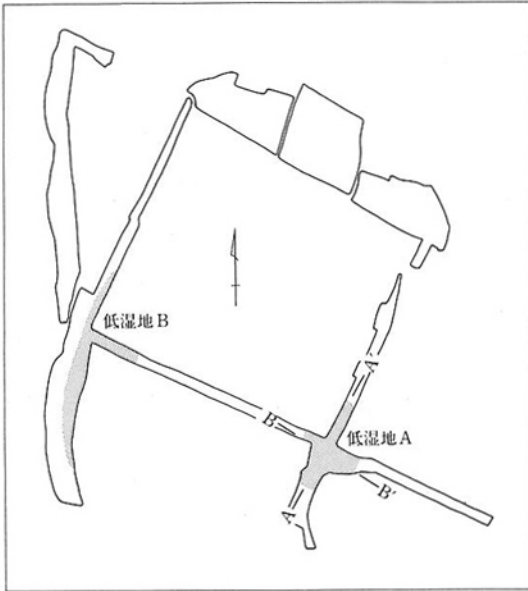


写真75 柱穴出土遺物



第76図 低湿地位置図

(7) 低湿地出土の遺物

2区南東部・南西部および3地区北東部に、中世以前の低湿地と考えられるオリブ黒色粘質土層の広がりが確認された。3地点ともオリブ黒色粘質土堆積以前・堆積後の遺構は存在せず、居住地として利用されなかったことを示している。堆積土が粘性の高い土質であり、出土する土器片も磨滅が少ないことから、水流のほとんどない沼のような環境であったと推定される。

低湿地A 南北約30m、東西約10mの広がりをもちオリブ黒色粘質土の堆積が確認された。ト

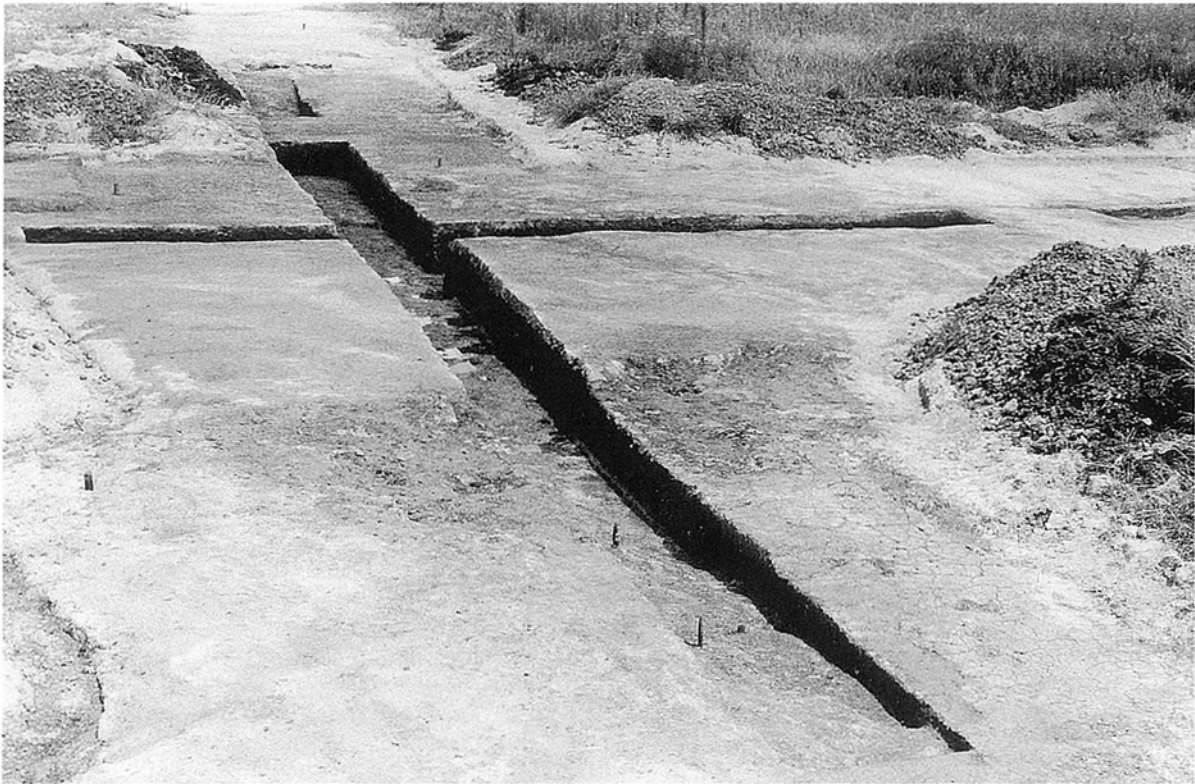
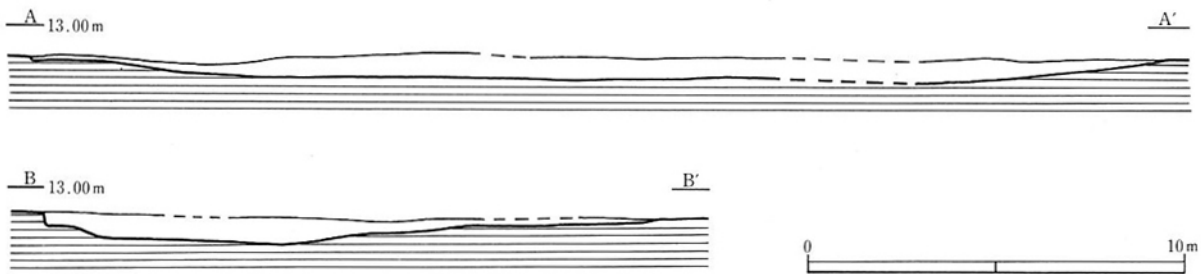
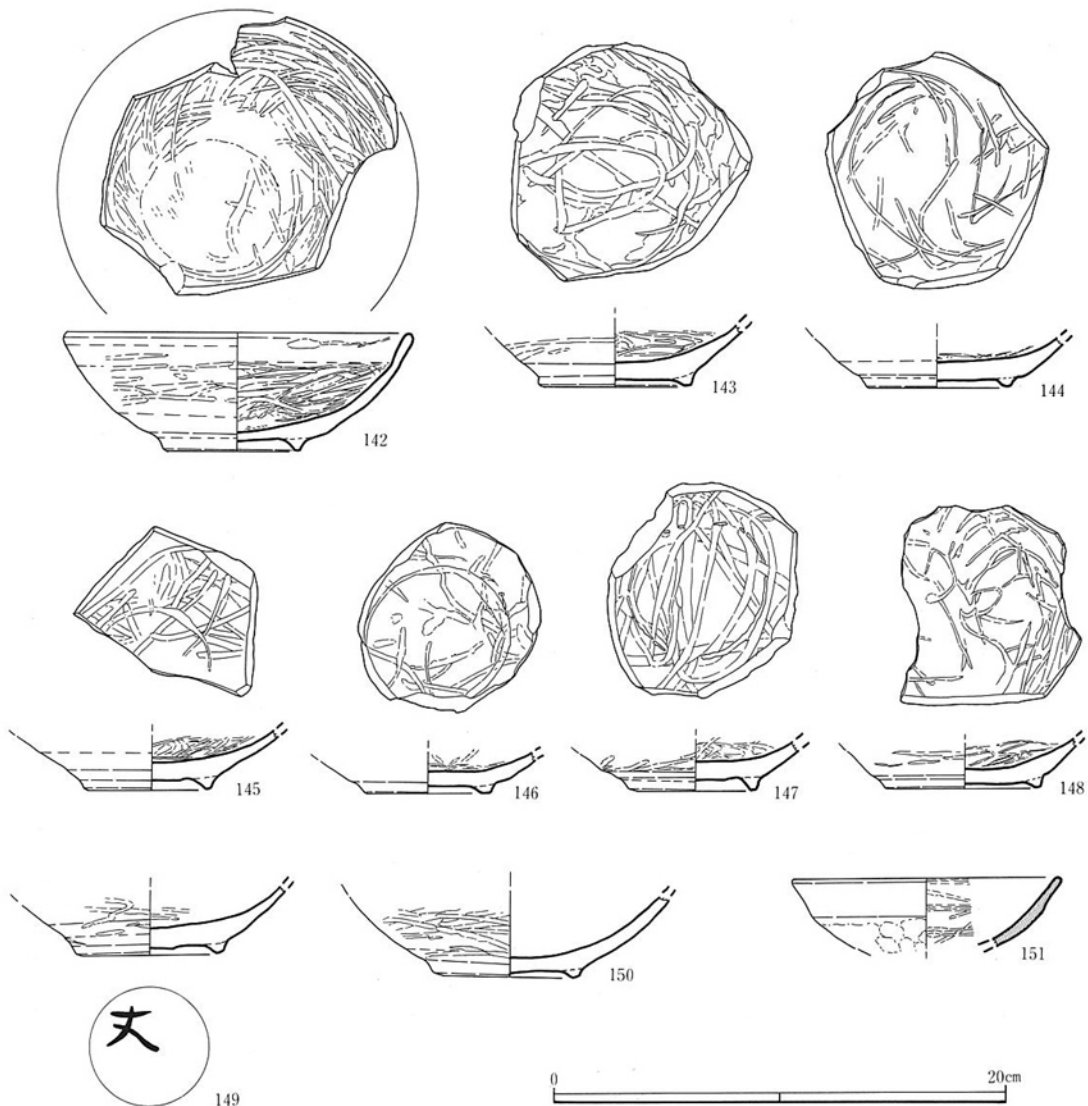


写真76 低湿地Aトレンチ (北から)



第77図 低湿地Aトレンチ土層断面図



第78図 低湿地A出土遺物実測図(1)

レンチ調査の結果、中央部で0.8mの深さをもつ凹地と考えられたが、調査区外(南方)に延びる谷地形の一部の可能性をもつ。堆積土からは、縄文時代から中世にかけての遺物が出土した。最も新しい遺物は16世紀に属する。この土層は下位では常に湧水がみられ、木製品とともに樹枝・種子等の植物遺体が比較的多く含まれている。

低湿地B 2区西方の丘陵(通称 西山)の山裾に平行するように、幅約20m、南北約100mの規模をもつが、調査区外(南方)に延びる谷地形に沿って形成された低湿地と考えられる。遺物の包含、湧水等は低湿地Aと同様である。この地区からは木製品の出土はほとんどみられない。

低湿地C 南北90m、東西15mにわたってオリブ黒色粘質土層の堆積が確認され、低位側(東方)に広がっているものと考えられる。この地点の堆積土からはほとんど遺物が出土しなかった。

第78~80図は低湿地A出土の遺物である。出土した土器は12~16世紀の土師器碗・杯が最も多い。実測図および写真に示したものの以外にも、マツの球果、堅果類の種子、シジミの貝殻等の自然遺物も出土している。

142~150は土師器碗である。いずれも灰白色で、底部は糸切り後に高台を貼り付ける。器表はあま

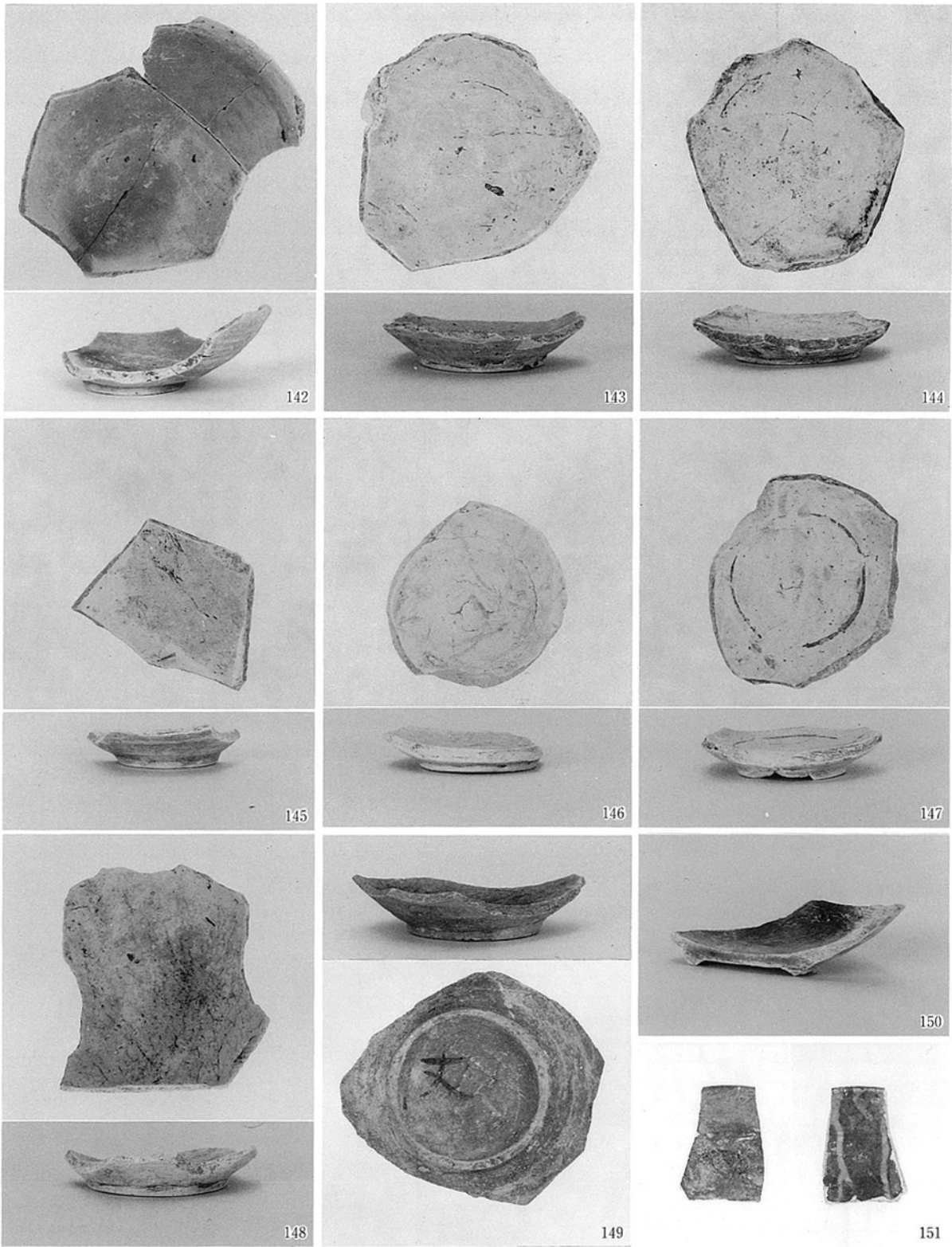
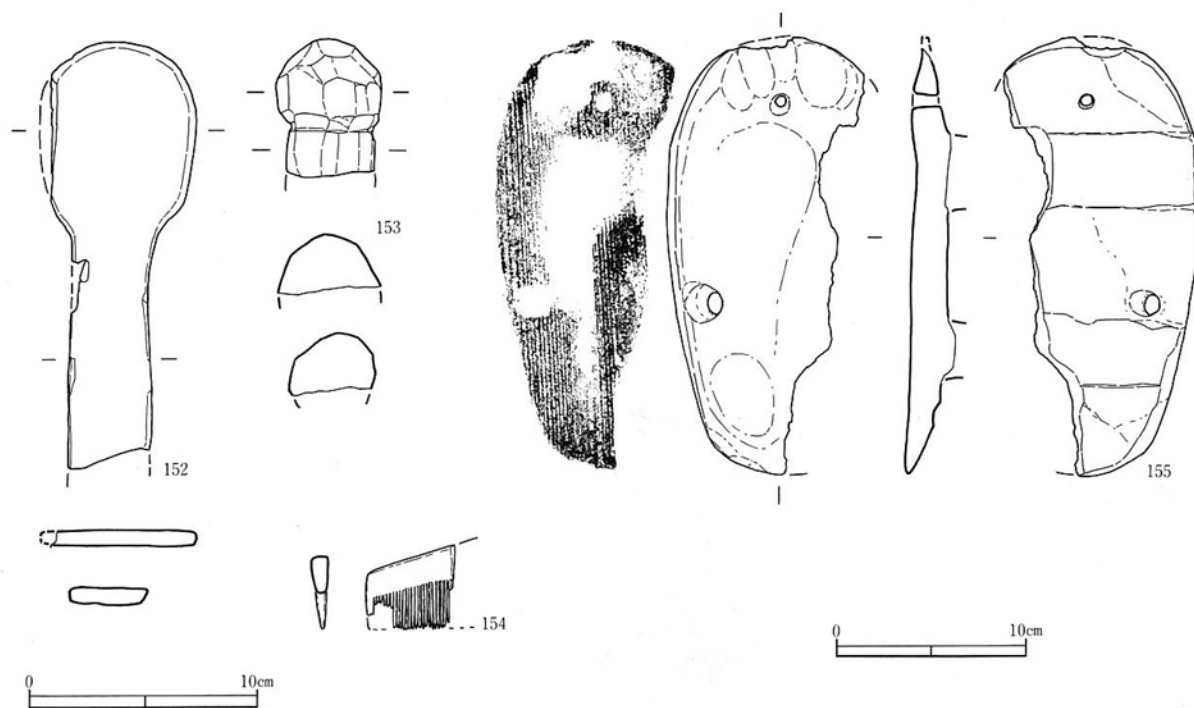


写真77 低湿地A出土遺物(1)

り風化を受けておらず、内面には密に、外面には簡略に施されたへら磨きの痕跡を明瞭にとどめる。

底部内面には重ね焼きの痕跡とみられる凹部または変色部が認められる。149は高台内に「丈」の墨書がある。151は瓦器椀である。内面には粗い暗文がみられ、外面体部下半には指頭圧痕が残る。畿内(和泉)からの搬入品と考えられる。152は杓子であり、下端部は炭化する。153は用途不明の木製品であり、粗く削ったままの状態である。154は櫛である。1 cmにつき4枚の歯が削り出される。155は下駄である。使用による摩耗により、使用者の左足裏の形状を比較的明瞭にとどめる。長さ23cm、厚さ



第79図 低湿地A出土遺物実測図(2)

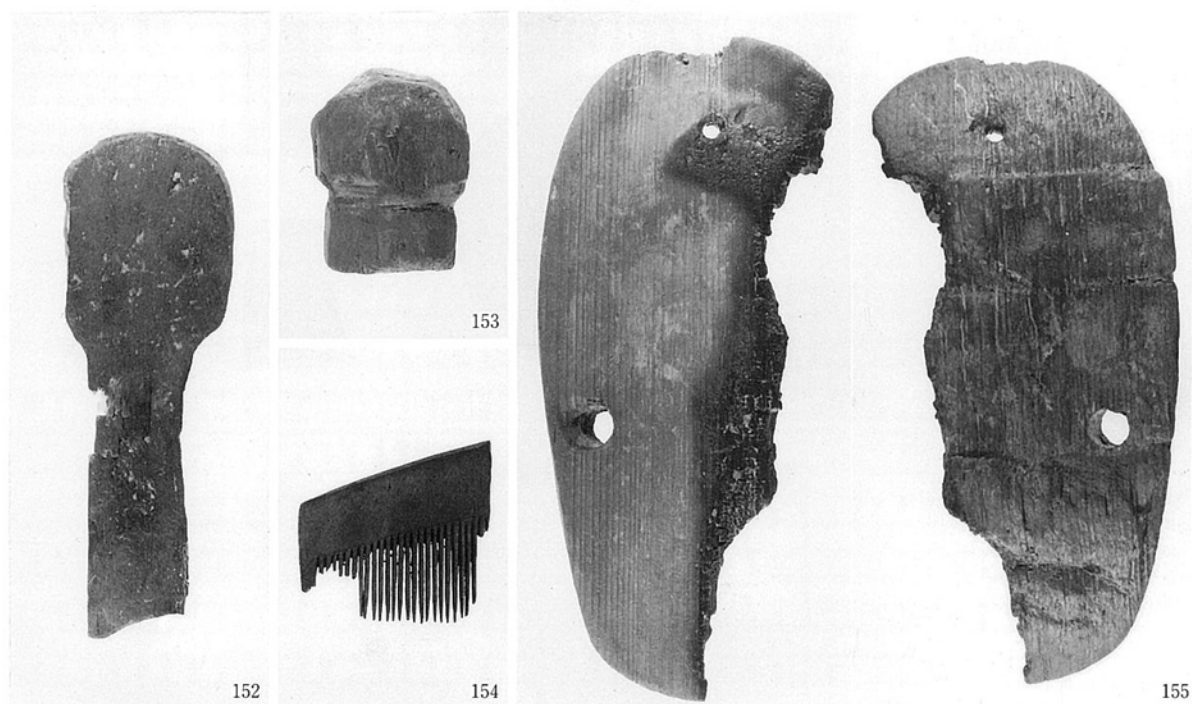
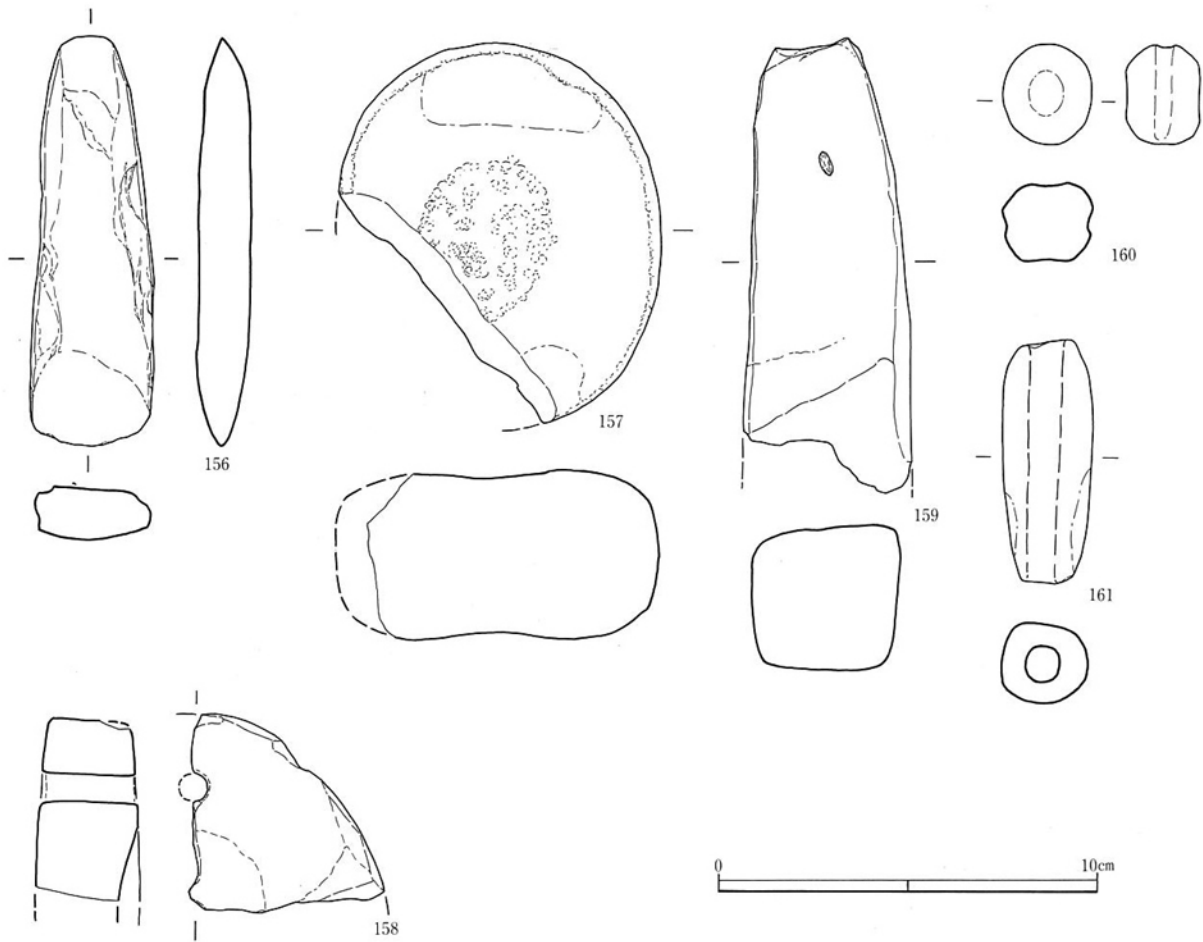


写真78 低湿地A出土遺物(2)



第80図 低湿地A出土遺物実測図（3）

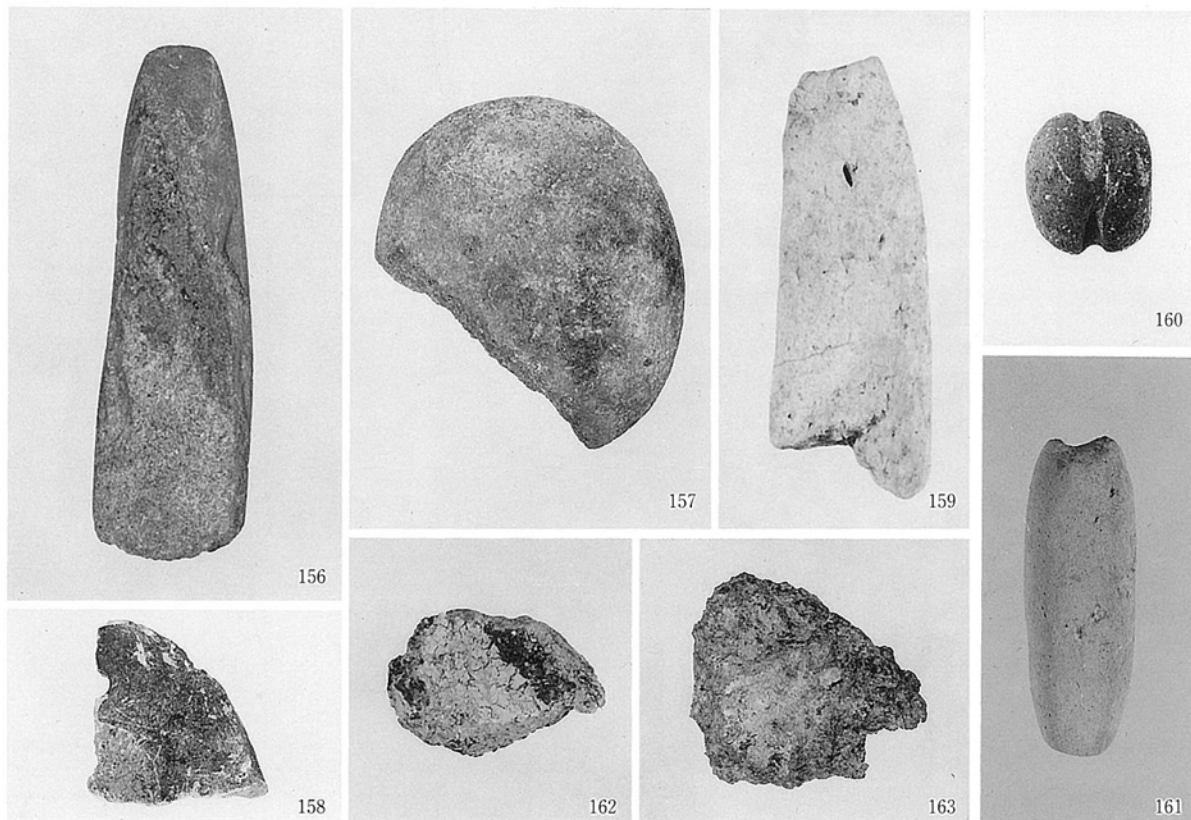
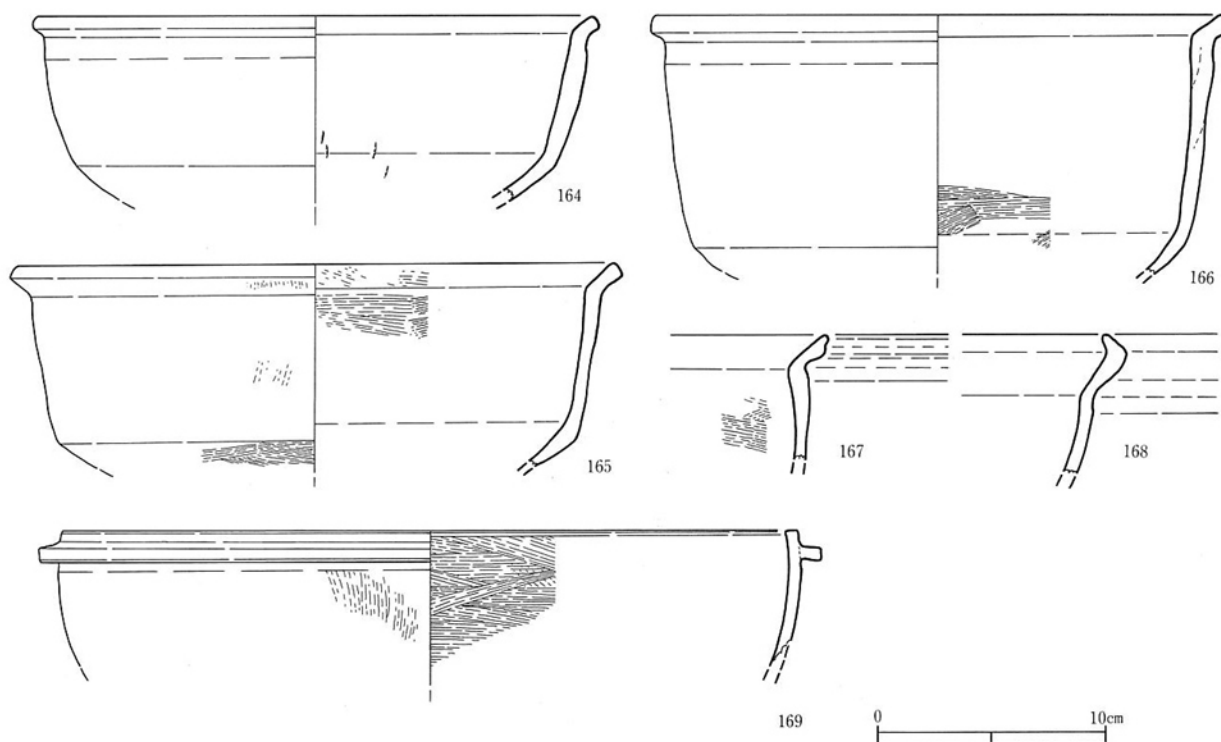


写真79 低湿地A出土遺物（3）

は最大2.0cmであり、一部は炭化する。2枚歯を削り出すが、折損している。156は小型の磨製石斧である。緑灰色の塩基性片岩製であり、両端に刃部をもつ。157は花崗岩の円礫を利用した叩き石である。周縁および両面中央には敲打痕が顕著である。158は用途不明の有孔滑石製品である。3cm近い厚さをもつことから、石鍋の転用品とは考えにくい。159は支脚状の土製品であり、窯道具の可能性をもつ遺物である。横断面は隅丸方形であり、靱圧痕が認められる。162（写真79）は最大厚4.0cmのルツボ口縁部である。灰白色を呈し、胎土には靱が多量に混入される。内面にはスラグが付着し、口縁端部には緑青がみられる。163（写真79）はスラグであり、表面には緑青がみられる。ルツボ破片およびスラグは銅生産に関する遺物と考えられ、2地区周辺で16世紀以前に銅生産が行われていたことを示している。



第81図 低湿地B出土遺物実測図（1）

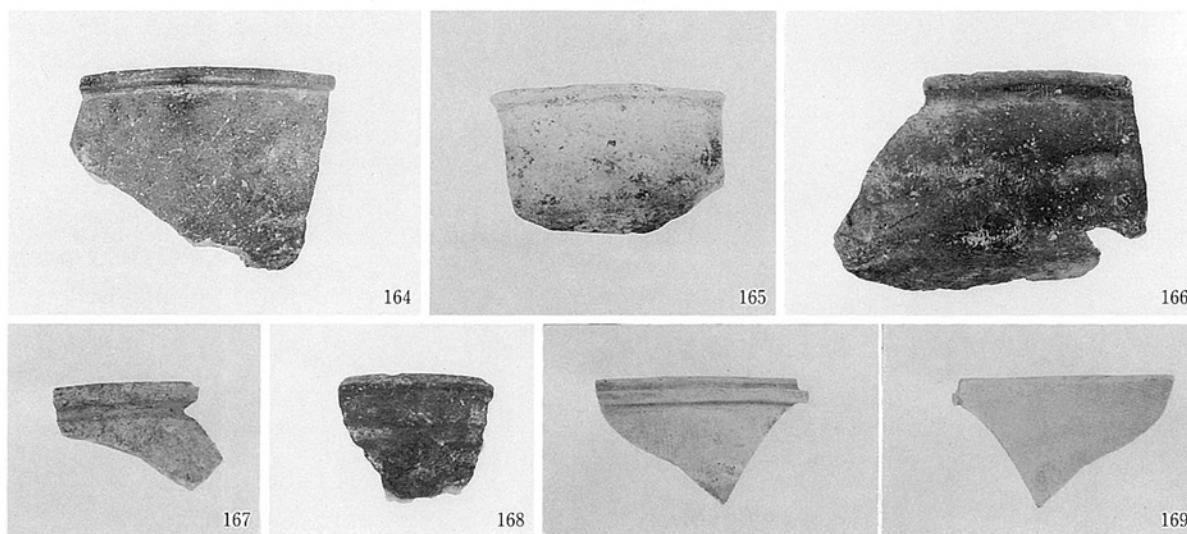
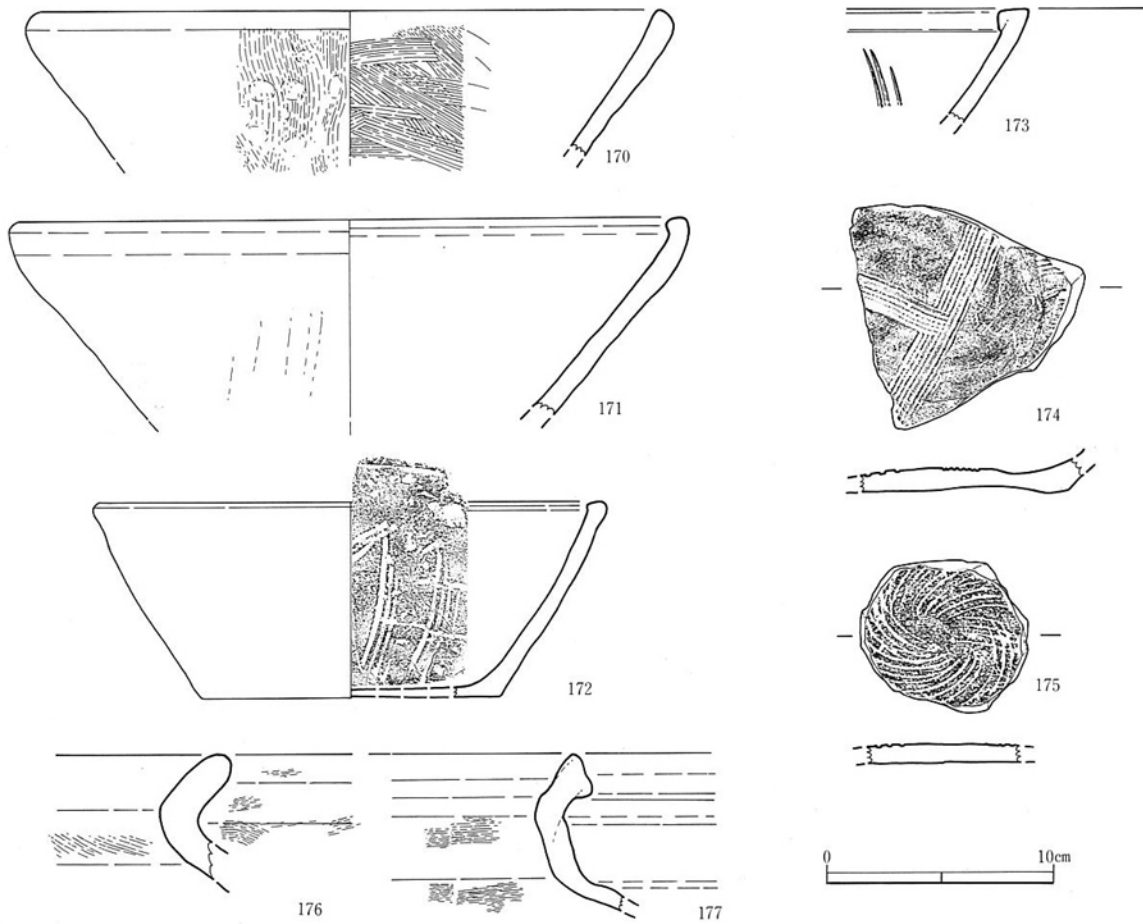


写真80 低湿地B出土遺物（1）

第81・82図、写真80・81は低湿地B出土遺物である。出土した遺物全体としては14～16世紀の瓦質土器鍋が最も多い。

164～166は土師質、167・168は瓦質の鍋である。164～167はいずれも底部外面をハケで調整しており、叩きの痕跡をとどめない。169は瓦質の羽釜である。170は土師質のこね鉢である。内・外面ともにハケ痕跡が顕著である。171は瓦質のこね鉢である。内・外面ともにナデによって仕上げる。体部外面には粗いハケ痕跡がわずかに残る。172は瓦質の摺鉢である。172は4本を単位とする櫛目をもつ比較的小型品である。174・175は底部片であり、いずれも内面に文様風の卸目をもつ。174は9本、175は4本単位の櫛目である。176は土師質の甕 177は土師質の壺である。 (岩崎)



第82図 低湿地B出土遺物実測図(2)

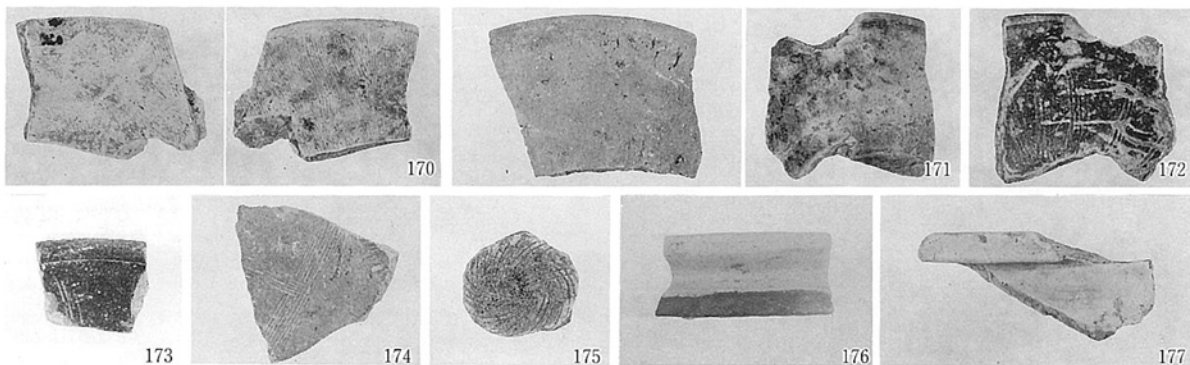
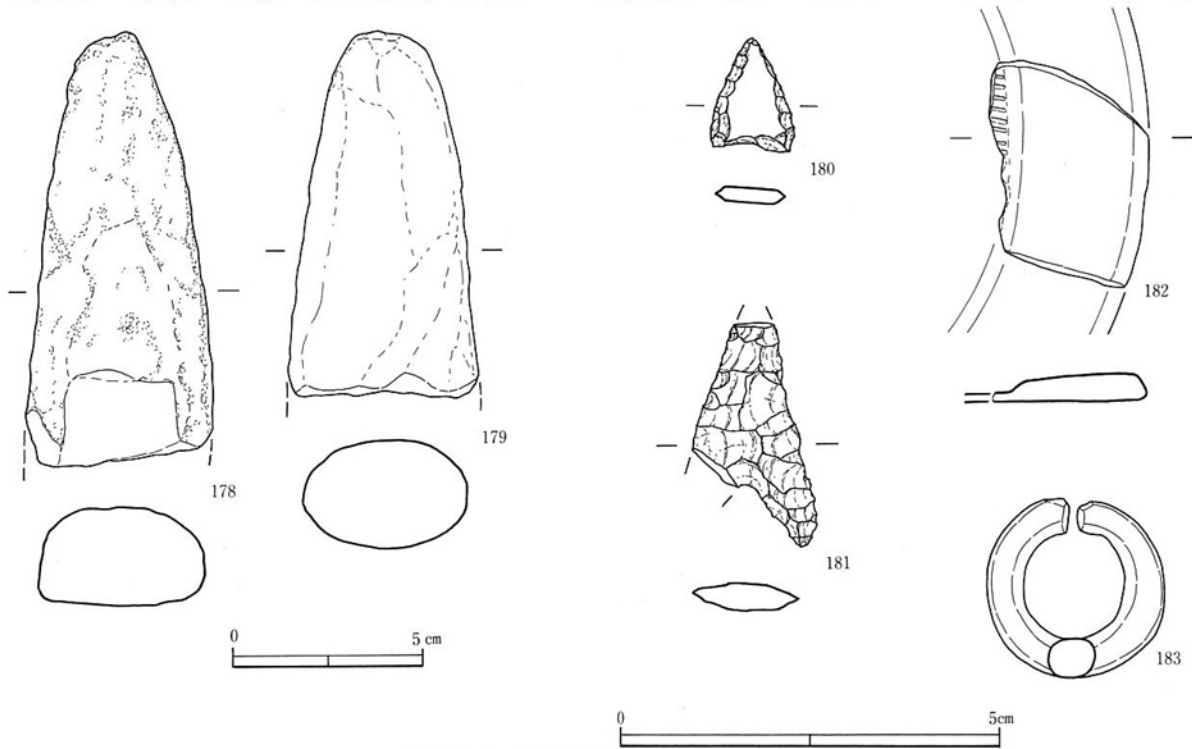


写真81 低湿地B出土遺物(2)

(8) 表土層出土の遺物

178は2地区、179は3地区出土の砂岩製の石斧である。179は表面が風化しており、敲打痕は不明瞭である。180・181は2地区で採集された打製石鏃である。180は安山岩製、181は灰色の黒曜石製である。182は3地区出土の銅鏡片である。穿孔・破断面の研磨等の加工痕は認められない。周縁側でやや厚味を増す平縁（最大厚4.0mm）の内側に櫛歯文が確認できる。外径は約12cmと推定される。187は2地区出土の銅製の耳環である。表面は風化しており、鍍金・鍍銀の痕跡をとどめない。（岩崎）



第83図 表土層出土の遺物実測図

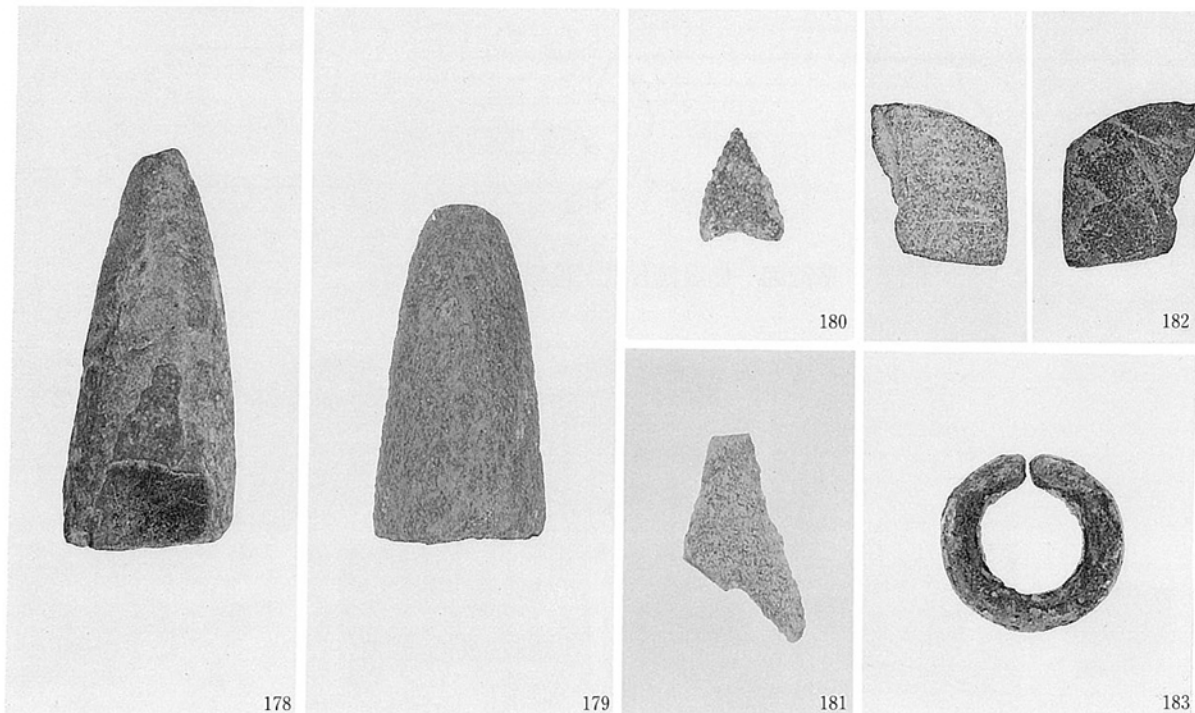


写真82 表土層出土の遺物

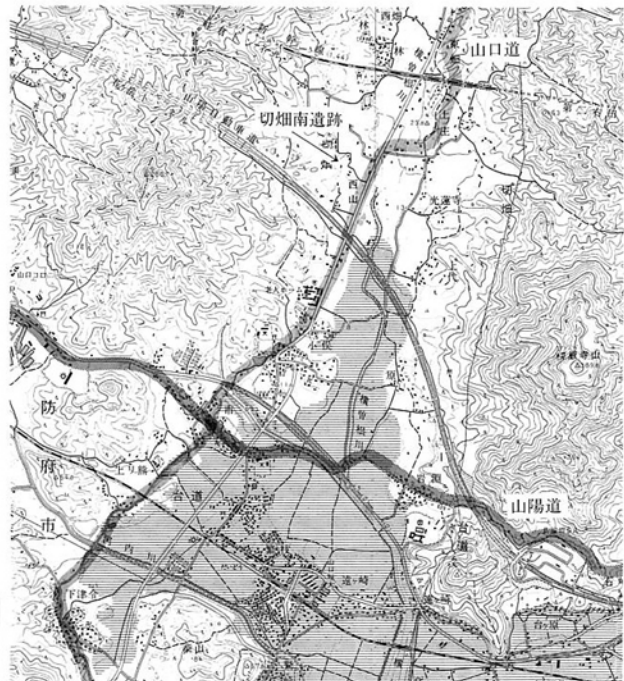
4 ま と め

平成10年の調査により、防府市大道の北部地域にあたる切畑南遺跡が中世から近世にわたり、断続的に営まれた集落遺跡であることが明らかとなった。主な遺構は、掘立柱建物跡16棟、溝状遺構11条、井戸1基、土坑18基、用途不明遺構11基、柱穴約900個である。主な遺物は、中世の土師器・瓦質土器・輸入磁器・石鍋、近世の陶器・磁器・瓦質土器・ガラス製品などである。また、表採遺物ではあるが、縄文・弥生時代の石器が数点、弥生時代の鏡片、古墳時代の耳環などが確認された。

遺跡全体を通じての歴史の変遷を概観すると、出土した石器・鏡片・耳環等から縄文時代・弥生時代・古墳時代を通じて、人々の生活の形跡をうかがい知ることができる。遺構・遺物の数量が多く確認されはじめるのは、13世紀代からで、本格的集落として形成されたのは、室町時代からだと考えられる。建物跡は平均的な規模で、すべて南北棟をさしている。これらは、時期的なものか地形に制約されたものかは確定することはできない。また、面的広がりについても、調査区設定の制約から具体的に把握することは困難であった。遺物において、興味深いのは2地区低湿地より検出された和泉産の瓦器椀、墨書土器や3地区の柱穴より検出された象嵌青磁である。李朝青磁等輸入磁器や墨書土器の検出によって、上層民の存在をうかがい知ることができる。また、瓦器椀の検出によって、人々の交流が頻繁に行われていたことが予想できる。

第90図は推定される中世期の海岸線・山口道や近世山陽道を示したものである。中世の山陽道は、岩淵から北に迂回し、原より小俣へ船で渡っていたようである。当時の運輸幹線は山陽道である。山口道は、大内氏の時代から山口盆地への物流ルートとして頻繁に使用されていた。これらのことから、切畑を含む大道北部地域が海運を含めた幹線ルートの分岐点として栄えたと推測できないだろうか。次に、出土遺物と佐野焼について考えてみたい。風土記注進案（三田尻宰判佐野村）に「壺鍋火鉢茶いらかし土瓶野風呂飯鉢居風呂井外輪之類」を焼いていたという記述があり、2地区S K05や3地区S E01から焙烙や風呂釜等の陶製の遺物が多数検出された。江戸時代後半頃から防府市の佐野窯で製造されていたようであり、現在の防府市・山口市周辺を中心として分布する。当時、佐野焼は防府市近郷に多く流通していた可能性がある。

今回、大道北部地域で発掘調査が行われたことにより、この地域における歴史的背景を明らかにするための貴重な資料を得ることができた。ただ、切畑遺跡の性格を述べるには資料不足である。次年度の成果を待ちたい。(椿)



第84図 中世の海岸線

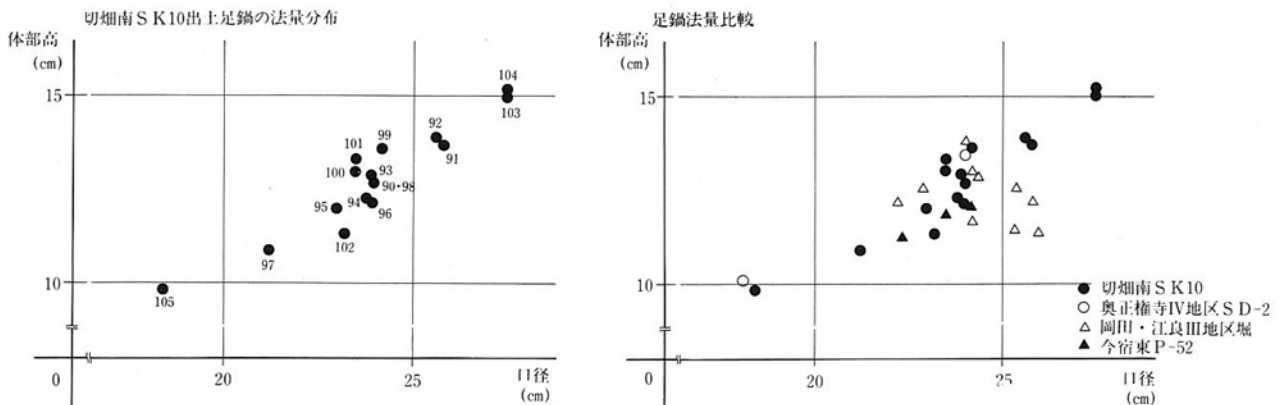
参考文献	山口県防府市教育委員会「続防府市史」	1981年
	山口県文書館編「防長風土記注進案」	1963年
	山口県教育委員会「下右田遺跡」	1978年
	山口県教育委員会「東禪寺・黒山遺跡Ⅰ」	1996年

切畑南遺跡S K10は瓦質土器足鍋を中心とする土器の良好な一括資料を提供した。切畑南遺跡S K10出土土器資料（以下、本資料と表記する）は山口県域の中世土器研究において重要な資料であり、多くの課題を提供するものである。以下、本資料に若干の検討を加える。

型式設定の問題 16点の足鍋（第58・59図）は口縁部の形状に着目すれば、①端部の屈曲が緩やかなもの、②端部の屈曲が強いもの、③端部を屈曲させず平坦におさめるもの、④平坦化した端部を外方へ拡張するものなどに分類できる（63ページ参照）。これらは従来の足鍋編年において、おのおのⅢ型式（新相）、Ⅳ型式、Ⅵ-A型式、Ⅵ-B型式と呼ばれてきたものであり、4者は型式的には①→②→③→④の順に出現するものと捉えられてきた。①～④の型式は従来の年代観に照らせば、15世紀前半から16世紀後半にわたるものであり、これまで共伴関係は明確ではなかった。足鍋は口縁部の形態変化を主な基準とした編年によって個々の年代を推定してきたが、本資料は複数の型式の足鍋が確実に共伴することを示しており、足鍋の編年は修正を迫られることになる。特に③・④（Ⅵ-A型式・Ⅵ-B型式）はその出現時期を引き上げる必要が生じている。

法量と規格性 第85図左は本資料の足鍋の法量分布を示したものであり（口径と体部高を計測、グラフ中の数字は遺物番号）、小型（105）・やや小型（97）・中型（90・93～96・98～102）・やや大型（91・92）・大型（103・104）に分類が可能であることがわかる。また、法量分布がほぼ一直線上にあることは、法量の大小に関わらず相似形につくられていることを示している。本遺構の足鍋を考える上で比較資料として奥正権寺遺跡Ⅳ地区S D-2（14世紀前半に比定）、岡田・江良遺跡Ⅲ地区堀中層（15世紀後半ないし16世紀前半に比定）、今宿東遺跡P-52（16世紀後半に比定）から出土した足鍋を取り上げた。第85図右はこれらを法量的に比較したものであり、時期の異なる資料でも法量においては口径24cm前後、体部高13cm前後が指向されていることが看取できる。また、本資料と初期の足鍋である奥正権寺遺跡資料を比較したとき、小型・中型で近似した法量をもつことがわかる。このことから小型・中型が初期から存在し、時期が降る本資料ではさらにいくつかの規格が加わっている可能性を指摘できる。

格子叩き 足鍋の底部外面にみられる叩き痕の格子目は一般的に小さいものが古く、時代が降るに

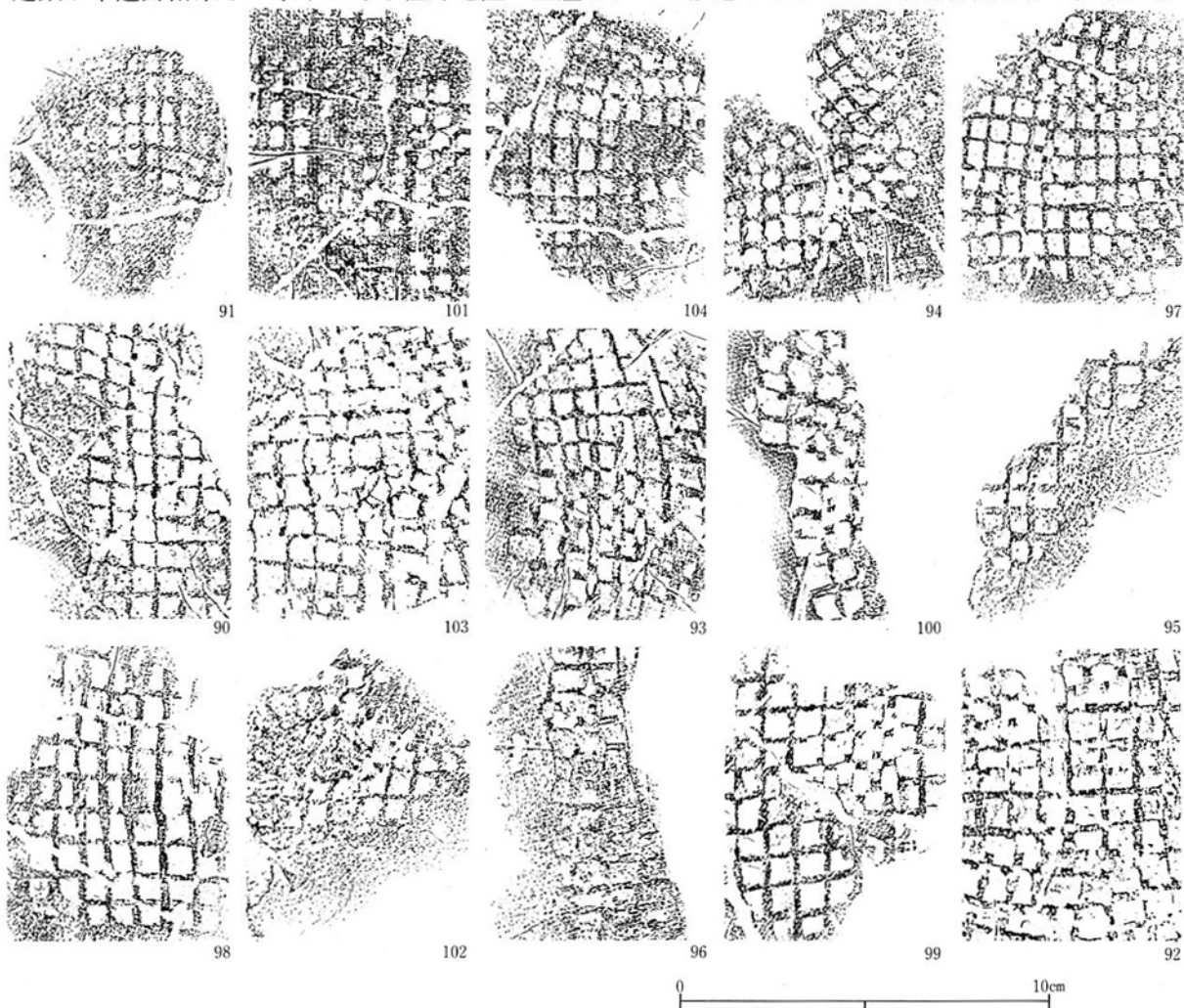


第85図 足鍋法量比較図

従って大きくなる。本資料の足鍋にみられる格子目は、凹部の長辺で5.0~7.0mm、短辺で3.5~5.5mmの幅をもつ（105は底部を欠失するため除く）。格子目の大小によって分類を試みたが、叩き痕の重なりが多く格子目単位の平均値が算出困難であるため明確な分類ができなかった。第86図は叩き痕の拓影である（図中の数字は遺物番号）。上段左から下段右へ、格子目の小さいものから大きいものへ順に配列した。これをみる限り、格子目の大小と口縁部形態および法量との明確な相関関係はないと判断できる。端的な例は91・92であり、両者は同様の口縁部形態と法量をもちながら、格子目では大小両極端にある。

杯・摺鉢の年代観 土師器杯（第58図87）は体部の傾斜角度・口径などから、大内氏館跡Ⅱ期またはⅢ期に位置付けられる。摺鉢については口縁部肥厚帯が厚みを失って上方へ伸びていることから、防長型摺鉢Ⅲ期新段階に位置付けられるものである。この型式の摺鉢は大内氏館跡Ⅲ期に位置付けられる土師器を共伴する例がある。以上のことから、本資料は大内氏館跡Ⅲ期に位置付けることが現時点では最も妥当性をち、実年代では15世紀末ないし16世紀前葉に該当するものと判断される。

生産地との関わり 本資料の足鍋は製作技法に統一性がみられることから、同一工人ないし同じ製作技術をもつ工人集団の生産品と考えられる。こうした製品が遠隔地にある消費遺跡で偶然に集積したとは考えにくく、本遺跡は足鍋生産地に比較的近い位置にあったものと解釈できよう。このことは、足鍋が本遺跡南東3km余りにある佐野地区で生産されたと推定されることとも整合性をもつ。（岩崎）



第86図 足鍋底部拓影

報告書抄録

ふりがな	きりはたみなみいせき
書名	切畑南遺跡
副書名	平成10年度県営ほ場整備事業に伴う発掘調査報告
巻次	
シリーズ名	山口県埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第12集
編集著者名	村岡和雄 椿徹 林信行 網本徳文 向上昭彦 岩崎仁志
編集機関	山口県埋蔵文化財センター
所在地	〒753-0073 山口県山口市春日町3-22 TEL 0839-23-1060
発行年月日	西暦1999年3月29日 (平成11年3月29日)

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
きりはたみなみいせき 切畑南遺跡	ほうふしきりはた 防府市切畑	35206		34°4'44"	131°29'54"	19980506) 19980918	12500	ほ場整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
切畑南遺跡	集落跡	中世 近世	掘建柱建物跡 16棟 溝 8条 井戸 1基 土坑 16基 用途不明遺構 15基	土師器 瓦質土器 陶器・磁器 木器 石製品	鏡片 耳環

山口県埋蔵文化財センター調査報告 第12集	
切畑南遺跡	
— 平成10年度県営ほ場整備事業に伴う発掘調査報告 —	
1999	
編集	財団法人 山口県教育財団 山口県埋蔵文化財センター (山口市春日町3-22)
発行	財団法人 山口県教育財団 山口県埋蔵文化財センター (山口市春日町3-22)
印刷	兎玉印刷株式会社 (宇部市明神町3丁目4-3)